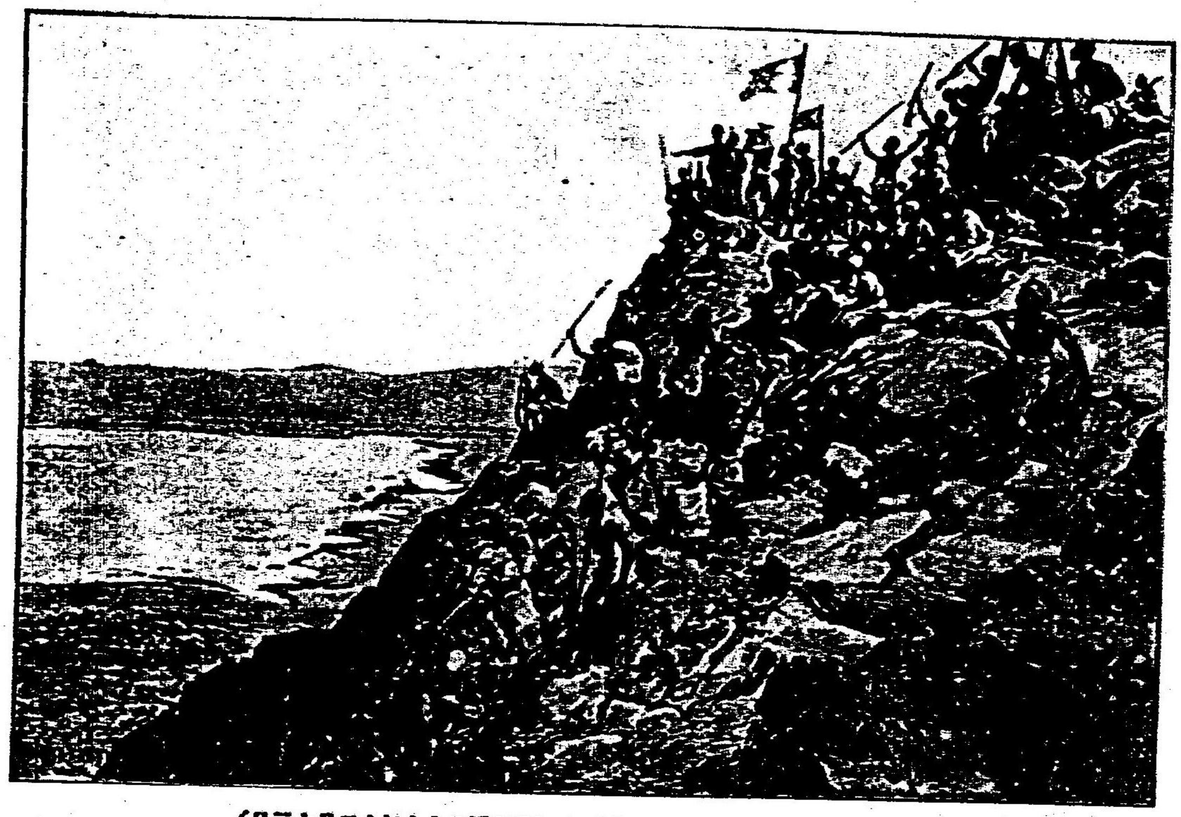
ン滅ベントカの滅亡劇ゆるる出たり。

國際亞米利加第一篇終



（一八八七年十二月十三日）　暴風の間ダンアイチ、トイ、ハミア

闇黒亞弗利加第二編

目次

第八章　バンガの流よりウガローワに向ふ

邊布に於ける移住の經路○ウチリの村○アビシバの居留地○アビシバに於ける殺人事件の顛末○土人の爲に一團を殺す○ベーアス中尉の負傷○敵を捜索す○惨狀○ザンゼーバル人の捕虜前○ウエフリンの一隊遂を失す○一行中の負傷者○病兵○カルフリン。サーガ北極の死尖○一隊の到着○マンガの邊布○人々が集合す○ポロ河○ビンザの陣地○食物の供給○深刻な無益に使用す○アルバルトの湖に臨る中途○ウガローワの部下との衝突○逃亡者○一隊ヒッポーの沼地非にアバクビの邊布に於て食物す○打殺されたるナバヒの居留地○メンビリに於ける敵○遂に脱逃する者なり○アウアの部長ウガローワ○ウガローワの調停○アウアの居留地を防ふ○殺人種族の第一の種類○ウガローワとの協議

第九章　ウガローワの所よりキロンガ、ロンガの地に向ふ

ウガローワ三人のザンゼーバル脱走者を送り來る○食事免例を祭す○イキスプレス旅館館○フランドとの談話○レンド河○強盜邊布の歸路○食物の欠乏○キロンガ、ロンガの部下○イエル非にイチュリ河の合合○蛮族の有様非に人數○チルソン大將の疾病○我々使者を勧めキロンガ、ロンガの許に送る○疾病者の看護○ランゲー非に珠（ザンバル）○食物の欠乏○農耕の食糧○好みの品々○交換定するものあり○アスマニ湖る○食事の有様を報告す○ウレザの見解○ウマリの歸宅○命の恩恵○食用の塩に財産する○一同マンムユマの路を進んで共村に到着す

第十章　マンユエマ人と共にイボトに在り

イボトに於ける滞在の期間○彼等が之を得るの方法○マンユエマの眼鏡井に於ける彼等の探索○一時の食を防ぐの方法○大酋長ラベロヤーに出て敗かれたる十字軍○余等がザンゼーバルの酋長○チルソン大尉井に共間下に關する心配○一行食物の為に武器を賣る○組織鉄の發明り之を説明せんとを探求す○ウレゲ通訳者の話を得て聞る○チルソン大尉の決助に由てマンユエマ酋長に約したる約束○復れの旅行に於けるロッフソンの報告○チルソン大尉井に外科醫ペータの報告○余イスメーリと報見弟の約を結ぶ○一同イボトを去る

第十一章　森林を通じてマザンボニの路に向ふ

パレッセの國に於て○彼等の家井に共間○アルヤの土人○幾人種の第一の村○行程遠なるを得たり○マンアンガの所より の路○東四インヂカルに於て休息す○三日井にカムスとの小紛擾○一同イブウヒリに着す○カムス井に「卑劣なるザンゼーバル人」○イブウヒリ從在○十分なる糧食○一行の有様井に彼等が組織せし所のもの○カムス數十人と近遠を叫號す○山路の一部を渡て聞る○カムス、ボルヨーを復讐す併し之を許せり○ロッフソン氏チルソン大尉の決助よりして聞る○カムス井にマンユエマ人の出發○イボトのキロンガ、ロンガ會此に對する根狀の記錄○ンバ白般す○同一部に於けるサリの回想○ステーアス中將報狀を尽悟す○イブウヒリに於ける集會井に拜謁成○一行の進歩せる狀況○ボルヨーの村○パレッセの風俗○東部インヂンドル○一間森林の外側に進す○終に日光を見るを得たり一段落なる草野○異なる牧場の首○インヂンカ井に共穀物○ロッフの穀物○再びイチュリ河に出づ○一同廣原の上に在り○村々に於ける家族○小組織隊の方法○パブッセの鄉邑○余等がムビリの保護○土人合勢を請ふ○イチュリの河○アブンゲマの土人○イブウヒリを出でゝより余等の食物○マザンボニの路○東部イチュリ○組織隊○土人の形勢偵察○ウンゼラカムの耳上に於ける余等の合勢○大組なに最近なる○土人との和睦○余等は彼等を追ひ散らすの止む不得ざるに至れり○和成る○ウンデムスヤの耳敵

闇黑亞弗利加第二編目次終

闇黑亞弗利加第二編

ヘンリー、エム、スタンレー著
五・洲　矢部新作譯

第八章　バンガの瀧よりウガローヲに向ふ

湯布に於ける浮度の卿邪○ウチリの村○アビンバの居留地○アビンバに於ける殺人事件の結問○主人の爲に一郡を燒す○スターブス中尉の負傷○敵を捜索す○港穴○ヂンゴーバル人の無法則○ヂンゴンの一隊近く來る○一行中の負傷者○蠻族○カルフリン。サーブ其他の死去○一隊の到着○マンガの湯布○人々を染介す○チボー河○ヒンザの隊長○食物の供給○蠻族を鎮壓に使用す○アルバルトの側に迫る中途○ウガローヲの部下との衝突○逃亡者○一隊ヒンボーの陣地非にアバンゴの湯布に於て會發す○打破されたるナバヒの居留地○メンビヲに於ける第○夏に脫逃する者なり○アラブの酋長ウガローヲ○ウガローヲの報告○アラブの居留地を訪ふ○殺人補償の第一の種類○ウガローヲとの論議

余等は一同バンガの瀧の上部に於て會營せり。此會營の正面二哩餘の河中に一島あり、其形恰も水上砲臺の如く、中に一村の軒を連ねるあり、見る所殆ど水面と平行點に在るに似たり。七日に於て余等は此島を探檢せしが、急流激湍を隔てゝ船、容易に近く能はず、幾多冒險の後漸く島上に到り見しに、元來此島は平かなる一大巨石にして水面を去ること僅かに數寸、而して島内の凹處所には、左岸より持

ち來りたる土を以て塡めたるものも少なからず。此島の縱は二百尺横は九十尺許、上に六十個の小屋あり、小屋の周圍には樹木茂しくは獨木舟の破れ板を以て防柵を造れり。思ふに是れ土民の寨ならん。此時、此島の低き部分は水面を出ると恰も六寸に過ぎざりし。

此日又他の一轉事を生出せり、舟行隊、バンガの流よりオサヤンビの流に沙るの間に於て、獨木舟の船手は不注意にも急流の中に在つて舟を樹の枝に横へ、側面より水勢の服する所と爲りて殆なくも之を轉覆し去れり。十一個の旋條銃中九個は拾ひ上ぐるを得しが、火藥の二箱は損失に歸せり。ザンジーバル人は殆ど恐る「危難」を首ふことを、「危難」に際會する迄は知らざるものゝ如く、急流の中にもせよ、激湍の間にもあれ平々、洸々然として進むなり、彼等が大胆なるが爲に非らず、事物に不注意なるが爲なり。余は彼等が之れを爲すの様を見る毎に實に心を痛めたり。又余は彼等に對する間に於て如何に人性は元來剛愎なるものかを知れり。余は敢て道途の險難を思へず、然れども彼等の行爲は余をして非常に煩勞苦悶を嘗めしめたり。余は事毎に彼等に注意を與へたり、彼等は事毎に之れに注意せざるなり。陸上に在つては又甚輕易の風を以て森林の間に徘徊し、容易に踪跡を失ひ、容易に敵人の爲に死殺せらるゝなり。斯くて余等は已に八人の人丼に十七箇の旋條銃を失へり。

八日に於て、一行は舟をサヤンビの流の上部に漕ぎ、ウチリの下、數哩の所に倉營を爲せり。翌日

余等はウチリの村に達せしに、此地の建築は從來見來りたる村々に比して最なる所あり、家は皆三角形の屋根を戴き、周圍には廣さ九寸厚さ四寸許の木片を連ねたる、高さ六尺許の柵を圍らし、宛然一小砦の形を爲せり。家は兩側に於て併列し、其間に三間餘の街路あり。余の視察する所に由れば此建築は頗る强固なるものにて、旋條銃を以てするも容易に之れを破る能はず、若し是等の各部に於て十數の男士、彼の弓と毒矢とを以て堅めたらんには、敵に向て非常の苦難と損害とを與ふるに堪るべしと思へり。

十日は、余等沼在の事に決し、各地に向つて糧食等を派遣せしが、格別の獲物なく、僅かに二日分を集めたるに過ぎず。カルフワンと名づけられたる一人は敵の爲に氣管を射られしが、其傷の樣は如何にも彼れが事を爲すに不注意なりしの實を顯するに足れり。カルフワンが西藤の林を沙顧するの間に、土人は殆ど二十尺許の距離に在り、毒矢を以て彼の咽を射しなり。矢傷は僅に針の尖にて突きたるものに過ぎずして、ドクター、バーク之れを治療せしかば、格別の事は之れなかるべしと思ひしに、結果は數日の後、爲に其生を終らしむるに至れり。

十一日、舟行隊は幾多岩石の爲に急かれたる彈流激湍に對して進みしを以て其進行至て遲く、陸行隊は已に舟所の森林を穿つてエンジウェデに達せしかども、余等は翌日に迄る迄之れに追着すると能は

ざりし。余等の糧食は過多の勞力の爲に著しく減却せしかば、此日再び人數を送つて之れを集めしめしに、三日分の芭蕉の實を得て歸れり。十三日に、余等はアビンパに進めり、此地には五箇の大なる村ありて其中の二箇はルク川の上部に於て家を列ねたり。

舟行隊は先づルク川の上なる一村を占據せり。清潔なる一條の街路は二列の小屋の間を眞直に馳せ、各小屋は皆高堅なる柵を以て周圍を圍めり。近隣の田畝には豐熟せる芭蕉の林を有し、其外圍は例に由て圍らすに幾萬無數の森林を以てせり。又此川の口より村落の端れ迄は一百ヤード程、厚く迄て連ねたる森林の在るあつて、土人の路は數條に分れて此中を通じたり。此村とアルウィミ河との間に、五十ヤード許に沙りたる材木の積堆するものあるを見る。余等川を横切つて之れを渡らんとするに際し、土人等の、芭蕉林或は其他の所に隱れて伺ふものあるを知りければ、十分彈藥を準備して之れに供へ、以て僅かに事なきを得たり。

一隊遂く川を渡りし時に、余は一の殺人罪を糾問すべき折に會せり去る十二日、エンクウェヂに在り、我がザンゾーバル人の一人は余營外に於て銃丸を以て殺されたり、是に於て個は隊中のもの復讐の爲に之を爲せしものなりとの嫌疑起れり。此間余は二人の頭領に命じ部下の四十人を率ひて川を渡り、此川の南西に當り、翌日の糧食に向つて十分の見込ありや否やを視察せしめんとを欲せり。偖て余の

假法庭は開かれたり、一隊人正に其證跡を探述するに當り、突然砲聲起り漸くにして、非常に激烈を加へたり。之を聽くスクーアス中尉は直に五十人を引率して、急ぎ川の方に赴けり。余の考にては已に四十の銃砲に加ふるに五十を以てしたれば、土人に對するに於て何かあらんと思ひ、再び罪人の審問を始めしが、銃砲の聲は久しきに沙つて愈よ激しく、其樣非常の狀況を呈せり。余はドクター。ヂルンソンと共に殘餘の人々を率ひて其場所に馳せ付けしに、此時スクーアス中尉は恰も左方の胸に敵の矢を受けて鮮血の淋漓たるを見る。已にして余は又余の周圍に木葉の點々、散するあるに心附きて之を見れば則ち矢飛んで恰も雨の如し。スクーアス中尉をドクターに托して後、余は事實を探りし折に、我が一隊は地に臥きて對岸なる森中に向つて、頻りに發砲を爲せり。勿論土人等は此中に埋伏せるものならんが、余は之れを捨ずる能はず、川は直ぐ前に横はれり。聽く所に山れば、余等の觀察隊、船に乘つて此河を渡らんとせしに、土人は遽に對岸に見はれ出で、弓を揮へて戰鬪を爲しければ、我が兵之れに驚き、何れも船底に伏して、靜かに櫂を漕ぎ、此岸に歸りて、然る後銃を取り之に對するに至りしなり。同時にスクーアス中尉は彼等の間に馳せ入り、以て等しく發砲を爲せしが、敵は他の土民に比して餘程手剛きものなりし。頃刻にして中尉は矢を胸に受け、退却の間に自ら之れを引き拔きしが、他の五人も同じく之れが爲に負傷せり。是等の話を聽き終つて間もなく、余は始めて對岸の林

間に人數あるを認めしかば之れに向つて激しく發砲を爲さしめしに、彼等は一同鬨聲の叫を擧げ、是より二分間を經て最早や矢を放つことを止め四方に散亂せり。依て余等は數十の機敏なる銃手を河岸に排列して敵の動靜を觀察せしめ、餘は一同退却せり。

夜に至り、內地の森林間に搜索を試みたる觀察者等は七匹の山羊を獲て歸れり、彼等が旗船場に來るや、土人の一隊將に應援を爲さんが爲に奔走せるものあるを視、之に砲擊を加へて以て解散せしめたり。

十四日拂曉、余等は二隊を分つて敵の搜索を爲さしめ、ナルンン大尉又更に一隊を率ひて森林の內部を觀察す。須臾にして余等鐵砲の發を耳にし、敵勢又大に强剛なるものあるに似たり。第一隊に於て爆裂銃を放つ、併し敵は厚密なる林叢中に潛伏するを以て著しく其功を奏する能はず、又彼等は未だ爆裂銃の何物たるを知らざるを以て敢て其背に驚かざるなり。殆ど三百個の丸を空ふして而して後に敵勢は僅に靜まれり。其中銃丸を以て擊ち留めしものは四人に過ぎずして、我が隊又四人の負傷者を出せしが、其矢の尖は何れも「ローバル」製樹膠色の汁を以て染めたり。敵の一屍は檢閲の爲に余の前に持ち來されたり。頭には鍮にて造りたる甲類を戴き、首には同じく鍮製の鎖を纏ひ、其間には諸所に猿猴の齒を夾み、其身体は胸より腹に沙りて二條の斑紋を連ねたり。又他の一屍、渡船場に橫はり

しものを見しが、之れは前に記り、人類の齒を連ねて首飾を造り、頭には鉢盂然たる鐵甲を冠せり。而して左の腕には山羊の皮を以て製したる寸許の盾ひを有せしが、個は弓弦よりして腕を保護せんが爲のものなるべし。

彼等土人を近所より盡く逐拂し去りしの後、人を派して糧食を匯集せしめしに、少時にしてアビシンバの倉庫に、四日分の食物を貯ふを得たり。

ステーアス中尉の傷は、直徑に於て一インチの五分の一にして、一インチ四分の一程心臟の下に當り、而して其矢の入り込みし深さは一インチ半なり。他の人々は或は手頸或は腕其一は背部に於て矢を受けたり。此時に於て余等は此矢の尖を染めたる樹膠色のものは如何なるものなるやを知らず、又其乾きし時著しく濕はひし時に如何なる功用を與ふるものなるやを考へず、ドクターの如きも唯傷口に水を注ぎ入れて之を洗ふに過ぎざりしが、後に成るヂンゲーバル人の告ぐる所に依れば、是れなんち彼の「インデヤ樹膠」より製する所の毒汁なりしなり。更に土人の言ふ所を聽くに、此毒汁は「アクム」草を壓迫して取りたる汁液にして、再三再四之を沸騰せしめ、其濃厚と爲るを待つて之れに脂肪を加へ、而して之を矢に著くるものなりと言へり。彼等土人は能く之を以て象其他の巨獸を殺すなり、さすれば人を殺すに於て何かあらん。凡て是等の話は余等をして心痛せしめたり、其始ての故を

以て殊に心痛せしめたり。余等は負傷者の腕若しくは胸に於て針尖の如き穴を見るのみ、よもや是れにて其生命を奪ふには至らじと思ひ、スターアス氏並に他九人の負傷者の爲に此話の虛誕ならんとを祈れり。

矢は至て細く、黑色の木を以て造りたるものにて、二尺四寸程長く、其尖は軟かき火の上に加へて、徐ろに之を焼きたるものなり。矢の本には細き溝あり、之れに木葉を植へて飛行に便にし、而して其尖きは實に銳尖にして恰も針の如きものあり。此尖より五分許の所に、二寸許に渉つて屈曲したる凸尖あり、以て矢が一度物躰に入りし以上は容易に脱却する能はざらしむ。斯くして後に之れを例の毒汁にひたし、又之を木の葉にくるみ、而して後始めて之を筒の中に收むるなり。他の場所に於ては此毒汁は黑色のものを用ゐ、其樹は新らしき時に於ては恰も「スポックホルム、塗液」の如くなれども、臭ひ極めて惡しゝ。各筒の中には殆ど一百の矢を貯ふ。余等此矢を造るの方法を知るに及んで、愈よ彼等負傷者に向つての心痛を加へたり。

弓は强剛なる褐色の木を以て造りたるものにて、長さは三尺許、弦は十分に引き堅めたる瓜田製のものを以て造れり。此弓矢の力を試みんが爲に、余は六尺の距離に於て、ブリキ製ビスケットの容器を射しに、容易に一面より他の面を貫き、又二百ヤードの所に一樹あるを認めければ、其最高の枝に向

つて矢を放ちしに、矢は之を越へて遙に前方に落ちたり。是に於て余等は始めて、此木製の弓矢は中々侮るべからざるものなることを知れり。思ふに少許の距離に於ては容易に人体を一貫するに足るべし。一百二十歩の距離に於て鳥を射るに其狙の遊ふことは僅に一インチ内外に過ぎず。

八月十五日の正午に於て、陸行隊はクエンメン氏先導の下に、アビンバの村を出發せり。土人の告ぐる所に由れば、此地を去ること遠からざるの後に於て、三箇の池ありとありければ、余は此山をクエンメンに告げて、河に沿ふて午後二時半頃に、都合好き場所に留るべきと、並に余は一艘の鋼鐵舟と十四の獨木舟とを以てして、之を急ぎなば、一時間にして彼れの地に達すべければ、余は先づ陸行隊の後部なるサルンンの出發を待つて着手すべきと等を留れり。此事は又他の諸頭領等にも告げたり。

余等が此日正午迄出立を延引せし所以は、別來勢猟を爲す時に於て五人の失踪者あることを知りしを以てなり。彼等は遠に十時頃に至て歸り來れり、斯く許容をも待ずして勝手に森林に徘徊するとは、我が隊の爲に小事に非らず、厳重に之を取り締るに非らざれば非常なる過失を來すべきを以て、余は此日彼等に十分の警戒を加へしなり。

ザンゼーバル人は余が甘てもの記述せしが如く、實に危難を危難とせざるなり、斯くの如きの行爲は時としては剛勇大膽の性格と誤認せらるゝことあり、併し真に大膽なるものは危難を危難として之を避す

るの道を知るものならざるべからず。彼等は危難を危難と知らずして大膽なるものなり、寧ろ盲目者、蛇を恐れざるの類なり。動物は先天の性に於て危難を避くるとを知れり、併し是等の人は、性なく、理なく、考慮なく、又記憶なきに似たり。彼等の頭腦は殆ど空漠なり。敵の潛伏するものあり、之れに注意せよとの尤も逼迫せる注告に對し、又掛くの如き事を爲せば滅亡に處すべしとの法律に對して毫も其心を用ゆるとを知らず。彼等は萬死の途に出入せるなり、途上到る所に鍬中の彼等の足を咀ふものあり、食人種等は彼等の肉を喰はんとを唯一の樂として林間に徘徊せるなり、詭譎なる敵は屋上より若しくは樹陰より彼等の眼かんとを待ち、而して所として陷穽は彼等を、自ら生滅地獄に落さんが爲に設けあるなり。彼等は毫も之れを意とせず、彼等は自ら危難に陥りし時に非らざれは之を脱せんとを勉めざるなり、併し茲に至ては最早脱するの道なきなり。其餘、彼等は至て凶膽なるなり、敵あり、矢を亂射するに當てや安全なる屋内に在つて尚は戰慄し、決心を以て悠々此間に進み出で、以て爲す所を爲すが如きに至ては彼等は殆ど堪へざるなり。通行の際に在つて、彼等は能く他の目を避けて林藪中に潛むとを知る、然れども若し茲に盤人の餘を以て立つものあれば、忽ち膽を失ひ、叫喚して逃げ去るに至る。彼等は食物を得んとの一念の爲には偶り能く數哩の外に徘徊すれども、一朝土人の怒號を聽く時は、其手にする所の銃砲を用ゆるをだに爲し得ず、之を路に擲げ棄て、以て逃げ去るなり。

彼等は悠然として芭蕉の林を逍遥す、然れども忽ち一矢の耳邊に嘶くものあれば、其勇氣は心を拂つて四肢を地に伏し、以て敵人の爲す所に任すに至る。彼等は「路に落ちたるを拾はず」の太平時代を夢みて自由に荷物を掠奪せんとし、一隊數哩の長きに沙つて蜿蜒たるを見るも、忽ち凶ありと聽く時は、凡ての感情は彼等の心を去つて唯、一に恐怖の念を止むるのみ。現在倉營に於ける三百七十人の中に於て二百五十人は疑もなく曾此種の人なり。彼等は、此際に於ては彼等の生命ともなり精神ともなるべき施條銃を見ると、恰も厄介物を運ぶに異ならずして、人若し輕易なるスタッキを與ふるものあれば、彼等は喜んで之れを交易するに至るべきなり。

前日、サンターベル人の廻館等は部下の酋來を容れて余の前に來り、「以後晩食に出掛くる時は英の吏員を要せざるとを告げ、且つ彼の吏員の指揮するが如くに、絶へず「進め〳〵、進れ〳〵」の命令を下し、余等にして若し意を留めて之れを聽くに至らしめは誰れか能く芭蕉の實を銜むるの間を待てと彼等は言へり。

余曰く「實に然り、尤もの陳述なり。併し余は今汝等が果して能く獨立して之れを爲すを得るや否を實驗すべし。彼の芭蕉の林は是れより十五分間に達するを得べし、汝等は一時間以内に歸らざるべからず。よろしく之を試むべし」。

彼等の性質を以てして何でふ時間の何物たるを知り得べき。余の前を立ち去るや否や忽ち約束を忘却し、各其意の欲する所に任せて遊戯を爲す。幸の群、家の隊と雖ども漸くは散漫ならざるべし。一時間の約束を十四時間遷延の後、二百人の人員は五人を遣して歸り、而して其五人は此日の十時迄立ち歸らざりしなり。

彼等の爲には、亞弗利加の行路頗は大なる利益を與ふべし、困難は僅は折り取りて來るべし、彼等も幾分か其眼を開くに至るべし、彼等の地金は卑しと雖ども銀なり、水火の中に百煉の功を積みなば遂には能く、亞弗利加大陸の爲に寶刀と爲るともあるべきか。

偖是れよりサエフンンに就て記す所あらん。余等舟行隊は、彼等陸行隊が遠く皆アビンバを出立するを待つて然る後、一時間一ノット半の割合に於て二時四十五分迄舟を進め、相應の場所を見出せしかば速に余營して以てサエフンン等の來るを待たり、暫くにして來らず、號砲を擲てり、河に滯き出で亞野銃を取つて四方を眺みしかども、余營の烟たに見當らず、此余營の烟は尤も彼等の所在を知るに便あるものにて銃聲も尚は又喇叭の聲も聞へざる遠に於て、假令濃霧の天を蔽ひしの時に在つても、探知し得べきものなり。然るに今や之れ無し。依て余等は彼等は適當の路を見出して流の上部に到りしものかと思へり。

十六日に於て、舟行隊は急いで流れを溯り、マペンゲの村に至りて、南の岸よりチバ川即ちアルウィミ河に注入する所の一流あるを見、之れに向つて陸行隊の行衛を探索せしの後、凡そ一時間を經て、マペンゲの流の下に達せり。余等の余營を造りたる對岸即ち河の右側に於てイチリと名付けたる一大村落あるを見る。是に至て尚は陸行隊の蹤跡を詳にする能はざりしかば、余は人を派して彼の小流の方へ向ひ、以て搜索する所ありしが、數哩の間に非雙影だも認むる能はずして歸り來れり。依て余は更に舟を下流アビンバの方に流して之を探偷せしめしが、水夫等は半夜に至り、歸り來つて空しく失敗の事情を具陳せり。

十七日に於て、余は「第三時」と綽名せるヒート、タトー幷に六人の水夫を遣りて、余等が十五日に余營せし所に到り、其れより上陸して內地の方に通ずる道を取り、何處迄も陸行隊の行衛を尋ね、彼等を率ゐて再ひ河に出て來るべきを命ぜり。贈爭は早く歸りて余に、彼等が七哩の間陸行隊の進行せし形跡を見しことを告げたり、依て余はサエフンン氏は東を北に出て進むとの代りに、河の道に從つて東を北東へと進みしものならんと推し、ヒート、タトーは必ず彼等に追着して明日を以て歸り來るべきことを思へり。

河邊に於ける余等の余營は至て困難なる狀況の下に立てり。水夫等は凡て三十九人にして白人三人、

使僕三人外に二十八人の疾病者を作へり。而して此中スターラス中尉は彼の毒矢より受けたる傷の爲に病み、絶へずドクターの手を煩するなり。一人はアビシパに於て、病病の爲に死せり。又現在、數日前より病の爲に白痴と爲りしもの一人あつて彼れも亦殆ど死に瀕せり。余等は凡て二十九人の種々なる病人を有し、外に八人の負傷者あり。カルフワンは無管に傷を受けたるが爲に半死半生の間に横はり、ヨーデは腕の傷非常に腫れ上りて、絶へず苦痛の叫びを擧げたり。殘る三十九人の健全なるものを分つて、余は三方に視察者を派遣し、成るべく速に隊行隊を捜索し來らんことを欲せり。剝岸なるイチョの村の土人は余等が食糧の寂寞なるを窺んで攻擊を爲さんとするの色あり、而して又此岸に在つても僅か二哩許を隔てゝマベンジの村あり、一擧して余等を襲殺するに足れり。何事ぞ此廣漠の郷に在つて三十九人の人を分つて彼處此處に三百の失踪者を捜索せしめんとは。併し尚は窺なきに非らず、窺なきに非るに常て失窺するは是れ痴兒の所爲のみ、嗚呼。併し失窺は古來果して幾許の人を殺せしぞや。

十七日の夜に、白痴の病者は無事の郷に逝けり。余等二三子と共に之を葬る。

余は實に悔むべきの境遇に迫れり。僅か數日前迄は活潑有爲なる三百七十人の首領として彈藥糧食に富み、等しく心と力とを併せて如何なる災厄をも打ち拂はんずる勢なりしが、今は僅かに十八人の

人を殘して殆ど如何ともする能はざるの命運に迫れり。此結局は果して如何なるべき。

若し余等がヤンブヤに於て撥拔し來りたる三百八十九の壯丈夫にしてアルバルト湖に達する能はずとせば、如何に、バーククット少佐は二百五十の人を以て、彼れの歩を限極なきの密林中に進むるとを得べき。余等はヤンブヤを出でしより平均日に八時間の割合を以て四十四日の間旅行し來れり。若し一時間に二哩を進むを得ば余等は已に湖畔に達し得し筈なり、然るに實際に於ては恰も其三分の一を經過せしに過ぎず。詩人肯はずや「失窺を勇育すると勿れ」と。失窺、失窺、失窺せざらんと欲するも得ず、併し失窺の時は是れ余等が最後の時なり。

余等の負傷者は容易に快癒すると能はず。傷跡は益す腫れ上りて益ゝ苦痛を加へ、一人も未だ死には至らざれども、何れも曾歩行だに爲すを得ず。

十八日八時頃に於て、此月第五回の雨は降り始めたり。此雨次くとも余等の境遇は已に十分なるに非らずや。余等は實に深海より深海に沈むの思あり。而して此雨は尋常一樣のものに非らず、滂沱の雨河は一度に堰を開いて之れを地上に瀉下し、地上は爲に分解せんかと思はる酷りの有樣、實に荒廢じくも恐ろしゝ。此森林間の木葉に就て考察するに、各葉幾億幾千萬く曾、一分時間に十滴二十滴の點滴を注ぎて、其根幹を洗ひ、而して其濕ふたる、寧ろ泳浴せる土地は又絶へず、此時に於て蒸發氣を

吐出し、而して空中は又此點滴と木葉質とを以て滿たすなり。之れに加ふるに、此激烈なる雷は殆ど打擊の勢を以て樹梢を掠め來り、非幾億無數の枝條を脈迫し、樹木をして地中より全然脫出せしむるが如きの暴威を逞ふするに至り、森林は之れに對き、之を噛き、以て一回轟轟の叫びを爲すも、尙は茲に止まず、電雷は加はれり、彼處の隅より此隅に沙りて電光空を劈き、百雷は其火焰に乘して轉々轟々一擊巨石を碎くの勢を示し、人畜をして爲に其の腦漿を破るの思を爲さしむ。亞弗利加林中に新に知友に別れ、道途に迷ひしの身を以て、固らずに幾多動く能はざるの疾病者を以てす、余は見もあれ、彼等の心意は將た如何あるべき。歐洲各國を以て戰場と爲したるナポレオンの戰爭も、斯くの如き恐怖の變化は與へざりしならん。斯くの如きもの終日、今や時に夜十時に近し。余等は再び明朝の日光を見ることを得べきや、余等は實に之れを疑はざるを得ず。自然も又是等の災厄—恐怖、悲痛、疾病、孤獨、飢餓、强雨、暴雷其他荒廢の有樣に由て、愚に歸りしに似たり。去るにても彼等迷路者は今何處に在るならん。芭蕉樹の下にか、土人の小舍の中にか、天幕の內にか將たブランケットの裏にか、彼等の苦痛も又察すべきなり。憐むべき彼余等の驢馬は耳を立て、眼を閉ぢ、以て幾度か後を顧み、生捕し來りたる雞も又非常に打ち沒消れたる有樣を顯せり。嗚呼天地の光榮は全く滅却せり。自然にして再び其美を回復し、動植再び頭を擧げて笑を顯するの時は是れ余等が已

に他郷に逝りしの時なるやも知るべからず。余は未だ曾て此時より困難を感じたることなく、爲し得べくんは速に此眼を閉ぢて、無窮に、平和を夢みるに至らんことを願へり。

八月十九日に至て尙は未だ險行隊の所在を明にせず、二三の觀察隊は其功を奏する能はずして歸れり。負傷者の中二人殆ど危險に迫り、其苦痛の時見るに忍びず。

廿日、尙は迷路者の報に接せず。去る十四日の朝、毒矢の爲に負傷したるセーデは、彼傷風を引き起して回復の見込少なきに至れり。依て思ふに彼の毒は當根より取りしものならん。カルフツンの頸并に脊骨は毫も屈折する能はず。余は彼等に向つて「セルセ」を注入せしが、其量は通常の二倍許なりしも、其苦痛を減却せしむると能はず。スターアス氏は前日と同樣の藥にして苦くもあらず又悪しくもあらず。傷は至て苦しげなれども彼れは尙は食氣を有し、又眠ることを得たり。余は遂に彼れも又他の負傷者と同一なる結果を見るに至るべきやを疑へたり。

三百人幷に三人の吏員を有せる險行隊が一人も道を失せしことを氣附かず、又正路を見出さんが爲には再びアビンバに歸りし後に於てすべきことを氣附くものなきは實に奇異の事と言ふべし。

廿一日、カルフツンは去る十日に咽喉に受けたる傷の爲め、少年セーデは十四日に受けたる傷の爲に、共に非常なる苦痛の後、夜に於て死せり。カルフツンの傷は同じく毒矢より來りしものなるが、其毒

は數日以前に矢に加へたるものと見えたり。彼れは苦痛の激しきが爲に、又食物を悉も飲み下す能はざるが故に、日々に衰弱し去りしなり。傷は見る所危險のものにもあらず、外部は已に全癒し、内部にも振衝を起す樣子なかりしが、併し如何にせん彼れは終始食物を飲むと能はず。唯少しく芭蕉の實の粉を溶かしたる汁を注入せるのみ。八日目に至り、彼れの頸は堅くして動かず、首筋を出だす能はずして僅に口を動かせり。頭は前方に曲りて又延びず、胸は痩せて骨と皮のみを示し、彼れの顏色は甚痛苦の極度に逸せしとを證せり。昨日に至り、彼れは少しく痙攣を起せり。余は平グレーンのモルヒナを二度に注射して、一時間程彼れの苦痛を減殺せしめしが、元來余は斯くの如き場合に於て經驗なきを以て、モルヒナの分量を知るに窮したりき。ヒーグは右腕の肱と手頸との間に於て矢傷を受けたるものなるが、其傷は唯大針を以て突きしものに過ぎざりしなり。傷は同僚に由て吸取され、湯を以て丁寧に洗滌し、而して封帶を施せしものなるが、彼れは四日目の朝に於て激烈なる破傷風の爲に襲はれ、數々痙攣を催ふして之を絞むるに道なかりし。モルヒナの注射は幾分か其苦痛を減ぜしやうなりしも痙攣は止まず、彼れは傷を受けしより一百十一時間にして死せり。故に彼れの矢の毒はカルフクンのものよりも激烈なるものにて、十四日の暇に際して新に毒汁を加へしものならんか。又一人は正午頃に至て痢病の爲に死せり、斯くて此倉庫に於て已に四人の死者を出せり。

午後五時に至て漸く陸行隊は歸り來れり、彼時の心痛も殆ど同一にして又三人の死者ありしとを告げたり。マルフは前に於て傷きしものなるが、同じく破傷風を惹き起して十九日の夜に於て死し、ヒーグよりも早き凡そ二十四時間なり。是れ彼れは陸行隊の間に在つて旅行を爲せしが爲に其毒の回り方一層速なるものありしが爲めならん。アレと名付けられたる一人は蛭鉤矢に由て傷けられしものにて、矢、肝臓を貫きしの故を以て死し、又他の一人は十八日に於ける困難の後、間もなく病病を起して死せり。十四日以來の死者凡そ七人、此他に尚ほ數人の生死の間に横はるものあり。陸行隊は更に矢に由て傷きたるもの二人を連れ來りしが、傷は已に振衝を起して恐るべき現象を顯せり。

獨りスターフス中尉は今尚ほ心確かにして、他の同病者の續々死するにも拘はらず、少しく回復の色を示し、又ドクターも歸り來りしを以て余は大に心を安んぜり。實に其苦痛の狀を視、病人の叫號を聽くは心に堪へ得ぬものなり。余は彼等の爲には如何なるとを爲しても回復せしめんとを思へり。

余等は今倉營に於て三百七十三人を有す、其内六十人は病人にして尤も飢渇なる療養を要すべきものなれども、斯くの如きの野獣間に在つては、彼等の爲に十分の休養と食物をだに與ふると能はず。若し今に至つて陸行隊來らず、彼の有樣をして數日を持續せしめば、余は疑もなく絶望の地に陷りしならん。思ひ出すも無念—彼の醜、彼の顏、死せんとして死する能はず、泣かんとして泣く能はず。

四圍の境遇愈よ暗黒に暗黒を加へたり。其値かに餘金なるもの又兄弟に分れ、親友に分れて爲さんと欲するも爲す能はず、喉はんと欲するも喉ふに物なし。此時に當て三百人の人來らず、余何を以て能く目的を遂し得るの見込あらん。余は妄りに落膽せず、併し此時に在つて余は殆ど落膽せり、落膽の勢は破竹の狀を爲して余の心に迫るを覺へたり。余等の食する所は唯芭蕉の實あるのみ、尚は歐洲より持ち來したる糧食なきにあらねど、余は假令飢餓に迫るとも之れを食すると能はざりし。何となれは是れより後尚は如何なる場合に際會するやも知るへからざるものなればなり。余が身に代へて希圖する所のものは目的を遂するに在り、然れども今や日漸れて道遠よ遠きの地に在り、實に余は自ら、幾多の考慮を以てして「斯くては我東なし」と思ひぬ。

余は來た此冒險行隊の吏員等が如何なる感情を懷きしやを詳にせずと雖ども、彼等は皆同官に唯「地獄の口を危ふく脱却し來れり」と言へり。

余は之に關して左の報告を受取れり。

一千八百八十七年八月

スタンレー君足下、　ヨー、エム、ヨエフソン

ヒート、ダトーは足下の指揮に從つて昨日午後三時に於て余等に追着せり。余等は直に引き返へし河を渡切れり。(此河は先きに小舟にて捜索せし所のもの)今夕足下の許に到着するを待へし。足下の心痛は幾許なりしならん、余は實に斯くの如きの錯誤を來せしの罪を悔ゆ。」

二十二日に於て、余等はマベンゾの諸瀑布中尤も高き瀑の下に來り、翌日此瀑を過へて上部に進めり。」

款に於て、余は遠征隊人員の點檢を爲せしに、其員數并に狀況は左の如し—

	健全者	病人	死者	荷物
第一隊	八十人	六人	四人	四十三個
第二隊々長スチーアス	六十九人	十四人	五人	五十個
第三隊々長チルンソン	六十七人	十六人	四人	七十二個
第四隊々長ヴエフソン	六十三人	二十一人	三人	七十二個
歌羅巴人	六人			
使僕	十二人			
ゾーダン人	十人			
ゾーマリス人	六人			
料理人	二人			
馬丁	一人			

病人　五十七人
合計　三百七十六人

死者　十六人
總計　三百八十九人

余等が彷徨せる間の經驗を以て見るに、アルウィミ河も、此邊は流多きが爲に、下部に於けるが如く、土人の舟行を爲すもの多からざるに似たり。大なる村落は却て内部の方に在り、斥候等は此森林を捜索するに於て常に相應なる路あるを見たり。河岸の方は若し水路をたに利用するを得ば便益多を以て殊に繁榮を致すべき筈なるに、敢には之れなきが爲め、内部の方に村落を見るに至りしものなるべし。併し余等は之れが爲に、河筋の旅行に困難を加へたり。ツチリを出でしより以來著しく之れが實を示せり。二十四日に於て、余等は僅に數哩を旅し、アブガドの池の下に會營せしが、此近隣には數多せる廣多の芭蕉林を有せり。非盟日は、余等は此池を越へて、土人の往來せる森林の開地に至り、茲に

比較的愉快なる會營を爲せり。二十六日に、隊行隊は少しく平易の途を通行するを得しが、余等は急流を上りしの故を以て其困難一方ならず、日暮に至り漸くにして彼等に追沿し、ナポロ河の口に對するアベサリの一次村落に達せり。

此ナポロ河に關しては余は始めてドクター、サヤンカーより聽きし所のものなるが、恰も此所に於て、流れてアルウィミ河、即ち土人の呼ぶ所のイチリ河に會流す。其會流の所には殆ど四十尺の高さある池を爲して巖石の間を沙れり。此池の上部は廣さ二百五十ヤード許にして其下は三百ヤードの幅に廣張せり。土人等は此巖石を去る數丁の所に、圓錐形の能を伏せ、以て魚類を採るの用に供す。ナポロ河の水はチヨーコレート色にして、イチリ河の水は恰に牛乳を混じたるの色に似、會流の所は數十ヤードに渉つて其色を異にせり。

余等は是れより數日を經てアラブ人の一隊に會合せり。余等にして此事を知りしならんには、強め彼等の勢力と余等の道との間に、一處法を案出せしならん。センブッの土民なるビンザは余に告げて曰く「斯かる河筋の殘虐無道なる人民の間を通じて通ぶんよりは寧ろ陸路を取つて平和なる人民の間を旅行するに加かず、センブの種族の如きは必ず他く余等を迎へて旅行の便を與ふべきなり」と。ビンザは頻りに此道を取らんとを勸めたり。余も斯か爲さんかと考へしも、併しアベサリの方は粗貧に富む

とを聽き、且つ周圍の事情も從來の土地と大に異るに至りければ、余は此道に於ても十分安全なるべしと思へり。余は此邊に在つて已に村々廻餘の他に比して異なるとを見、從つて食物等は良好なるものを得べきの國あり。バンガの滝より下部に在つては土人の重なる食物は例の「マニオック」にして彼等は之を焼き之を製して或は麵麭と爲し、或は菓子と爲し、或は粥と爲して食するなり。因に言ふ、英米等に多く「プッディング」に用ゆる「タピオカ」は則ち此「マニオック」より製したるものなり。併しバンガの滝より上部に在つては此「マニオック」は次第に少くして芭蕉の實を見ること多く、而して此芭蕉の實は遠征隊の爲には遙か「マニオック」よりも適當の食物なりとす。此故に、余等は近隣に此林園甚だ多きを見て前途は幾分か困難を減ずるに至るなるべしと思へり。此他に唐黍、「ヤム」烟草等もあり、又尤も喜ぶべきとには雞類をも多く得るに至りしと是れなり。余等は暫時此處に滞在して一行の休息を爲すとに決せり。

彼等は久しきに渉つて肉類を味はざるの故を以て、深く之を貪むる能はざるの事なりと雖ども、ザンザーバル人並にソーダン人等は實に亂雜の行爲を爲せり。一羽の雞を見るや否や彼等は之れを強んとを欲して夢中に踏力に飛び歩るき、其中の或るものは銃砲を以て之を撃たんと企て、爲に無益に彈藥を消費せしかば、余等は止むを得ず遂に之を所制するに至れり。余等は始めより彈藥の事に就ては十

分の注意を加へ、十分の制裁を附したり。併しザンザーバル人の如きは唯余等の目前に在るの時之を守るのみにして、他に出て行く時に於ては毫も之を制御するの道なかりし。此日彼等は甚く不注意に發砲を爲すの間に、誤つて仲間の一人を負傷し去れり。ウヰンチエスター銃の丸は彼れの足を打ち貫り、骨爲に碎けて切斷を爲さゞるを得ざるに至り、外科醫パークは尤も機敏なる手術を以て之を治療せしが、此不幸なる青年は他人の手を假りて之を海中に臥せしめ、鄭重に療養を加へしめたり。彼れは他人の親愛を受くるものなりしかば、人々食物を供給するものも多く、比較的不足を感ぜざりし。彼等の仲間の中には假令一足を傷くるとも舟中に安臥する方、上策なるべしと考へしものも之れなきには非らざるべし。

勿論余は彼等に對して嚴重に警誡を加へたり、彼等は何れも將來に於ては十分注意を加ふべしとの事を陳述せしが、勿論又且、夕を保する能はざるなり。此數々約束を破るとに就ては甚ふべきと少なからず、併し彼等は何事も心に留めざるを以て愉快と爲すなり。悲しき時も一時、非樂りに容易に一時の怒を爲すなり。彼等は人類よりも寧ろ獣類に近きものなり、故を以て道德上の制裁を有する人類の如くに怨窟なる拘束を蒙るとを欲せざるものなり。

二十八日、舟行隊は鋼鐵舟アドヴェンス號並に十六の獨木舟を連ねて河を上り、アマサッの上部五哩

の所に倉營せり。隊行隊は遂に後に殘れり、彼等は幾多の森を越へ小川を渉り、常になき難路を馳せしの故を以て、翌日正午に至て漸く此所に來り、是れより二時間程上部に旅せしかば、舟行隊も又之に從へり。

余等は三十日に於て一大瀑布の下に到着し、地形を案じて恰もアルバルト湖邊の半分路に進せしとを知れり。則ち湖畔のカベリは三十度三十分にしてヤンブヤは二十五度三分二分の一の所に位し、而して今余等の倉營は二十七度四十七分に當れり。

余等は尚ほ、アルバルト湖に進する迄には一百六十哩の直徑哩を進まざるべからず、而して前半は之れを旅するに六十四日を費せしが、後半は此割合には進むを得ざるべし。一行は何れも疲勞の体を見はせり潰瘍は恰も一種の傳染病の如くに旅行し、貧血病は大に彼等の氣力を減殺せり。余は彼等に對して旅行の半ばに達せしとを告げしも彼等は敢て之を信ぜず、首を振して曰く「如何にして道程を知り得るにや。此森林中に一里塚ありや。嗚呼其器械に。併し器械は如何にして之を示し得るや。ざうか私共にも分るやうに。併し道は土人の方が確かならん。草原の在る方は何れの方角に當り居るや。土人は曾此地は限りなき森林なりと言ふに非らずや。ハ、分つた、是れは疑もなく主公が私共を小供だと思つて……」。斯くの如きもの則ち彼等が不信の所を言ひ見はすの言なり。

八月三十一日の不吉日は常日の如くに明けたり。朝來は例の通り霧を以て蔽ひしが、九時頃に至りて大陽は曙線の間にかすかに光を放ち、余等は之を通じて水を伐り枝を斬り、以て舟を引き上げて池の上部に廻さんとせり。船は六十人の人を以て之れを運はざるべからず、而して舟隊の水夫等は何れも狂瀾を殿して峻岸の方に之れを押し來れり。

道は一時間程にして切り開かれ、臨時の倉營は其上部に在り。獨木舟は已に到着せり。余はパーク氏をしてアドヴェンス號の運搬を指揮せしめしに、狂炎にして彼れは來り、船重くして動かすべからざるとを告げたり。依て余は自ら之れに赴きて辛辣し、漸く之を拳げて來き來りし途中、忽ち余の使僕其(白人)狂彈し來りて叫んで曰く「エミン、バレヤが來ました、エミン、バレヤが來ました」。

「何にエミン、バレヤ」。

「確かに、エミン、バレヤです、現に舟の上に居りました。其の赤色の旅は我々のものと同じく舟頭に醸りて、確かにエミン、バレヤです」。

余等は勿論飛び出したり、何れも燒火箸を投げ出すが如くに船を地上に打ち棄てゝ走り行けり。東閣も人衆も後先を問はず、倉營の亂雜一方ならざりし。併し個は全くの誤謬にて、彼處に來りしものはバレヤには非らで九人のマンユエマ人なり。彼等はウガローヲの名に由つて土人に知られたる酋長ウ

レア、パルユスの下に屬するものなり。而して此酋長は是れより八日間旅行程の上流に在つて數百の軍隊を率ゆるものなりと言へり。

此アラブの種族等は掠奪を事として深く上部アルウィミの内地に侵入せしものと見えたり、余等亦此之れを知ることを得しは幾分の幸なり。余等は又是れより六哩の上部に彼等が五十の人あり、ウガローアの命に由て河筋を探檢し、此河に由て果して能くスタンレー、アボールスに通行するを得るや否やを確めんとするものなることを知れり。

余等は彼等の需めに從つて、由て來りし通路を說き示せしに、彼等は大に喜び、直に是れより彼等の會堂に歸つて余等を迎ふべきの準備を爲すべしと言へり。ザンザーバル人は此話を聽いて得々たるものありし、其迎由は次に記述せらるべし。

翌朝第一の逃走者はサニヤなり、彼れは此夜五十磅のビスケットを奪んで其跡を晦ませり。九月一日早朝に於て、余等は此沈を上り、隊行隊と共に進んで暫時にしてマンニヤ人の會營せる村に達せり。入口の前に、一見衆の屍骸あり、寸斷に斬り裂きたる跡を存し、而して柵内には又一婦人の屍骸あり、槍を以て貫かれたり。マンニヤ人は一人もあらざりし。思ふに彼等は余等に迎接する筈なりしも、或は此間に不時の出來事を生ぜんことを恐れ、相率ひて退却し去りしものに似たり。併し彼等の爲に余

等は損害を蒙れり、五人のザンザーバル人は彼等と共に浮浪の生活を營まんと欲せしにや、五箇の荷物、四個の彈藥、一個の食糧を以て我が隊を脫却し去れり。

余等は再び旅行を續け、更に又一の沈ある所に到つて、其下に止れり。

翌日に至り、セート、タトーは沈の有樣を視察し來つて、格別の困難なしに、之れを越へ得べきことを報告せり。此報告は水夫の氣力を鼓舞し、彼等は一勞力を試みんが爲に立てり。斯くて舟行隊が力を盡して危險なる仕事を爲すの間に、搜索隊は失踪者を尋ねて一人を取り押へ、一個の彈藥と三挺の施條銃を得て歸れり。彼の搜索隊が林間に於て彼等を搜がし出せし折、彼等は恰も一函の彈藥を開きて之を各自に分與する所なりしなり。我が隊は彼等を固まんとを圖りしに、彼等は之れを覺附き、驚いて三挺の施條銃并に其他のものを地に委し、何れへか逃げ去りしと聽く。

九月三日に至り、何は又五人の逃走者を生じ、リミントン彈藥の一函、函詰糧食の一箱、アラブ製織物の一荷三百弗の價値あるものを運び去れり。他の一人は、已に穀物、バタ、牛乳等の箱を掠め、糧食一函を開いて持ち去らんとする時に於て、人の察知する所となり、取り押へられたり。斯くて二日の間に十人の人逃走し去れり。此割を以てすれば遠征隊は向ふ六十日の間に爲すべし。余は潮下の諸酋領を呼んで此事を相談せしが、如何にも斷乎たる制裁を加ふるの道を得ず。併し何れも皆此

際に於て逃走者の途を杜絶せんとを欲せざるものはなし、余等も又遠からず之れが必要に迫りて相當の處置を爲すの止むを得ざるに至るべきとを思へり。ヤンダヤを離れてより余等は已に、四十八箱の施條銃并にマキシム。ウルソンチエスター。リミントン彈藥の十五箱を失へり。

翌日に至り、又四人の逃走者を出せしが、一人は將に逃走せんとするの時に於て捕へたり。依て先づ人間の點檢を始めしに、諸頭領にして受合ふ能はず、逃走を爲さんとするの傾向あるもの六十人の多きに至りしかば、余等は是等の者の所持せる施條銃の條線を抜き去つて之れを用ゆる能はざるやうに爲せり。余等はマンユエマ人に會ひしより忽ち此逃走の端を開きしなり。一物も彼等の手には托する能はず。箱は開かれたり、衣服は奪まれたり、飾玉は奪はれ、彈藥は取られ、而して諸所無益に之を匿し置くに至れり。

九月五日に於て、余等は「ヒポ、プロード」と名付くる所に於て會營す、此河の近邊にはヒポ則ち河馬の群を見ること多きを以て斯くは名付けしなり。余等の會營せし所は古村落の廢墟なるが、近邊に多少の草地あり、且つ斯かる水陸兩生動物の棲存する事なれば、最早や遠からずして平原に出づるを得べきかと思へり。集糧者は兩岸に於ける內部の地を徒略して、四頭の山羊、少許の芭蕉の實、外に燒き鼠、煮たる甲蟲等を獲て來れり。六日に、余等はパフェードの村に對する一瀑布に到着し、數に芭蕉

の實の多額を匯集するとを得。翌日余等は船を岸上に引き上げて其高さ一丈許の瀑を經過せり。此瀑よりして余等は河に沿ふて屈曲し、バクビの瀑に至りて其上隙所に會營せり。是れよりして內部に一路あるを見しかば、飢餓の公子等は直に馳せて之に向へり。彼等は糧食を搜索する間に、一婦人と一童兒とに會ひしかば、之を携へ來りて余の前に供せり。併し最良の通辯人も通辯を爲す能はず、何れも皆二人の言ふ所の一言半句だも了解すること能はざりし。

翌日又他の瀑布に遭着せり。余等は此邊一帶椰子樹を繁茂せしむるあるを見たり。

各村の間に椰子の殼を多く棄てあるを見、又諸所に椰子の苗を植へたる所あるを氣附けり。メーヤン人なるアチメットは、出發の際余はヤンダヤに置き來らんとせしに、強いて此行に伴ひ來りしものなるが、ヤンコンダを上りし以來引き續きて病床に舟中に在り、今や將に死せんとするに至れり。彼れは黑痘と稱する病に罹り今は實際骨と皮のみの姿と爲り終れり。

此會營より、余等は河の道に沿ふて迂廻し、凡そ一時間を經て兩岸の岩石に由て開かれたる急流の邊に至れり。見渡せば、上部に更に大なる瀑布あり、懸水烟を吐いて遙に紛沫を飛ばし、其高さ三十尺を越ゆ。余は之を見、一隊の狀態を顧みて暫ばし忽然たりし。舟中には一百二十個の荷物の外に五十六の病人あるなり。是等を林間に道案するとは固より爲し得べきに非らず、此荷物と舟とを捨ふて前

に進むとも同じく困難の事なり。はて如何にすべき。

止むを得ず、余は舟を曳流の下に繋ぎて、陸に出て人衆を搬き、急流の邊を遠ざかりたるサバビ村の廢跡に到り、玆に余營を建てたり。病人も其歩に堪へ得べきものは力めて自ら歩ましめ、其他に堪へ難きものは之を他人に荷はしめて余營に進り來り、吏員は又人を指揮して森林を切り開き、以て此間を通じて舟を牽き來れり。之を爲すに余等は全く二日間を費せり、第一隊は、此時近隣に糧を爲せしが十分の成功を見る能はざりし。

サバビの村は甞て甚繁榮なるに當てはは非常に廣大のものなりしならん。四方に芭蕉の林、烟草、唐黍等の獻わりて何れも豐富なりしの跡を示し、彼處此處に今尚ほ存在する小屋の如きも又熱帶地に相應したる風雅のものなり。到る所打破の跡を見る。終するに、彼のウガローフに屬する部下が、村落を燒却し、芭蕉の林を刈り、防禦者の骨を取つて之を地上に散らしたるものに非らずや。サバビに於ける余營の間に於て、余等は五個の兒童の骸骨を見出せり。

十二日に於て、余等出發を爲すに當り、五人の重病人時に死せんとするものを此處に遺棄せり。ソーマリ人アチメットも此中の一人なり。蓋し萬止むを得ざるに出でしなり。

サバビよりして、余等はメンベリの上陸所に到れり、此所は衆の數々徘徊する所と見えたり。這から

ざる所に於て、一匹の象、右岸に近く沐浴を爲し居りければ、余は此肉を得て以て人々の飢餓を癒さんとを思へり。衆に余は彼の印度の曙光が非常に珍重すと聞きたるイキスプレッス旅條銃を所有せしを以て、之を持へて私かに彼れに近づき、五六ヤードの距離に於て六個の丸を打ち當てしが、象は駭いて逃走せしに止り、余は遂に之れを獲ること能はざりし。

メンベリに於て、人員の點檢を爲せしに、左の如きの結果を見るに至れり—

八月廿三日　三百七十三人

九月十二日　三百四十三人

則ち十四人は逃走し、十六人は死去し、人足は二百三十五人にして、荷物は二百二十七個、病人は五十八人なり。

斯くの如く悲むべき挽過の上に立つて、一行は曾食するに物なきに窮せり。余は上るに從つて糧食は甚かなるべしと思ひきや、實際は正反對にて愈よ乏す、欠乏を告ぐるに至れり。ウガローフの酋長マンユエマの下に屬する、バクス并にバンゴクの徒、到る所に侵入し、掠奪の上に田畑を荒廢せしめ、住民を知るべからざるの鄕に退ひ、苟も抵抗するものあれば殺く之を虐殺し去るに至りしなり。

翌日余等はアミリの池に達せり。前日部下の加個セーブは、己れの統率する所のマクベラなるものが、

彈藥の箱を途上に遺失せしを回復せんとて出で行きしに、其儘にして進み來しの廉を以て賞を與りしかば、彼れは非常に之を氣に留めしものと見え、自らマンベクを捜索し來らんとて又歸り行けり。時にボウンヂ、マンガなるもの、働作の困難と前途の望なきに落胆し、私かに他の彈藥箱を取つて脱走し去れり。

余等は今僅かに三頭の駱駝を有するのみ。余等がヤンブヤを出でしときは都合六頭なりしが、此中の一頭は又余等と同行するも到底望を遂し難きを知りしにや、彼のザンバール人に偸つて逃走したり。何處に行きしか分らず。廣漠なる林間に向つて一度逃したる駱を探がすも益なし。船の艙に於て分れ、識に於て相合ふの波と同じく、限りなきの森林は幾多の物を包み歩つて、再び之を見はずとなきなり。

余等の倉營は、十五日に於て一箇の濠家に降りして敷設されたり。河は從來北方并に東方に向て屈折せしが、今は南東の方に曲り、而して余等は恰も南緯一度五十八分の所より一度二十四分の所に進せしなり。

過る數日の間、日に平均一箱の彈藥を失ふに至りければ、是非とも之を杜絶するの道を講ぜざるべからずと思ひ、余等故に一策を案出し、八箱を一組として之を綱に結び付け、而して一人の四頭をして

責任を帶びて之れを統御せしむると爲せり。斯くして余等は、彼等が種々の口實の下に、林間に逃去するの道を防がんとを望めり。

九月十六日に於て、余等が留りて蓄飯を喫するの間に、河上に於て銃聲の響くものありければ、余はボート、ダトーを遣はして之を探せしめしに、半時程を經て彼れは其成功を報ぜんが爲に三發の鐵砲を爲せり。暫らくにして余等の舟の外に、三艘の獨木舟來るあり、見れば舟中の人皆白衣を着け、赤色の旗を飜へす。彼等は、其皆ぐる所に由れば、酋長ウガロータの命に由り、余等を歓迎せんが爲に來りしものにて、該酋長は今夕余等を見舞ふべしと言ふ。互に挨拶を爲せしの後、彼等は再び舟に乘り、彼等の銃砲を放ちながら勢よく歌を歌ふて河上に引き返へせり。

午後余等は常の如くに進行を爲して四時に至り、恰もウガロータの屯營の下に達して停泊す。同時に大鼓の音響き、幾多鳥砲の響之れに應じ、而して數艘の舟はアラブ酋長の來着を告げたり。殆ど五十の壯夫彼れに伴ひ、他に樂隊、婦人等あり、何れも壯健肥大の有様を呈せり。

酋長は余等に對してウガロータの名を名乘りしが、彼れは皆てウンヂ、バルコヌとして人に知られ、千八百六十年より三年に渉り、使僕として大尉スペーク并にグラント等に追隨せしものにて、其後彼等の手を離れ若しくは逃脱してウンヂロに居りたり。彼れは余等に對して、二匹の肥大なる山羊、鞘

米四十磅并に少許の世蘇の實、鹽類等を贈れり。

余は彼れに就て、此近邊に余等の人衆に向つて糧食を得るの所あるや否やを問ひしに、余等の驚嘆にも彼れは、彼れの從者が象牙を得んとするに際し、村民等が抵抗を爲すもの多く、依て復讐の爲に盡くの林園田野を廢滅に歸せしめたれば、容易に糧食を得るの所なき旨を告げたり。彼れ又曰く「余は實に彼等が之を爲すことを制したれども、彼等が過激人に對する感情は激烈にして之れを止むるに由なかりき」と。

此土地は如何なる所なりやとの余の問に對して、彼れは曰く「此地はアンゲと稱する所にして土人をばバンゲと呼べり、而して此屯營の近邊なる北岸の土民はバベー或はバベーヤと稱す」と。

彼れは又、彼れの侵略者が東方一月行程の所に迫りしに、遙か東方に渉つて廣漠たる樂野あると見しといふことを告げたり。

此他に彼れの語りしことは、彼れの部下は凡て六百の壯夫にして何れもキボンゲスに於けるルークバより茲に來りしものなると、彼れは九箇月間に三百七十哩の直徑圏を、北東の道に取り、一捆の草土をも見ずに、隈りなき森林を通過したること、彼れは此アルウィミ河、則ち此地の土人が呼んで以てイヤンゲ河と爲す所の河に來る前には、唯一のヤンゲ河を渡りしのみなること、又彼れはアラブの商人より

して、ル、河は、象の大群が常に徘徊する所のロッと名づくる湖水より流れ出づるものなりとの事を聽きしと等是れなり。

是れより上部四日間行程の所に於てウガローヲは更に一百の銃砲を以て守る一屯營を有せり。此所は南方の岸よりしてアルウィミ河に流れ入る所のレンダ河に近しと言へり。彼れの部下は米を作り、又意等の野菜を植ゆれども、近邊の村落田園は凡て之を打破し去つて土人をして復仇を爲すの基場なからしめたるものゝ如し。彼れは已にベクス并にバンンガ種屬の人二百人許、并に幾多有爲のマンニマ諸頭領を失へり。或る場合の如きは彼れは一時に四十人を失ひ、中一人も歸り來らざりしと言ふ。彼れは又他にアラブの客を止めたり、其人は土人との戰爭の結果にや已れの率ひたる全隊を失ふに至りしものなり。

余は彼れの心意を察し、相當の條約の下に、彼れの部下を派ふてアルバルト湖花樹園を爲さしめ、又余等の病人を彼れに托するの疑列を調ふことを得べしと思へり。

十七日に、余等は少許の距離を旅してウガローヲ屯營の對岸に至り、敵に合營を爲せり。

午後に至り、余は船に乘じて河を渡り、アラブの屯營を見舞ひしに、彼等は最と懇切の待遇を爲せり。屯營は思ひしよりは廣大なるものにて、四方圍らすに堅固なる障柵を以てし、中央、河に面して酋長

の邸宅あり、建築は高く、廣く、愉快げにして其壁には幾多銃丸を以て貫きしの跡を存す。其形は恰も煉瓦を以て高く圍みたる一の壘壁に彷彿たり。ウガローヲの居宅と公堂との間を通じて廊下あり、北奥には大十尺四方もある大煙突あり、周圍には又幾多の建築を散布して、中に使童走卒等の居住するを見。其建築器具等に種々の區別あり、從者使僕の間に種々の階級あるの點を以て考ふれば、其横恰も封建時代王侯の邸宅に似たるものあり。地位も好し、屯營も堅固なり、若し人あり之れを攻破し去らんと欲せば、彼等にして果して相當の技倆ある以上は、少くとも一聯隊の兵を要すべきなり。」

余は數日間の行路河筋は東方に向ふとの事を聽き、又イヒュル河は遙か遠方の距離を北方より流れてイチュリ河に會流するとの事、并に彼のレンダ河の外にイビナと名づくる河あり、南方より會流すとの事を聽けり。

是れより上部、十日間乃至二十日間の行程に於て、他のアラブの酋長キロンガ、ロンガと稱するもの屯營を營む由を聞けり、彼れの本名は同じくウレンダなりといふ。

煙人種族はウンゲーユの東部よりイチュリ河の北部に沙つて廣く散在するとのことを聽きしが、余は此屯營に於て始めて一人の煙人を見るを得たり。彼の女は丈けは三尺三寸にして年齢は十七歳全く成熟したる娘の姿なり。其形は全躰に銅色人種に似て多少の容姿あり、而して其顔は尤も怜悧の心情を見

はせり。又其色合は黄色の象牙の如くにして最も滑らかに、眼は大にして不相應に大にして、眼瞳は光澤あり。彼の女は已に十分人馴れたる樣子にて、余等の前に立ても又敢て他の野蠻人の所爲を學ぶことなく、却て人の眼に接することを以て喜びと爲すもの、如くなりし。彼の女はウンゲイユ源流の近邊に於て發見せられたるものなりと言へり。

ウガローヲは彼れの寶貨を開きて余に示せしが、中に彼れが力を盡げて掠奪を爲せしの結果なる幾多の象牙を含蓄せり。彼彼れは、余に舟に伴ひ、鄙直に調理したる多量の「ライス、カレー」を贈られたり。余は元來此種の食物を好まざりしが、併し余等内の人々は喜んで一席の饗宴を張るを得たり。

余等の上陸所は繁華なる市場と爲れり。西洋の實、馬鈴薯、甘藷、米「マニオック」粉并に雜類を携へ來つて、織物、飾玉等と交易を求むるもの頗りなり。斯種の事はザンゼーバル人が尤も喜ぶ所の事柄にして彼等は何れも皆勇んで、賣買の損引に從事するを見る。

此朝早く、余は隊行隊の遲延者の爲に舟を下流に派して之を迎へしめしに、午後三時頃に至り、舟は五人の病人を載せて到着せり、依て余等人員の檢定を爲せしに其結果左の如し—

人數	婦領
第一隊 六十五人	四人

第二隊	五十七人	四人
第三隊	六十人	四人
第四隊	六十一人	四人
料理人	三人	
使傳	九人	
白人	六人	
ソーダン人	六人	
合計	二百七十一人	十六人
病人	五十六人	
總計	三百二十七人	
ヤンブヤ出立の際	三百八十九人	

逃走者并に死者　六十二人

アドヴェンス號并に其他の小舟に人を配置し、病人は之をアラブの庇護に托し、一人一箇月五弗の割合を以て支拂ふべきことゝし、パークット少佐の到着迄、否らざれば余より使を送る迄之を介抱すべきの約を整へたり。

茲に讀者の記憶を要するとは、余等は八月三十一日に、ヂボコ河口の對岸、アベロリの近邊に於て、彼のウガローワの部下に遭ひしなり。最等の人は河下スタンレー、フオールス迄の長途を旋歸する見込なりしが、余等よりして其詳細を告げしを以て、茲に目的を達したりと称し、直に取つて返へして其旨をウガローワに告げしなり。併しウガローワの希望は單に之れに止まらずして彈藥を得るに在りし、殆ど其欠乏を告げしを以て此道を開いて希望を遂せんと欲せしなり。パークット少佐は二箇と四分の一の彈藥を所持せり、併し彼れが余等の後を追ふて茲迄に進するは、其荷物多きの故を以て尚は數月の後に在るべし。余は此時少佐に一の通信を送さんとを希望せり。茲に於て之をウガローワに囑り、彼れの部下にして能く書翰を持してパークット少佐に致すを得ば、余は少佐に命じて三百磅の彈藥を彼れに與ふべしと言へり。彼れは喜んで之を約し、一箇月を出でずして四十の壯夫を派遣す

べしと言へり。(彼れは約束の通り、十月二十日と二十五日との間に一隊を派遣し、彼等はヤンヂャを去る一百六十五哩なるクスアの湖に達せしが、茲に猛く土人の反撃する所と爲り、其目的を達せずして歸れりといふ)。

余等がザンヂーバルの逃走者は其意に於て誤解する所あり、彼等はウガローワの部下は西部内地の方に進むものならんと考へ、其後に追ひ來りしに、必竟余等と此所に於て會合するに至れり。余はウガローワと相談の上、是等のものを引き取り、人衆の前に其罪を謝せしめ、以て將來の逃走者を戒めんことを計れり。

余等は已に幾多傷布の間に舟を遣るの困難を思ひ、寧ろ全然陸路を取らんことを欲して之をウガローワに計りしに、彼れは尚ほ暫らくの間は。水路の方便益多かるべければ、人衆の骨休めと爲さんが爲には水路を利用する方よろしかるべしと言へり。左すれば尚ほ十數日の間は舟に由て進むと得べきか。

第九章　ウガローワの所よりキロンガ、ロンガの地に向ふ

ウガローワ三人のザンヂーバル脱逃者を送り來る○余等先例を示す○「イキスプレス」施施能○フランドとの對話○ロンガ川○鱗形傷布の障碍○食物の欠乏○キロンガ、ロンガの部下○イルル井にイナニー河の會合○盜賊の行情井に人數○チルソン大尉の病狀○我々使者を進めキロンガ、ロンガの許に送る○病者の會議○ワンヂー井に味鹽○庄稼の欠乏○番兵の食傷○好みの品々○又脱走するものあり○アスマニ謂る○余等の行路を尋ぬ○ウレケの見解○ウマリの事實○余の疑惑

食用の爲に射殺する○一隊マンニマの路を進んで其村に到着す

遠征隊は再び好都合の下に、精撰したる人物を以て組織するとを得たり。余が後隊に關する心痛と旅中病人に對する配意とは全く脱却することを得たり。余等は百八十個の荷物を船と小舟とに積み、値に四十七個の荷物を、四日目に傳る〳〵荷ふ事と爲して、一隊ウガローワの屯營を出發せり。十九日余等の行を送らんが爲に、アラブ等は數時間の行程を伴ひ來り、互の幸運を祝國して相分れたり。

此日の旅行を終つて余等漸く今營を敷設するや日は已に暮れたり。時にウガローワより一艘の小舟來り、三人のザンヂーバル人を、囚人として引き渡せり。其事實を取り調べしに、彼等は余等の逃走者にして、此日彼れの屯營に來着せしを以て、取り押へ、直に送り來りしものなり。彼れは數種の施條銃を携み、又途上、許多の獲包を携み出し以て逃走せしもの、余は今彼等を捕しを喜べり、依てウガ

ロータに報ゆるに一箱のピストル丼に二百個の銃包を以てせり。囚人等は此夜厳しく監禁を命じ、而して余は如何にもして之を處刑し、以て他の人衆を飛ひるの道を考へたり。若し之れをだに急速に附せば、彼等は何は引き續きて逃走を爲し、余等は遠からずして歸途に就かざるを得ざるに至り、途上の辛酸勞苦も水泡に歸するに到るべし。

朝に於て、人間の點檢を爲せし後、余は一場の訓諭を爲せり。「余等は共に困難の境遇に立てり、人々互に其情を分つて進退生死を共にするの覚悟なかるべからず。若し土人にして汝等の銃砲を奪はんと欲するものあれば、汝等は之れを殺すとを猶豫せざるに非らずや。銃砲は是れ余等の精神なり。然らば則ち余等と共に進退を爲し、其勞力に向つて報酬を受け、欠乏の間に親切の待遇を受くるものにして平夜余等の咽を裂かんと欲するもののわらば、是れ同じく厳罰を加ふの價値あるものに非らずや」。

彼等は何れも此言の道理なるに感服せり。

「然らば則ち余等は今、此余等の精神とも頼むべき銃砲を奪ひ、以て余等をして高難千危の間に、防禦の道を失はしめんと圖りしの徒を如何にすべき。汝等は言ふに非らずや、土人にして若し汝等の進路を害するもののわらば之を撃殺して經過せざるべからざるとを。然らば今是等の事を爲せしものを如何にすべき。汝等にして銃砲を失ひ、彈藥を失ふに至らば、汝等は何を以て其進退を爲すを得べき」。

「實に上論の通り」彼等は言へり。

「よろしい、然らば汝等は彼等を死に處すべし。一人は今日、他は明日、又他の一人は明後日を以て死に處すべし。今日より以後、其義務と約束とを忘れて、劫盜を爲し、逃遁を爲し、以て其同僚を危難に迫らしむるの行爲を爲すものは嚴く實死せしむべし」。

效に於て囚人の身元を取調べしに、一人は第一隊附頭領ファーヤヤク、ビル、アレの奴隷にして、他はザンザーベルに於けるバンヤンの奴隷、三はウンヤンイェンベに於ける勝標師の奴隷なりと言へり。」

鋼を投じ、三個中の尤も短きものを引きしもの最初に死すべきとと爲せしに、ファーヤヤクの奴隷先づ撰に當れり。鋼を大なる木の枝に懸け。一方に於て四十人の人をして其端を持せしめ。中頃に輪を作りて之を囚人の首に掛へり。

「汝は何事をか言ひ置く事ありや」。

彼れは頭を振つて言ひ置くべきとなきを示せり。命令は傳へられたり、鋼は挙かれたり。朱た其最後の息を止めざるの間に隊行隊は余等を出で、後部と舟行隊とは尚は暫らく後に殘れり。鋼に代ふるに、四田組を以てし、彼の屍體を樹の枝にくくり附け、其間十五分を出でずして何れも皆川後の途に上れり。

余等は此日長途の進行を爲せり。路は河筋に沿ふて續きしの故を以て隊行隊は近頃になき輕易の旅行を爲せり。途上余等は糧食の圖集に從事せしが、僅に小形の芭蕉の實十房を得るに過ぎず。一同レンダ幷にイチユリ兩河の合流せる所より、一時間行程の距離に於て會營せり。

茲に又一匹の魚、則岸に於て沐浴せるを認め、余は大尉ナルソン幷にヒート、ダトーと共に河に乘り出で、魚を去ること十五ヤードの距離に至て、同時に三個の丸を發し、引き續いて二個の丸を加へしが、何れも急所を外れしものと見へ、遂に之れを捕ふること能はざりし。此時よりして余等は「イキスプレッス」施條銃の効用少なきを知れり。余等は之を以て遠征の間、一匹の獸類だも獲ず。ナルソンは後に至り此施條銃を少許の食物と交換せんが爲にキロンガ、ロンガに賣り、余は是れより二年許を經て之をアンコリの王なるアンタリに贈與せり。余は「レーレー」施條銃の八號或は十號を用ゐし方遙に功用多きを覺へたり。是等の事又以て遠征間の一經驗と爲すべきか。

翌朝、夜は已に明けて日光は余等の會營を照へり。余使僕を呼び、頭領クレッドを呼び來らしめて曰く—

「クレッドよ、余等は今日を以て他の一人を絞罪に處すべき筈なり、最早や之れが準備を爲すべきの時、併し汝は之に就て何とかありや」。

「彼れは殆ど余等を殺さんとを企てしものなれば、勿論之れを殺すより外に道なかるべし。余等は數々彼等に對して隱密に陷れば死すべきものなりとの事を告げしにも拘はらず、彼れは自ら之れに陷りしものなれば、彼をして死せしむるより外はなかるべし」と。クレッドは言へり。

「併し必覺するに個は少しく酌なる所あらざるべきか、クレッド、此森林は人の心をして鉛の如く鈍ならしめ、飢餓は凡て彼等の考を奪つて唯口腹を思ふのみに是れ暇なからしむ。余は昔て聽けり、子を愛すべき本分の母が、飢餓に迫るに當りてや、尚は能く其子を喰ふに至るとか。余等にして彼等を十分養ふ能はざれば彼等の逃走するも又強ち無道なる事には非らず、如何に」。

「成る程貴論は道理なり。然し若し余等にして死せざるを得ずとせば皆共に死すべし。隊中には足下の命令を奉じて如何なる事をも爲すべきを決意せるもの是れ少きには非らず。勿論其中には奴隷あり、奴隷の奴隷あり、何事も知らず、何事も思はず、己れの情慾のみに忠節にして、何時にても逃去ずることを猶豫せざるものあり。是等はよろしく其運命の歸する所に從はしむべし。彼等は皆知れり、足下は基督教の人なるとを。此基督教の人にして尚は此險難を犯して異教イスレムの徒を彼處に救はんとするなり。彼等は自らイスレム教を信ずと稱しながら、此イスレムの徒を助けんとする基督信者を、空しく森林の間に委せんとす。固より道理の制裁なきものなり。よろしく彼れをして死せしむべし」。

「併しフレッド、汝の說は尤もながら、之を殺す程の酷刑を加へずして他に余等の隊を全ふするの道はなかるべきや、何か好き考案もありそうのものの」。

彼れは少しく考ふる所ありしが如き樣子にて—

「凡ての處法も好きには相違なきも、若し彼れをして生きながら、眞に悔悟せしむるの道あらば、之れに加くものはなかるべし」。

「よろし、然らば余は朝飯の後に點檢を爲すべければ、此間汝は向ふの木に對して水き丈夫なる綱を加ふべし。而して首を縊ふの輪をも供ふべし。囚人をして用意を爲さしめ、證人を附し、喇叭の聲と共に他の諸頭領を請ふべし、以て余が最後の命令を傳へんとするの時に於て、汝等は共に馳せ來つて彼れが爲に命請を爲すべし。余は之れを許すべし。よしか」。

「最上の策なり、智あり、仁あり、余等は貴命に從ふべし」。

半時間許を經て點檢の命令を傳へたり、一隊は囚人を中に夾んで併列せり。絞首の綱は凡て其用意を整し、其形恰も長蛇の如くに地上に蟠踞せり。余一二の言語を爲せしの後、人は進み來つて輪を囚人の首に懸け、一隊は之を絞殺するの命令を待てり。

「汝は昨日死したる仲間に退附く前に於て、何事か言ふべきとありや」。

彼れは默然たり、余の言に對して感ずる所なきが如し。余は諸頭領を顧みて—

「汝等の中に何事か言ふべきとありや」。

時にフレッドは他の諸頭領を促して一同余の前に馳せ來り、地上に膝まづきて許容を願ひ、大道無道死も倘ほ足らざる奴なれど、將來一同誓つて之を矯制するの道に從ふべければ今度丈け、唯一度、宥怒あらんことを請ふとの願を陳述せり。

此間彼の囚人の頭は實に觀察するの價値ありし。眼は思はずして大ット開き、唇は期せずして堅たく閉ぢ、双頰は忽ちにして淺色を潮し、恰も健氣作用を爲して、感情は彼れの全身を燃へり。

「過分なり、諸頭等、汝等の請に任すべし、彼れの生命を助くべし。併し後來を飛りよ、余は再びは之れを宥さゞるべし。余等の余營には唯一の法律あるのみ、旗幟統を奉はんとを企てしものは必ず死せしむべし」。

彼等は感情の動物なり、今や此感情の全幅を見はせり。何れも、見渡す所其眼は開けり、玉の如きの涙は壯夫の眼を突いて出でたり。狂喜にして帽子と頭布とは空中に飛べり、旗幟統は捧げられたり、凡て皆其有手を挙げて叫んで曰く「此白帽の地上に彈らるゝ迄は何人も決して此隊を離れざるべし。ブラ、マクリを崇拜するものは十萬億土に向ふべし。ナイアンザの道は何處ぞ。行け〳〵、余等は他

く迄も彼れに從ふべし」。

余は曾て西班牙に在て、リバーダッド。アラッカーニダッドに於ける新政の壯擧なる發表に際し、共和黨の人衆が狂喜抃躍して其感情を見はせしを見しの外は、未だ曾て今日の如き、壯快にして而も沈痛なる人情の自然を目擊せしとはあらず。

囚人は暫ばし泣かんと欲して泣く能はざりしが、遂に泣けり。泣いて余の足下に伏して、九死も尚は惜からざれはよろしく殺すべきとを求めり。余は彼れの手を取り—

「是れ神の命なり、神に感謝せよ」。

喇叭の聲は常よりも一層愉快の音を帶びたり。「神の命なり、神は余等を助くべし」。人々は叫べり。各自に規定されたる荷物は容易に、各人の肩に上りて何れも皆喜び勇んで進發せり。吏員等も部下が喝采の間に抃躍せり。斯くの如く其心を一にして以て暗黑世界の旅行を爲せしは今日を外にして他に見るべからざるなり。

騎行隊も舟行隊も一時間を出でずして殆ど同時にレンダに達せり。此河は見る所至て深くして其幅は殆ど一百ヤードに渉る。合流の西岸に於て一村あり、併し芭蕉の實の林は久しき前に刈り倒されたり。人々皆彼の岸に渡航し終るや、隊を分つて、一部は北岸他は南岸に至り、以て糧食の區域を爲し、

来た夜に至らずして歸り來りしが、何れも一塊の食物をだに發見する能はざりし。

二十二日に於て常の如く水陸共少を急ぐの間に、余は少しく、彼のアラブに向つて五十六人の病人を托せしとを悔ひたり、然るに點檢の時に至て人衆の容態を視察せしに、又新に殆ど五十の衰弱者を生出せしとを知れり。尤も强健にして尤も誠實なるものと雖ども、食物なくては如何ともすべからず。

此地方は金棒に象牙掠奪者の爲に掃蕩せられたるなり。併し余等は率にもウメンムに到達せし時、四日間の糧食を發見するとを得て、漸く一時の急を免るゝとを得たり。

翌日、アラブと名くるもの一人逃走せり。余等舟行隊は幾多の激湍急流を渉り、荷物の上げ下ろしを爲し、舟の運搬等に疲勞せしの後、又茨に四十尺許の高さある一大瀑布に遭遇せり。

此邊の模樣より見るときは、イサンリ河は已に小川と爲りしが如きの觀あれども、第三の大瀑布より廿四日は、糧を爲し、又は道を切り開きて瀧の上部に舟と荷物とを運搬するとに從事せり。一隊は可なりの芭蕉の實を圖想し來りたれども他の三隊は一物をも得る能はざりし。此邊の河底は諸所に赤色の岩石ありて水勢を激するを見る。

翌日余等は又他の瀧に遭遇し、種々難多の危難を嘗めし上漸くにしてアイカコの對岸に達せり。

如何に此船と小舟とが余等に向つて必要なるかは、瀑布に遭遇せしの時に於て見るべし。二百二十七個の荷物を運ぶには三度の往復を要し、而も尚ほ餘金なるものゝ全力を挙げて夜に至る迄働かざるを得ず。人衆は飢餓の爲に非常に疲労せり、三度目には何れも疲々として個匂する許りの有様なりし。余が自から、此日に食したるものは、朝より夕に渉つて唯二個の芭蕉の實のみ。其ザンザーバル人の過半の如きは、終日一物をも食せざりし、然なり其勢力の身躰を離るゝに至るや。第一隊は全隊を挙げて河を渉り、アバチコの村に集糧を試みしが、僅に米黍の粒實を得るに過ぎず、併し幸に一人の婦人を見出しければ、之れに就て糧食のある所を問ひしに、彼の女は余等を導いて廣大の芭蕉の實を得せしむべしと言へり。

九月二十七日余等は滞留せり。余はスターアス中尉をして河岸に沿ふて前路を探檢し、又一百八十人を派して河を渉らしめ、彼の一婦人を嚮導として集糧を爲さしむ。中尉は歸り來つて、河岸には數咽の間一の村落あるなく、途上、一匹の魚に出遭ふて危ふく一命を免れたりと言へり。ザンザーバル人は一人僅に六十個乃至八十個を分つに足るべき、十分の芭蕉の實を得て歸れり。若し人衆にして余等の前に從ひ、食物を貯蓄するの道を取りたらんには、左程の困難も來らざりしならんが、彼等の食慾は非常にして節制すべからざるものと見えたり。彼等に對し今一樣に分け與へたる糧頓は六七日を

持するに足るべきものなるに、彼等は夜を通じて之を喰ひ盡すとを忘たらず。而して彼等は唯明日は明日の事なりと言へり。

三十日、水陸兩隊は恰も蜜假の時に於て出遭へり。此日余と吏員等は嚮らざる饗應を受けたり。スターアス中尉は陷穽に於て生きたる鹿を見出し、余は小流の口に於て、土人の供ひ置きたる網を挙げて許多の魚類を得たり。午後に至り、余等は渡船場の近邊なる、曾て土酋所として用ゐられたる岸の側に會營せり。須臾にして余等は三發の銃聲を耳にす。何事にやと思ひしに、是れなんマンユエマ人の來着を告げしものにして、忽ちに十二の壯尖余等の會營に入り來れり。彼等はウガローヲの饒事手なる、酋長キロンガ、ロンガの部下にして、共に象牙掠奪の爲に此邊の村落を打破ずる事を事とするものなり。

彼等は余等に告ぐるに、キロンガ、ロンガの屯營は是れより五日間の旅行程なると、此間の村落は殆ど荒廢に屬したれば、對岸の地に於て十分の糧食を集むべきと、是れが一箇月の旅行に由て平原に出づべきと等を以てせり。依て余等は此所に二日間滞在し以て彼等の糧食を集むるとに決意せり。

最初の日は食物の蒐集無成功なりしかば、翌日は余等は早朝よりして人を派出するとを爲し、スターアス中尉幷にドクター、パークをして壯尖を率ひ、北岸に至て探索する所あらしめしに、午後に至り

彼等は各人に四十個宛の供給を爲し得べき丈けの芭蕉の實を得て歸れり。

十月三日の朝に於て、余等舟行隊の河を上るや間もなく、二百五十尺より六百尺の高さある山岳を以て圍まれたる水流の邊に達し、水は彼處此處に旋渦を爲して最と危險の色を示せり。之に由て思ふに、余等は是れより愈ゝ險難の場所に遭着するとあるべし。にも拘はらず、余等は上都三哩許の所に進みしが、行路の困難實に非常なりしを以て遂に隊行隊に退接すると能はざりし。

四日に、余等は一哩半許を進みし所に於て、舟を北岸の方に着けたり、イボトに於てマンユエマ人の屯營は此側に在るとを聞きしを以てなり。併し今は唯其跡のみにてマンユエマ人は何れへか立ち去り、余等の逃走者三人も彼等に從ひしと言へり。一行中二人は痢病の爲に死せり。余等は此日數々危險に際會せり、小舟は二度迄轉覆せんとし、鋼鐵舟も殆ど沈まんとして、而して其流の激く常りしか爲に精密なる時辰儀を破損して殆ど其功用を失はしめたり。余は此日最早や舟行を見合すべきかと思ひしが、四面を見れば廣漠たる森林にして長〻に寂寞無常を告ぐるの色のみ。人々等は概ね皆荷物を負ふの力なきのみならず、一身を運ぶだに困難を覺ゆ。余等は頸を延いて何れの所にか糧食を得て是等の空腹を慰するに至らんとを望みしが、併しやロンガ、ロンガの屯營に達する迄は、到底此望を確むるものなきに似たり。

翌日余等は愈ゝ險難の地域を通じて北東より更に東方に折れ、水を上りしが、此邊の景色は恰も下部コンゴーに於けるウンソナ、マンバの小形なるものに似たり。午前十時に至り、最早や舟行の路なきが如きに至りければ、余は岸上に上りて前路の形勢を察するに、全く舟行の路は絶に臨きたるなり。岡陵は愈ゝ高くして六百尺の高さに達し、水流は愈ゝ激にして其幅二十五ヤードに過ぎず。是れより一百ヤード許を隔てゝイヒユル川は急を揚つの勢を以て奔放し、イヒユル河は遙かに幾多無數の瀑布を爲して高きに馳せ、而して其合流の所は萬斛の水五百尺の高きより谿谷を打つて、其轟々堂々の聲は限りなき森林の間に響きて最と荒恐しきを覺ゆ。

余は使を派し、河を横切つて彼の隊行隊を呼び返へさしめ、彼等の歸來を待て一同を南岸に渡せり。」

十月六日の朝に於て、余等の人員は然白を併せて凡て二百七十一人なりしが、其後二人は痢病の爲め、一人は衰弱の爲めに死し、四人は逃走し、一人は絞罪に處したり。故に余等は今總數二百六十三人なり。此人員の中五十二人は已に骸骨同樣の人物と爲れり、始めに彼等は潰瘍を患ひて悲觀に出づると能はざりければ、各相當の分配を與へしにも拘はらず、一時に之を食し終り、其後余等全隊に欠乏を告ぐるに至りければ彼等に向つて供給すべきものなきに至れり。是等の人を外にして余等は只二百十一人あるのみ、而して此中四十人は荷物を運ぶものに非らず。其の荷物は現在二百二十七個ありな

り、如何にすべき、此八十の荷物を如何にすべき。之れに加ふるにサルメン大尉は二週間此方許多の潰瘍の爲に苦み、今や次第に酷烈に迫るに至れり。從來は是等の病人は舟中に於て運び來りしを以て左程の困難を感ぜざりしも、今や河路は遮斷せられたり。

是れ尤も困難なる疑問なり、サルメン大尉は余等の同僚なり、如何なるとありとも之れを救護せざるべからず、五十二の黑人も又然り、神聖なる制規の下に、余等は彼等を回護するの義務あるなり。余等は闇黑亞弗利加の最闇黑の境域に在りと雖ども、決して此事を忘るゝ能はず、然れども又一方に於て是等を救ふの希望も又確然たる能はず。マンユエマ人の言に從へば、五日間の行程に由て彼等の屯營に達すべしと言へり、左すれば余等は已に二日間の旅行を爲せしを以て後三日にして彼處に到着するとを得べし。大尉サルメンは意見を述べて曰く「若し余等にして先づ機敏なる一小隊を派出し、以てキロンガ、ロンガの屯營に至らしめば、彼等は遙か余隊に先つて彼處に到着するを得べし、而して一日も早く糧食等の準備を爲さしめば如何」と。此意見に對して敢て異議を唱ふるものなかりければ、余は尤も機敏なる部卒一人に五人の壯夫を附し、一の土隊場を發見する迄、河の南岸に沿ふて馳せ、其れよりイチュリ河を渡るの便を講じて速かに彼の屯營に至り、以て糧食を供ふべきとを命ぜり。出立前に彼等は余に對して、果して彼のアラブの告げし所は眞にして、此先に屯營を見出し得べきの

見込ありや否やとの事を問へり。余は之れに答へて、余は必ず之れあるべきとを信ず、併しマンユエマ人は余等の心を安めんが爲に、其五日間の行程と言ひし點に於ては確實ならざるものあるやも知るべからず、五日にせよ乃至十日にせよ、キロンガ、ロンガの彼の邊に屯營し居るとは疑なき事實なるべしと告げたり。

而して余等も又一日も茲に留るべきに非らず、蓋く餓死せざるを得ず、故に止むを得ず余は彼の五十二の病人と、八十一個の荷物丼に十艘の小舟を、大尉サルメンの手に委ね、余等は先きに進みて食物を見出し、再び救助に來るべき言を告げ、而して各荷物を肩にして殆と目的なきの鄕に急げり。殘るもの、進むもの等しく疑惑の中に在り、自他、自滅は最後の覺悟ならざるべからず。

此夕余等の宿營せし所は世に尤も寂寞殺風の石地なりし。一方は茫々たる無限の森林に對して、而して其高さは何れも密間六百尺の高きに朝せり。彼には二大瀑布あり、其が白蛇を吐くの瀧口は幾多の生物を呑み來りしの結果を示すものゝ如く、水は其狂奔を競ふて相撃ち、相噛み、恰も双龍の玉を爭ふに異ならず、電雷の耳を破ふは水勢の瀧壺に碎くるものなり。余等は此境遇に迫りて此所に宿營せり。試みに岩角に立ちて水勢の極りなきを眺む、時に白霧を飛ばし、時に白雪を碎き、汹々洶々、涙跳り、波鮮ふて無窮に沙つて鬱らざるなり。仰いで無限の林木に

對すれば、彼の木、彼の枝、過去六千年來の歴史を收めて、而も朧々として漠々として、敢て此廣漠たる荒原が、幾多の人生を無常の極に奪ひしやを語らず。夜は來れり、闇黒は四方を包めり。心は氷結せり、腹は飢餓に迫れり、眠らんと欲して眠る能はず、爲さんと欲して爲す能はず、唯双手を胸にして、長〻に、再び森林の幽邃なるを思ひ、水雷の絶ゆる時なきを感ずれば、余等の最後は又甚だ遠からざるを知るべし。

余等は今斯かる險難の境域を超へて、森を通じ、坂を辿ちて那邊に出らんと欲するか。此疑問は已に余等の腦髓を離れたり。余は唯余の玆に在る誠意剛勇なる從者と、彼處に遺し置きたる等しく誠意剛勇なる從者とに對して、何れの處にか食物を得んと欲するの念慮あるのみ。

彼等一行が蹣々跚々、淡顔、青肌、骸骨の如きの手足を伸ばして、重荷を負ふて歩むの樣を見る時は、實に運命は數時の間に迫りしに似たり。一日か將た二日か、事は漸く茲に終らんとす。彼等は其少しく明を破却せしの眼を見開きて森林の間を眺み、銳意に「ファレニューム」の實「アセマの菓」を探がせり。彼等は一掬馬槽の豆類を得て「豆利」と喜び、數個の團類に對して「至寶」と叫べり。余等は實に水と菓とを除くの外は、喫ひ得べきものは喫へり。人は玆に至て又品位と好惡とを論ずる能はず。余等は此日數個の廃村を過れり、併し一も食すべきものとてはなく、貴蕉の小枝を碎ひて之を喫ひ、少許の雜草だも得べからずして、而して彼の「アセマ」の赤菓は實に余等の眼に向つて此上もなき樂を與ふるの目的物なりし。進む能はず、又退く能はず、一轉困難を歩つて又一層の困難に遭ふ。嗚呼余等の事、日に時に非なり。

十月七日朝六時半に於て、余等は例の通り、重荷を坂路に負ふて彈式的の旅行を始めたり。誰が爲の彈式、森林他の親戚知友あるなし、余等は自ら余等の彈式に向つて送るものなり、然り余等の墓は遠からざるべきなり。余等は香蕉の葉に彼の團類を取り、草根を探り、眠るが如く死するが如きの間に、七時間幽靈的の歩行を續けたり。十一時に於て休息の爲に、食事の爲に止れり。何を食せしか、各吏員は僅は少許の芭蕉の實を貯藏せしが、併し余の如きも自ら食せし所は唯二個に過きず、二日三日の糧食のみ。余の吏員等も概ね皆斯くの如くにして唯僅に砂糖なき茶を以て口を潤せしのみ。余等は木片に賭して互に方向を談ぜり。思ふに先驅せし余等の使者は今明日を以て彼の屯營に到着するを得るならん、左ずれば數日中には彼等十分の糧食を獲て途上に相會ふを得るならん」。是れ人々の等しく口にせし所なりと雖ども、何人も之を確信する能はざりしなり。時に彼等は余に向つて、余は曾て亞非利加の經驗に於て斯くの如きとに際會せしとありや否やと問へり。余は曰く—

「來た曾て斯くの如きの苦しきには至らず。固より亞非利加内地は到る所險難ならざるはなし、然れど

も今回の事は例外なり。イチュルに拘逮する九日間の行程は全く例外なり。余は曾てバンバイアより逃げ歸りし時に於て非常に飢餓に迫り、又其源泉を探らんが爲にコンゴー河を旅行するの時に於て悲むべき境遇に陷りしが、併し是れとても全く食物なかりしに非らず、而して余は確然たりしなり。奇跡の時代は已に去れりと人は曾へり、併し奇跡とは元來如何なるものか。セセヘはホレベに於て揭したるイスクィル人の爲に岩を擊つて水を得たりと云ふ。水に就ては余等は十分なり、餘る程なり。又エクィヤヤはチェリヘの川に於て鳥に由て救はれたりと稱す。併し此凡ての事に於ては一羽の鳥たりとも認めず。基督は神使に由て供給されたり、神使は今將た余等の境遇を察知せざるにや」。

奇跡にも恰も此時に於て、一羽の大なる鳥余等の頭上に舞ひ來れり。瞬間に余の獵狗ランデーは、是を擊げて之を見届め居りしかば余等の目は一同彼れの上に加はりしに、鳥は忽ち落ちてランデーの口に咥れり、羽ばたき頻りに脱却せんとを欲せしが、ランデーは確かと之を押へて放さざりし。

「諸氏よ諸君よ、余等の運命は未だ盡きざるなり、奇跡の時代も過ぎざるなり」と余は曾へり。余等の衷腸も鳥を見て何れも驚喜せしが、是れ則ち肥大なる珠雞なりし。狼狽にして余等は之を料理し、之れが捕獲者なるランデーも又相當の分け前を得て、次に人々の愛敬を極へ、余等も又彼れの頭を撫でつゝ一口の饗應に與れり。

翌日、余等は是れ迄鋼鐵舟を各個に分つて擔ひ來りしが、最早や之を荷ふに堪へざるに至りしかば、ウエッソンに向つて又之れを構成するとを委托し、而して出發後二時間許の處に、幸にも住民ある一小島を見出しければ、先鋒は小舟を取つて直に島内に押し上り、レエークスピーアの彎曲中に在るオルランドもどきの樣子を以て突然食物を要求せり。

「何をする、此亂暴人奴」と土人は驚けり。

「余等は食物が欲しい、二百人の同僚はあれ、あの通り飢へて將に死なんとするなり」。

土人等は此意を了解せしが爲か將た恐怖の爲にや、他の疑問を問ふとを爲さず、彼等の食物を其儘にして靜に立ち去りたり。余等は久し振りにて唐黍の二磅豆の半磅宛を得たり、凡て二十五磅の穀物を悉に見出して之れを各人の間に分配せしなり。

ウエッソン氏は尚ほ後に止つて鋼鐵舟を修繕し居りしが、午後に至り岸を逐つて曰く「願くは君等其村に於て食物を得るを得ば、之を余等に分與せよ」と。

余等は返書を認め、余が曾て射擊せし所の魚、彼の近邊に潜匿せしの形跡あるを以て之を探がし出さんとを求め、之れに添ふるに唯少許の穀物を以てしたり。

十月九日に於て、一百の人、必ず食物を得ざれば歸り來らずとの意氣込を以て、北岸より内地の方に

探檢に出掛けたり。余は水夫を率ひて河上に到り、スケーアス中尉の一隊は小徑をたどりて或る村落に到着せんとを期し、又徒ラに行くの氣力なきものは南方の森を通じて野草、菓實等を集めに出掛けたり。此邊の森間に生ずる豆類は、園畝に耕作するものに比して其大さ四倍許にして黒色の粉の中に生熟するなり。最初に於ては余等は唯之れを除きて而して之を煮て食せしが、爲に胃病を患ふるもの少なからず。率に島上に於て一の老婦人を捕へ來りしかば、余等は彼の女に命じて之れを料理せしめしに、先づ皮を除き、又其内部の渋皮を除いて然る後之れを粉碎し、之を以て彼の女は余等の爲に、菓子の類を調製せしが、其味は以前に比して遙かに良好なりし。是れより後各人間暇ある毎には隙に之が捜索蒐集を爲せしが、其量も又少なからざりし。余も此「レダー、フェンガー」然たる食物を見て、其外形も甘きそうなれば二三のものを嗅せしに、其味は恰も檸檬の如くなり。園類は種々の種類あり、或は番茄の如きものあり、或は一層淡泊なるものあり、併し是等は固より以て常食と爲すに足るものに非らず。此際ヂュレ。ナメクヂ。蝶。蜂の類に至る迄余等の腦に上りて人々其趣味を賞玩するに至れり。

翌日に至り、河を横切りて勢ひ能く進み行きしの集程者も其一部は目的を達する能はずして歸り來れり。彼等は北岸に於て一物をも見出す能はざると猶は余等が南岸に於ける如くなりしなり。にも拘はらず、彼等は痩せ我慢を爲して「ティンンヤク」「余等は明日か否らざれは明後日に於て之を見出すを得べし」と叫べり。

朝に於て、余は余の分け前なる最後の殘物、凡そ食ひ得べきものは盡く喰ひ終り、而して茶に至て腹は頗りに飢餓を訴へ、苦痛をたに加へ來りしが、今は一物の食すべきものなし。部下の廚僕ヲグ、ヲミスは馬鈴薯の葉をきざみて料理したるものを持ち來り、余に與へしが、此際に於いては喰ひ得ざるに非れども、余が胃の腑は尚ほ苦痛を止めず。次に一人のヂンヂーパル人は如何にも功名顔を爲して、一ダース許の菓に似たる菓實を持ち來りしが、見る所奇麗にして香も甚だよろしかりし。彼れの言に、味もよく、人々は何れも林間の珍味なりとて喜び食し、茲に持ち來りたるものは其中尤も能く成熟せしものを撰みしものなりとを告げたり。彼れは此他に例の豆を以て製したる結構なる菓子を供へり。余は其厚意を謝して之を味ひしに、果して其言に違はず、爲に少しく氣力を回復するを得たり。然るに是れより一時間許を經て余は大に眩暈を催ふし、床に入らざるを得ざるに至る。如蓋は恰も鐵環を以て頭部を締さるゝが如く、眼は眩やみて暫大眼鏡を用ゐたれども尚ほ擬蚯の文字を認むる能はず。余の僕も余と同じく、空腹に向つて彼の菓實を許多食せしが爲に、同樣の病を起し、苦しむとは余よりも一層甚だしく、其有樣は恰も孤舟の激浪に漂ふが如く、轉々轉々、地上に狂ふて尚ほ其ゆる所を知

らざるが如くなりし。

夕刻に至り、第一隊の糧者は三十六時間留守の後に於て、北岸より許多—此際に在つては許多の迂濶の實を挙げ来りしが、余等白人の飢餓を慰せしの外は、各人に向つて僅かに二個宛を與ふるに過きざりし。八磅の糧食を要すべき腹に向つて四オンスの分配、而も此時に取つては無上の珍味なりしなり。

スターアス、サエフソン并にパーク等の諸氏は、爲すとてもなければ、午後の間は、倫敦に於ける宴會の噂話杯を爲して時を送りぬ。

集糧者の中二人は失踪せり、併し余等は之れを待つの暇なし。此飢餓の合戦を立ち出て、一同十一哩の距離を上部に向つて馳せたり。

第三隊附の一人は彈藥の一箱を深淵に投じ著しくは落して之れを失ひ、カゼヲなるものはウヰンチエスター彈藥の一個を以て逃走せり。サリムはエミン、パシヤに供へたる新しき靴と余の靴とを取つて同じく逃亡し、アグ、アダムは外科醫パークの諸器械を奪つて去れり。又第一隊附のスワグは彼れの荷物を道に棄てゝ何處にか死に行き、牛顔のウチヤンゲはリミンントン鐵包の一個を取つて知れざるの郷に去れり。

十月十二日余等は東を南へ由て四哩半を進めり。サエフソン氏の率ひたる船は遙かに下部に在つて激湍に溺るゝを見る。余等は今北岸に沙つて運命を試みんものと思へり。舟を出んとを欲して諸所を探せしに、對岸に一艘之れあるを見れども、四百ヤードの幅ありて水勢も又急なり、最良の游泳者と雖ども之に達する能はず。

已にして視察隊は一艘の小舟、余等の南岸を去ると四十ヤードの島上に横はるを認めたり。三人の游泳者進んで之れを拉らんとを申し出で、其中にアグ、アスマンなるものあり、大膽にして誠實に、亞弗利加旅行に於て幾多の經驗を有するものなり。余は成功の報賞として二十弗を與へんとを約せり。アスマンはアドツエンス號の船頭なるウレングに比して、其勇敢なる所に於て少しく劣れども、實行誠意の人として一層價値あるものなり。

此三人は小かなる滝の下より泳ぎ出して流されながら、彼の島に達し、其間諸所の岩石に攀はりて方向を取らんとに決せり。日暮に至り、二人は歸り來りて余に告げて曰く「アスマンは彼れのウヰンチエスター銃を肩にして、泳がんと欲し、誤つて急流より旋渦の中に陥り、溺死し去れり」と。

余等は凡ての點に於て不運に向へり。先に涙遣したる諸頭領は未だ歸らずして其安否も知るべからざるに、平素強剛を以て誇りたる數人のものは逃走し、施條銃は次第に其數を減じ、彈藥は窮まるゝと

多し。ウレヂに次て、水夫として、兵卒として、運搬手として、又賊賞なるものとして隊中に知られたるフェルゆは先に蠻人の爲に刺されたる頭上の傷よりして將に死せんとす。

翌日は又滯在せり。余等は將に河を渡らんとして諸頭創は未だ癒らず、其中の一人クレッドの如きは、蠻人の間に於て、又と呼び王と言はるゝものなり。彼等は唯彈藥銃砲のみを以て輕裝其行を急ぎしものなれば、過る一周日に於て一百哩餘を馳せ得べき筈のものなり。此間、若し彼等にしてマンニャの屯營を見出す能はざれば、余等は此荷物を以て、此飢餓に迫りたる人を以て一週日の間僅かに二個の芭蕉の實と林間の菓實のみを食せしの身を以て、如何なる境遇に立ち至るべき。彼等は已に十分飢餓の爲に泣けり、三人は之れが爲に昨日死去したり。

夕刻に至て、ウェフソンは獵銃舟に由て來り、唐黍の供給を爲して各白人に十二抔宛を分與せり。此唐黍、是れ恐くは余等白人の生命を救ひしものならん。

翌十五日余等は余等の周圍なる木の皮を剝ぎ、又炭を以て之れに文字を書き附け、諸頭創が歸りし時の標識を作れり。斯くて遠征隊は河を北岸に渡つて岡陵の上部に於て會營せり。間もなくフェルゆ、アレは傷の爲に死せり。

今や余等の一行は非常に衰弱せり。余は彼の獵銃舟を收めて再び之を肩にするの命令を傳ふるに忍びず。假令世界の寶物は賞品として彼等の前に擲げ出さるゝとも、彼等は又余が命に從つて事を執るより外の力は出だし得ざるなり。余は今彼等に對して左の言を爲せり。

「我が親愛なる部下の諸氏よ、余等がヤンブヤを出づるに當てや、三百八十九人の壯夫に二百三十七個の荷物を取りしなり。余等は豫じめ資劇車に堪へざるものあるべきを圖り、八十人の豫備を供へて山岳の道に上れり。而して余等は五十六人をウガロークの屯營に止め、五十二人を火附チルンンに托せしを以て、茲に二百七十一人の人あるべき筈なるに、實際に於ては、先きに前路に出發したる諸頭創をも併せて僅かに二百人を數ふるに過きず。七十一人の人は或は死し、或は殺され、或は逃走せしなり。併し今又此小荷物を運ぶに堪ゆるものは百五十人に減却せしを以て余等は最早や此獵銃舟を運ぶの力なし。故に余は今此舟を茲に沈むべし、而して余等は食物を掛んが爲に此歩を急ぎ、以て余等自身を始めとし、彼のチルンンと共に無窮の邊に殘るものを、其死せざるの前に救護するの策を講ずべし。併し獵銃舟を運ぶものは則ち汝等なり、余等に非らず、汝等の之れに關する意見は如何に」。

衆員幷に其他の人々よりして種々の所見は開陳せられたり。中にウレヂは一堅非利加は一跨ぎと誇稱するウレヂは常の如くに卒忽として意見を陳べて曰く「我が所見は斯くの如くなるべし。足下は隨行隊を率ひて先づマンニャの探檢を爲すべし、我は我が水夫と共に飽く迄も、此瀬に向つて彼の船を

押すべし、速くべし、又漕ぐべし。斯くて二日間を過ぎ尚はマンニュエマ人を見出す能はざる時には、余は人を派して足下に此事を告げ、よろしく又孫に談ずるとあるべし。併し足下は我等を棄て去るべからず、何となれば盲人は獨り斯くの如き暗黑世界を通行する能はざる故に」。

ウレアの考案は最上のものと認められたり、而して彼をして又人衆の行爲に關する規定を爲さしめたり。

十時に相分れて出發し、須臾にして余等はアルウイミの谷を通じて高山峻嶺の間に入れり。余は一行を率いて北方道なきの森林を横切り、又成るべく捷徑を取らんが爲に北東の方に向ひ、獸徑を利用して以て進めり。進行は至て遲々たり、林藪は厚くして深かし、率に「ブレニューム」の實、「アセナム」の葉、大なる豆類、種々の蕨類等、彼處此處に十分なりければ、人々喜んで之を蒐集せり。數年間坂路に馴れざりしを以て、余等は枝を折り蔓を絶ちて一の峻坂を辿つる傍に、激しく心臟の鼓動を發へたり。

夜に入つて光景は寂寞を加へたり、言ふべからざる程に寂寞を加へたり。幾多の黑人は一人の白人に從つて、未だ曾て聞も知る能はざる、聽く能はざるの郷に、今は確たる目的もなく、森林を通して彷徨なり。彼等は已に餓鬼道に立つなり。前途如何なる愛日に出逢ふやも知る能はず。併し必進するに世

の中には死よりも恐ろしきものはなし、此死は則ち卓晩余等の遭着せざるべからざる所のもの。故に進むべし、進むべし、藪を切り木を倒し、濕藪の中をかき分けて北東へ、北東へと進むべし。汝等の食物は眞に是れ蕨根と木實とのみ。

余等が憩假の爲に休みし時に、部下のウマリなるもの三次酔の高さある樹の梢に於て、見事に成熟したる「アニチレ」の實を認めければ、之れを取らんとし、殆ど猿猴の技倆を以て樹に上り行き、已に頂上に達せしに、枝は忽ち折れて足場を失ひ一下には棄實を拾はんとて待ち居りたる二人の頭上に墜落せり。併し幸にも三人とも格別の負傷を爲さゞりし。唯ウマリは少しく足を傷め、他の一人は胸に傷みを覺へたるに過ぎず。

幾多殆と為殺さるべき荒野の間を經て、三時半に至り、余等は一の大なる擂鉢形の谷に來りければ、此處に於て余等を爲せり。此處には余等が到着の數分前迄、土人の一群蟠居を爲せしものなるが、彼等は余等の足音を聞き聞け、大に驚いて倉皇逃げ去りしものと見えたり。茲に圖らずも余等は唐黍の二プッシェルを見出せり。嗚呼人に災は無常に非るなり。

ザンザーバルより持ち來たしたる余の駿馬は、非常に疲労の体を見はせり。六月二十八日より夏來「アクメス」并に「アセマ」の外は一物も食すべきものなく、爲に今は殆ど其身を支ふる能はざるに進る。

依て余は其最後を怨がしめんが爲に、之れを絞殺したり。人衆は之れを見るや恰も其好なる鹿の肉に對するが如くに、互に爭ふて其肉を分ち、或は皮を得んと欲するものあり、又骨を取り之れを砕いて食せんと欲するものあり、或は又跡を取り來つて之れを數時間に沙つて煮出すものあり、掘くて悔むべし余の親愛せし駿馬は、殺れたる血と毛とを除くの外は、一物をも留めざるに至れり。彼の怪獸「ハイエナ」の一群を以てするとも掘くは奇麗に、之を食し去るを得ざるべし。人は其身躰と精神とに於て萬物の靈と稱せらる、然れども多數の人其時に臨て死なんとするの時に當ては、又彼の猛獸の所爲を笑ふ能はざるに至る。余は今、人衆の行爲を見て敢て之を責むる能はざりし。

晝間小憩の間、彼等は狀況に關して種々の非難を陳述せり。或は重げに頭を振りて曰く「君は某々の人の死去せしことを知り居るや。彼の人は失踪せり。一人は午後には其眼を眠るべく、他は明日之に從ふべし」。喇叭の聲は響けり、起て！進め！地獄の淵迄も進め！

半時間許を經て、先導者は駒りに斧を振つて密叢の林を切り開き居りしが、突如として一路に出でたり。見よ兩側の木は皮を剝がれたり、是れ疑もなくヤンエヤ人の爲せし所、萬死の境に臨の一路は發見せられたり、掛聲は前部より後部に勢ひ能く傳はりて、人々喜悅の喝采を爲せり。

「何れの道でしゃう」非難したる先導者は問へり。

「右へ〳〵、勿論」余も又喜んで答へり。此道や則ち余等が恐怖の時期を忘れしむる所のもの、依て以てナルソンと其從者とを助くるを得べきなり。

彼等は曰く「天の賜なり、余等は明日遲くとも明後日を以て貨物を得べきなり」と。三百三十六時間の間彼等は道なく、食なきの所を彷徨ひ來りて、尙は喜んで其密林をかゝへて三十六時間乃至六十時間を待たんとす、其心情察すべきに非らずや。

余等は一同非常に疲せたり、併し白人は黑人程にてはあらざりし。余等今彼等の顏色を見て之を憐むと同時に、衆は胸中に復活して將來は一層明かになれり。余等の從者の一部は何故に余等に借を吸くことを爲さゞりしか、彼等の多くは單に飢餓のみならず、失望を以てして死せるなり。彼等は數々言へり、「余等は何れの邊に向つて進むやを知る能はざるべしと」、是れ學術上の智識なきに於ては實に止むを得ずと雖ども、彼等は之れが爲に其腦の强固なるを致す能はざりしなり。勿論凡て是等を以てして敢て彼等を咎むべきに非らず、未だ探檢せざるの郷に進むは何人も必然を保する能はざるの事。人衆は實に非常に苦しみ非常に忍んで余等に效に從ひしものなり。一行中尙は五十人は健全なり。他の百五十人は眼はくぼみ、顏はやつれて、其挙止は幽靈の如く、骸骨を蔽ふに灰色の皮を以てせしと言ふに過きず。是等は眼に涙を注ぎ、口に稱名を唱へて、うなり〳〵御知し來りしなり。余の一匹の獵狗

ランプーも、非常に痩せ衰へたり。肉類は數週に渉つて唯余と共に驢馬の肉を分ちしの外は、一度も食せしことなく、草根木實は固より彼れの食物に非らず。其形は恰もセレム寺院の餓鬼の如くに變れり。スターアス氏は余と殆ど同樣の有樣、サエンメン氏は時々幸にも穀物の穂見を爲し、而して此間に在つて毫も其氣を挫かず。パークは依然として恐切に、元氣能く、而して又柔和なりし。森林に入ると層一層の深きに至て、愈よ益す余は人性の忍耐勇行の價値あるを知れり。

マンユエマ人の開きたる道は至て旅行に便なり。時として數條の道ある所に來れども直に正當のものを見出するに難からず。彼等も中々旅行家と見へたり、一哩一哩毎に漸く危險に近づくに從ひ道は益よ廣くなれり。余等は此間一二の沼澤を渉るに際し、黄蜂の群に由つて襲はれ、之が爲に刺されたるものは熱病を來き起せり。斯かる際にて在りければ痛苦は回復の見込其た稀なり。南東の方七哩を過みし處に由て、十七日午後、余等は其歩を止めたり。

夜を通じて暴風雨あり、非常に寒氣を加へ來りしが、留れば餓死せざるを得ざるを以て、余等は翌朝刻々出立の途に上れり。殆ど一時間餘を經て、一行は廣大なる間地の所に來りしが、彼は至て際くして前方二百尺の所を見るに過きず。暫ばらくの間歩を止めて、何れの道を取らんかと相談せし折に於て、彼方の方に、余等の聽き馴れざる聲を以て頻りに唱歌するものあるを覺へしが、須臾にして又喝采の聲を聽けり。思ふに是れ土人には非らず、此邊一帯は決して土人が歓楽を爲し得べきの地に非ず、必ず是れ他を恐れざる徒の屯集するものならざるべからず。依て余は直に三鉄の銃砲を爲せり。須臾にして彼等も又發砲を爲して之に應ぜしが、是れなん余等が久しく需めに、需めたるマンユエマの屯營なりしなり。余等は喜べり、次に喜べり、一同歓悦の叫を発げたり。

余等は平かなる坂を下りて谷間に入り込みしに、四面より幾多の男女見はれ出でゝ、又親愛の叫を爲して余等を迎へたり。余等は行く〳〵右を視左を顧みるに、此邊一帯物饒なる野ありて中に、唐黍、米、甘藷、豆等を十分に耕作せり。熟知したるアラブが歓迎の聲、親愛の情を見はせる言語、等しく余等の耳を掩ふて、余等は今各個の手を握るに急はし。彼等は彼等の本國に在ると同じく何れも肥滿にして健全の体を示せり。是等は皆マンユエマより來りしもの、其從屬の徒に到る迄皆其首領の爲に習ふて一同余等の爲に歓呼せり。

余等は彼等の案内に從つて豐熟せる穀畝の間を通じ一村の中に入る。少年婦女子等は今新に來客を得て明日の休暇を喜ぶものゝ如く、其挙止さへも至て自氣なりし。余等は一同廣々としたる鐘楼に腰打ち掛け、又悉に一同の歓迎を受けたり。已にして一隊遠く中に入り來るや案内者は一々厳粛に彼等に宛はめたる宿舎に導き、且て行き渡らざるものさへなかりければ、何れも皆心の底より上帝の恵を

感じ、イポトの部落よりパッポの流に沿る迄、一百九十七哩間、幾多苦ふべからざるの困難を、過去の話と爲して以て互に感恩喜悦の涙に暮れたり。

第十章　マンユエマ人と共にイポトに在り

イポトに於ける象牙の獵師○彼等が之を得るの方法○マンユエマの歸宿并に彼等の探索○一時の食糧を助ぐの方法○大僧正リベリーに由て說かれたる十字軍○余等がザンビーバルの酋長○チルソン大尉并に其部下に關する心配○一行食物の爲に武器を賣る○絹織物の樣式○之を賣盡せんとを懇求す○ウレデ地方者の諂を得て歸る○チルソン大尉の扶助に向てマンユエマ酋長に約したる約束○彼れの旅行に於けるロッツの報告○チルソン大尉并に外科醫パークの報告○余イスメーレと義兄弟の約を結ぶ○一同イポトを去る

此マンユエマ人―則ち象牙漁獵隊の一團は、今より五箇月以前に於て、ロータ并にレオポルド湖より流出する所の、ロークバの岸より、此イポトに移り來りしものなり。彼等の旅行は七箇月半を要し、其間一帶の土地をも尙ほ又平原をも見しとなく、聽きしとなしと言へり。殆ど一箇月の間リンダに於けるキャナに止り、而して彼等の酋長キロンガ、ロンガの爲に一の屯營を建てしが、間もなく、彼れも又此所に來り、更に二百人の銃手、二百人の人足を北東の方向に馳せて、遙か前方に於て巍然なる部落を發見せしめ、據て以て象牙掠奪の爲に四方の村落を打破せんとを企てしなり。彼等は絕へず戰爭を爲し、其感情的の野心は虎に乘りて殆ど止る所を知らざりければ、其銃手も遂に敗じて、七箇月の間に僅に九十を餘すに過れり。レンダ河に達せし時に、彼等はウガロークの部落に就て聽く所あり

しを以て、直に其掠奪場を横断し、レンダ河を渡つて以て當今の直隷なるイボトの南方、イチュッ河の南岸に達するとを得しなり。

土人等は小舟を取りて逃げ去りしを以て彼等は河を北岸に渡るを能はず、依て数に大なる樹を切り倒し、火と斧とを以て之れを個木舟の形に造り上げ、漸く河を渡りてイボトに達せり。是れよりして以來彼等は尤も殺酷非常なる捜索隊を四方に派出し、ンブクブ或はダガロッも三舎を避くるの勢威を逞ふして以て土民を強迫せり。レンダ丼にイヒュッ河の方に渉つて、彼等は各村落を焼き灰燼に帰せしめ、其打破の餘勢は延いて凡ての物体に及ぼし、芭蕉の林は勿論、河上に於て凡ての小舟は之を寸砕し去り、凡ての島は蹂躙せられ、凡ての道は捜索せられ、到る所皆荒蕪を畢にし、男子は殺され、婦人と兒童とは之を囚虜として彼等の所謂「殺窓」に供せり。北方丼に東方への距離は九日行程若しくは十五日行程に渉つて凡て彼等がレンダ河とイボトとの間に於て目撃せしが如く、森間の部落を荒廃に属せしめ、數十百哩の間を通じて一、満足なる小屋を見る能はざるに至らしめしなり。

是等の破壊者が、芭蕉の林、「マニオック」其他の畑を打ち潰せしの跡は、象、チンパンジー、猿猴等の類集り來つて、喰ふべきものは之を喰ひ、陷むべきものは之れを陷み、其跡よりは幾多の鰐、蛇、「カラマス」其他の蟲類、一時に発生して之を嚙ひ、須臾にして全く之が形跡を没却するに至るべし。」

イボトよりレンダ迄彼等の旅行せし距離は一百餘五哩なり。今此比例を以て彼等が東西南北の四面に、同一荒廃の跡を印せりとせば其廣袤は四萬四千立方哩の多きに達すべし。今此ウガローッが此地に在つて爲せしと、又將に其心に於て爲さんと欲する所を思ひ、丼にアクブのスタンレー、ブオールスに於て爲す所を鑑み、又ムミ、ムハク。ブワナ、モハメットの徒がオソ湖水の近邊を侵掠するの事蹟を察し、以て試みに其周圍に環點を附し、各自皆四萬乃至五萬の立方哩を占有するものとする時は、廣大なる上部コンゴーの四分の三は全く彼等が若干の象牙を得んとするの希望よりして、緊要なる土民は殺戮の用に供し終りしとを知るべし。

彼等がイボトに到着せし時に於て、数にマンユエッの頭領イスメーリア。カミン丼にサンガラメッなるものあり、其に一群あるべき肥大の人物にして、衛長キロンガ、ロンガの下に属し、一方の頭領として掠奪の手旗を振ふものなり。更るく彼等はイボトより出發して以て自己の任地に赴くなり。期くてイスメーリアにイボトよりイブウイッ迄丼にイチュッの東岸を掠げて之に所属せしめ、カミンの版圖はイヒュル河の道に沿ひ、イブウイッの東に渉り、而してサンガラメッの支配はイピナ丼にイヒュル河がイチュッ河に流れ入る間の、東西凡ての地に及ぶなり。是等の下に凡て一百五十の兵卒あり、併し銃砲を以て襲ふものは今は僅かに九十に過きず。キロンガ、ロンガは今尚はヤッナに在り、而し

て尚ほ三箇月の間は茲に來らざるべしと言へり。

此三頭領の下に屬する兵士はバクス。バレが幷にバリンゴラ等よりせしものにて、彼等が滿間の奉仕者としてマンエエマ人の修練を受くるとは猶ほ千八百七十六年に於て、マンエエマ人の背後等が、東海岸のアラブ人幷にスワヒリ人の手に由て修練せられしに過ならず。彼等は此上部コンゴーに於ても、彼のアラブ人の政策なる「土人の壯者は盡く之を殺戮し、唯其兒童等は己が手に於て生育せしむるの方法」が奪掠者の間に廣く行はるゝことを見るべし。婦女子はアラブ。スワヒリ。マンエエマの後宮に向つて分たれ、兒童は銃砲其他の武器を用ゆることを做ふて以て彼等の爲に用を爲すに至る。此兒童にして生長する時は、彼等は竹て貯へ置きたる婦女子を以て是等に與はし、而して後彼等と共に又奪掠事業に從事せしむるなり。其奪掠し得たる大部分はアラブ幷にセード、ピン、アベッドの如き酋長の占有に歸し、次は其部下なる諸頭領の間に分たれ、又殘りの小部は一般人衆の所有に歸するなり。他の場合に於ては、三十五磅以上の日方ある大なる象牙は各酋長の手に歸し、二十磅乃至三十五磅のものは諸頭領の間に分たれ、又其以下の細小なるものは之を見出せしもの丶手に歸せしむるの規定を爲すとあり。是を以て彼等は他く各全力を挙げて事に之に從ふに至る。全隊は酋長に由て武器幷に衣服等を支給され、而して酋長は唯コンゴー或はローラバ河の邊に留りて、幾多の婦女子をして側らに

侍せしめ、米と肉とを以て其慾を滿たし、而して諸頭領幷に人衆等は此命に從つて其殘虐非道の手を挙げ、容赦なく四方の部落を襲撃して以て、兒童、家畜、象牙等を殘らず掠奪し來るなり。是等の事、併しなから彼等にして彈藥を有するに非れば明かに、爲すことを得ず。之れなくては假令一咀たりとも彼等幷に彼等の從者は、其歩を進むること能はざるなり。左すれば今若し此彈藥を彼等の手に入らざらしむるの法を講ずる時は、彼等凡てのアラブ人は亞弗利加内地より速に海岸に引き上ぐるに至るべし、弓矢と刀槍とを以てして到底彼等は土人の酋長等に對すること能はざるなり。如何にして彼等は—ンゴラブ。アベッド、ピン、サリム。ウガロータ幷にキロンガ、ロンガ等はバリンゴラ幷にバクスの二三十萬の槍手に當るを得べき。又如何にしてウサヤに於けるアラブ人等はアルヤ幷にワルンゴに敵し、同じくウンヤムイエンベのアラブ人等はウンヤムウエサの弓矢の間に其生を了することを得んや。

此亞弗利加土人の發達を杜絶するの徒を制するの道は唯一あるのみ、則ち英國、獨逸、佛國、葡萄牙、南東亞弗利加幷にコンゴー洲が同盟一致して彈藥を、彼等自らの屯營幷に兵士を除くの外は、決してアラブ人等の手に賣り渡さゝるとに在り。蓋し當今亞弗利加内地より持ち出す象牙は盡く當正當の手續を以て得たるものに非らず。アラブ商人の所有に係るんての象牙は、一として土人の血を以て洗ひ

しに非るはなし。一砌は一人の生命に當り、五砌は一戸の財產に當り、二本の象牙は全村を破却して二十本の象牙は、一區内の村落、田畝幷に住民の生命を奪げしものなり。ロンドンに在つて象牙を飾の用に供し、之を以て玉突の玉を造り、徒らに其贅の華麗眞香を誇ずるの人は恐く其象牙の山て來る所を知らざるべし。之れが爲に、此十九世期文明の時代に在つて亞弗利加内地の數萬なる土地は荒廢に屬し、之れが爲に、其漸く野蠻の境域を離れて繁榮の端緒を出せしの部落は盡く皆滅絶せらるゝなり。此至大の慘狀を呈せしの結果は果して何人の腹を肥やすものぞ。彼等は暴虐非道其罪天地に容れざるものに非らずや、之に向つて文明諸國の法律を適用せば、直に其命を奪ふに非れば、其後年の歲月を暗黑獄裏に送らしむべきものに非らずや。嗚呼亞弗利加内地の富は實に彼等數萬の血潮此上なき手に出て私せらるゝなり。

余は此驚くべき恐るべきの事實を探ぐり來つて文明の土に歸りしの後、曾て大僧正クベサリーは、古十字軍の幟に習ふて歐洲より軍隊を派遣し、以て中央亞弗利加に於けるアラブ幷に之れが從者を撃破しまるべしとの策を述てしを聽けり。斯くの如きの計策は、彼のゴルドン將軍が一條の杖、六人の從士を以て、一萬四千人の土人に出りメーダン全州を掃蕩して、一次政府を建てんとを希望せしとと相似たるものあり。英國人は常に見識ある實際家を以て自ら任ずるにも拘はらず、時々は、クラッドストーンを始めとして、ゴルドン。クベサリーの如き虛空想上の說を懷いて喜ぶとなきに非らず。又之に關して近頃聽く所に出れば、一百のスウヤーダン人は各二十五砌の醜金を爲して、亞弗利加の東海岸に渡航し、其れよりタンガニカに赴きて以て、彼のアラブ人種を一掃し去らんとを企畫せりと。是れ實に其目的を遂する能はざるのみならず、自ら相率ひて死地に陷るものと言ふべし。

併し是等の事は今余等が敢に詳述すべきの事に非らず。余等は今マンエマ人衆と親しく交際を爲すの必要に迫り、以て彼等の心情、行爲を一層深く吟味するを得るの機に會せり。

彼等は、余等が先きに送りたる使者の事に關しては、未だ其の風說をだに聽かずと言へり。余等は飢餓の爲に許多の時日を遲引して而して後效に遂せしものなるに、彼等諸酋領が六人の輕騎隊を以て來た效に遂せざるを見れば、彼等は已に無き人の數に入りしものなるやも知るべからず。彼等の行徑は十二月十四日、十五日に、余等が渡船場に遂せし迄は確かに余等と同じかりしなり。思ふに彼等は深く事物に注意を加へずして、河に沿ふて遠くに進み、以て蠻人の群に出て虐殺されしものには非るか。余等の心は又彼の大財ナルメン幷に五十二の從者の上に存せり。余等の相別れしより已に十三日を經過せり。此間彼等の境遇は余等の如くにはあらざりしならん。彼等は余等と等しく密林の中に在り、併し荷物は所有せざりし。壯健なるものは食物の蒐集に從事せしなるべし、否らざれば小舟に乘じ

て、余等が十二月三日に潮湾せしの所に來りしなるべし。玆には其實眼、固眼等も少なからざれば、探つて以て一時の怨を滅ぐに足りしものわらん。併し余等は實に彼等の運命に就て損念なき能はず、余はイポトに到着するや第一に、ナルソンの倉庫に食物を送るべきことを叫れり。マンユエマ人は翌日と以て此事を舉行すべしと言へり。

余等は玆に三匹の山羊、十二箇の唐黍を得て之を六個宛各人の間に分てり。依て余等は二回の食物を料理することを得、人々始めて蘇生の思を爲せり。

一昨日の間は余等は非常に困難を嘗ぜり。自然の作用は奇妙なるものにて、食物なければ飢餓を感せしめ、食物多ければ却て食慾を奪ふに至る。余等昨今兩日を通じて嬉に許多の食物を食せしを以て消食機關に激動を與へ、之をして身體を損ふの用を爲さしめず、爲に又復た余等に向つて危害を與ふるに至れり。

マンユエマ人は三百乃至四百「エークルス」の穀物の畝、五「エークルス」の米作、多少の豆、甘藷等を作れり。此他に彼等は凡て土人より買み來りたる一百の山羊を有す。又彼等の穀倉にはイロコル河近邊の村落より奪ひ來りたる許多の穀物ありて、未だ其包をも解かず。其芭蕉の林は十分の果實を結びて、凡てに於て彼等の狀況は不足なきものに似たり。

余等は初日に於ては、彼等の爲に親切の待遇を受けしには相違なしと雖ども、三日目に至りては少しく此間に此情を減殺するに至れり。彼等は始め余等を迎ふるに際しては、余等が種々珍奇なる品物を持ち來せしならんとを豫期せしなり。然るに余等は不幸にも、以て容易に彼等の凡ての穀物を買ふに足るべき上等の飾玉はパンガの泥に近づきし時、舟の覆へりしが爲に之を失ひ、又金線の入りたるアラブ製の羽織は、ウガロークの電熱に近附きし時、逃走者の持ち去る所と爲りしを以て、今や深く彼等の意を滿たすに足るべきものなきに至れり。斯くて彼等は少しく其心に失望を加へしかば、例に由て余等の人衆に、直接に談判することを始めて、其所有に係るシャツ、帽子、ナイフ、衣服、帶等を得んとを欲し、少許の食物を以て交易を始めたり。蓋し是等は彼等の私有品なるを以て余等の敢て故障する能はざる所なりと思ひしなり。斯ひにして是等の品物を所持せるものは依て以て食物を得たれども、他は之を得ること能はざりければ、自他の間に嫉妬の念を起して果ては私かに他人のものを盜まんとするものを生じ、又不注意にも其彈藥、戎器、銅鍋、鋸、鋤、鍬、鋏、逆にリミントン施條銃をも賣り拂ふものあるを見るに至れり。斯くて余等は今非常なる飢餓の危難を免れ、土人等の騒擾に懸る恐れなきに至りしかども、玆に又殆ど「アラブ」奴隷の其又奴隷に變化し去らんとするの境遇に迫れり。

穀物に向つて酬償を爲せしにも拘はらず、余等は唯一日一人に對して二個の唐黍を受くるに過ぎず。

余は後隊の來るを待つて彼等に價格の三倍を拂はんことを約したれども、彼等は所謂「後に依ての虎の子よりも目の前の猫の子」を愛せり。彼等は余等が織物を所持するの虛實なるかを疑ひ 又余等が效迹來りしは其意、彼等と戰はんが爲にはあらざるやを疑ふに至れり。余等は唯一日一人に對して六個の唐黍を拂んとするの外は彼等に對して惡も惡む所非らざりしなり。三箱の施條銃は其形を失へり。之れを彼等に紹介せしに、頭領は眞に知らずと言へり。茲に於て余等、彼等の心意を察するに彼等は余等に害意あるとを信じ、之れが發表に先つて余等の銃砲を私かに引き上ぐるの策を取りしものに似たり。先づ余等の武器を奪つて而して後、余等に其欲する所を命令せんとせしなり。

廿一日に至て、又六箱の施條銃を失へり。此割を以てせば遠征隊は須臾にして破滅に歸すべし。余等此森間に立て武器なくんば假令如何なる氣力を以てするとも遂には立往生を爲さゞるを得ず。進む能はず、退く能はず、唯彼等マンユエマ人に從つて其が鞭撻の下に、象牙掠奪の業を執らざるを得ざるに至るべし。此故に余は此點に向つて嚴重なる制裁を附し、併せて彼等をして怒號の叫びを揮ぐるに至らしめざる前に、我隊を全ふせんことを計れり。

點檢を爲せしに、五人は其銃砲を所持せざりしかば、各二十五の打擊を加へて之を鞭し置けり。醜々吟味を遂げしの後、又一人に向つて打擊を與へんとせるに際し、側に在りし一人は進み出でゝ言を爲して曰く—

「此者は全く其罪に對しては自ら知らざるものなり。我れは彼れの施條銃を我が小屋に供へ置けり、個は昨夜料理人の一人なるヴユマより奪ひ取りしものにて、彼れは之を以てマンユエマ人に賣却せんとを欲せしなり。則ち此施條銃を此人より竊み取りしは恐らくヴユマなるべし。他の人の言ふ所を聽くに何れも皆、彼等が眠れる間に、何者かに竊み去られしものなりと言へり。此事も又其れに相違なかるべし」と。此間、ヴユマは抗言を爲せり、併し後に又一個の施條銃、織物の獻に隱くしあるを認めければ更に之を吟味せしに、金よりマンユエマは其實を具して、彼れはマンユエマ人の求めに應じ二個の銃砲を竊み、以て織物或は山羊と交易せんとを欲せしなりと言へり。是れ恐くは事實ならん、併し他に少しく疑ふべき所ありければ之れを其儘に爲し置きしに、後に又一事件起り、ヴユマが之れを竊みしの證跡十分にして彼れも又其事實を自白したり。依て余等は直に彼れに宣告を爲し、以て之を絞殺せしめたり。

是等の事實に由つてマンユエマ人は、余等の銃砲を織物の少許を以て買はんとを企てし事明かなるに至りければ、余は人を派して頭領に向ひ、直に之を返却せんとを求め、若し之を肯がはざるに於ては其責任は彼等の上に加はるべきとを告げたり。彼等は最初に在つては憤怒の勢を示せり。我がザンヴ

ーバル人を村落の外に追ひ退け、暇は將に始まらんとして機は一髪の間に係れり。我が遠征隊の運命も愈よ危殆に迫れり。余等の人衆は驚駭せり、其身體に於て、又精神に於て求む平生に復せず。其力の無むに足らざるとは彼等が施條銃を以て穀物を買はんとするに於て顯すべし。一度戰鬪の起るに會せば、到底勝利を得るの見込あるなし。人をして勇剛ならしめんと欲せば先づ十分に其口腹を滿はざるべからず。假令又萬一勝利を得るとあるとも、彼等を殘らず退却せしめんには少くとも我が人衆の一半を失はざるべからず。余等は已に十一挺の施條銃の外に三千個の彈藥を賣却し去られしなり。故に余等は今此場合に於て此儘に默すると能はず、余は更に人を以て言はしめて曰く「彼等にして之を諾せざる以上は之を他の方法に訴へざるべからず」と。同時に、彼の絞刑に處したるウニマの屍體を樹の上に掛け、彼等に示して以て、之を賣りしの人を極刑に處せし以上は余等は決して之を買ひしものを此儘に棄て置くべからざるの意を示せり。

彼等の部落に於て一時間餘の紛擾を爲せしの後、彼等は五挺の施條銃を持ち來りて余の前に供し、意外にも其之を賣りたる人衆の名を示せり。余は此時已に心に決する所ありしかば、彼等にして凡ての銃砲を返へすに非れば—余にして余の側に向て五十の人を確かむるを得ば、余は直に戰鬪の和睦を爲さんとを思ひしが、恰も此時に於てアドヴェンス號の忠節なる船頭ウンダは、飛ぶが如くに會堂に來り、船は安全にしてイボトの上陸所に在ると、且つ彼れは此地より四哩許の所に於て、先きに派遣したる彼の六人の船頭を、北將に飢えて死なんとするの際に助け來りしとを告げたりしかば、余の心の感情は爲に一轉せり。已に失ひたりと思惟したる六人の發見、ウンダが其の職を全ふしての到着—困難を見て棄て去るものゝ多き世に、斯くの如きの働きを爲せし彼れの面貌は、余をして驚ばし、言はんと欲して言ふ所を知る能はざらしめたり。

時に余は此場の次第を來げてウンダに告げしに、彼れは自ら爲に當りて此事を處辺し、マンユエマの敵對の感情を和らぐべきとを告げ、又余に向つて、過去の事は過去の事と爲し、開然の時代は速に終りたれば將來は必ず希望を以て滿たすに至るべしと言へり。

罪人は明朝に至る迄束縛し置くとを命ぜり。ウンダは彼れが卒直の風を以てして直に能くマンユエマ諸頭領の意を融解し去れり。謝罪に來るものあり、穀物の贈物を持ち來るあり、事は平和に歸せり。穀物は各人の間に分與されたり、將に余遠征隊を打破するに至るべき妖雲は一掃されたり。余は速に至て實に、此好結果を見るに至りしとを喜べり。

サルンンの會營せし所より余等の先導を爲すを以て任とし、輕裝其途に上りたる六人の頭領等は二十三日に於てイボトに到着せり。彼等は不幸にも結果なき旅行の間に彷徨し、以て余等をして却て先導

の地位に立たしめたり。十七日の間、荒野の中に排徊して食物とては草根木實の外に之れなかりしかば身躰は非常に衰弱の體を見るに及びしが、余等を見るに至て又頗く慚愧の情に堪へざるもの〻如くなりし。彼等は南東より流れ來る所のイビナ河に遡して、是れよりイチュリ河と合流の所を上りて二日程を跡せ、而して其れより又一艘の小舟を求めて南岸に渡りしが、数に甚しく飢餓の爲に苦んで殆ど動く能はざるに至り、幸にもウンヂの之を發見するに會し、イボト〻の方向を告げしかば、彼等は個個するが如くにして漸く余等の舍營に達するを得しなり。

夕刻に至り、マンユエマ第三の回個なるサンガラメニは十五の見事なる象牙を得て彼れが探索の旅より歸れり。彼れは廿日程の旅行を爲せし所に、高き岡の上よりして一面の草原を望み見しとを告げたり。

此の日彼等より受取りたる糧食を以つて、余はサルソンの隊に向つて二箇の唐櫃を出〻しの外に、各人に對して二個宛を與ふるとを得たり。併し事全く平靜を告ぐるに至らず、サルソン扶助の爲に余の要求せしとは、未だ確然たる返答を得る能はざりし。余等が部下の一人は報讐より報物を窃みしの廉を以てマンユエマ人の爲に刺し殺されたり。余等は彼等の爲にマンユエマを絞殺し、二十人の人衆は火藥を窃みしを以て鞭撻を加へ、又一人は窃盜來遂犯を以て、マンユエマ人の爲に二百の打擲を受けたり。若し此時に在つて通常の道理を來行するの道を取りたらんには、余等は斷然戰を爲すの外に道なかりしなり。

余は實に滿身の誠意を以て彼等に忍耐を教へ、希望を示せり。此事を處するに道なきに非らず、併し余は此場合に於て彼等が余の手を離れてマンユエマに從屬するに至らんとを恐れたり。マンユエマは其饗宴の狀態を以てして頗る彼等人衆の希望を引くに足るものあり、余等は今は漸く多難の日を免れしと雖ども前途は窺も知り難きに非らず、故に余は成るべく速に部下を率ゐてマンユエマ人が荒廢に歸せしめざる村落に出で〻十分の粗食を得るに至らんとを望めり。斯くて余は深く彼等を戒めたり、併し結果は恰も木石に對するに異ならず、彼等は容易に失望の下に提縛せり。

二十四日に、河の向ふ岸に於て三發の鐵砲を爲すものあり、彼等はキロンガ、ロンガの到着せるものならんとの觀測を構へ、再び扶助隊を出發するとを猶豫せり。

翌日に至て彼の鐵砲を爲せしもの〻屯營に到着せしを見れば、彼等は十月二日に於て道上余等に會合せし所のもの共なり。十五人の中一人は矢傷に就て死せりと言へり。彼等は二十四日の川道なき所に排徊せしが、一の荷物とてはなく且つ十五日間の食糧を用意せしかば、非常の境遇には陥らざりしが、併し殘り九日間は全く草根木實に生を繋げりと言へり。

此夜余は更に扶助隊の件に就き議列を爲し、三人の頭領をして左の件に同意せしめたり。

「大尉チルソンを扶助せんが爲に四百個の唐黍を以て三十人の人を派遣すべき事」。

「大尉チルソン外科醫パーク幷に所に於て働く能はざる凡ての病人に、余がアルバルト湖より歸る迄、供給を爲すべき事」。

「イボトよりイブウィッ迄余等に向つて嚮導者を支給する事、之に向つて余は後隊の來るを待つて細物の一箱半を支拂ふべき事」。

クレッドに命じて「アクビック」を以て之を認めしめ、余も又「インクッツル」にて之を認め、三頭領の面前に於て之れを約せり。

余は余の裝飾品を以て、サエフソン幷にチルソンに向て二百五十個の唐黍を買ひ、二百五十個のビストル鐵包を以て他の少許を買ひ又一個の銃を以て二能を求め、香水の三瓶を以て三羽の鶏を買ひ、斯くて余は余等幷にチルソン等に對して凡て一千個の唐黍を用意するとを得たり。

廿六日に於て、セントチー、サエフソンは四十のザンザーバル人幷に三十のマンユエマ人を率ゐて、チルソンの倉營に向つて出發せり。北途上の有樣は彼れの報告に於て能く之を敍に掲ぐべし。

千八百八十七年十一月四日

スタンレー君足下、余は十月二十六日の正午を以て、三十のマンユエマ人幷に四十のザンザーバル人を率ゐて出發して河を渡り、午後に至て上陸所に倉營せり。翌朝拂曉、余等は出立して、余等が甘てアクプを辨ねんが爲に飢餓の腹を抱へて彷徨せし時の渡船場に至りしが、余等が其時炭と矢とを以て皮剝ぎたる木に書き附けし文字は、今尚ほ明に存在せり。此夜余等は他の倉營に進せり。翌日余等は、余等が甘ての旅行の三倍を跳せたり。先きにフェルサ、アレが重傷を負ひ、余等が三日の間、烟悶苦痛の日時を送りしの倉營は、余等に向つて昨尚ほ今の如きの感を與へたり。此日通行の間、余等は彼の全く飢餓の爲に其身を終りたる部下三人の遺骸に遭遇し、余等をして彼我其地位を代ふる實に一髮の間に在りしとを思ひ起さしめ、余は爲に惻怛の心を碎けり。

廿九日の朝に於て、余は此日を以て是非ともチルソンの倉營に達し、其生死の事實を明にせんとを決し、未明に出發の途に上れり。余は唯一人を從ひしのみにて、狼狽にして遂に全隊の先に進めり。チルソンの倉營に近づくに從つて、余は益す情意の馬に鞭ち、焦ゆるが如きの心を早めて河を越へ、澤を渉り、或は岸に沿ふて密林をくゞり、以て速に彼の側に到着せんとを謀めり。此日は常よりも速に暮れなんとす、途上又二二の遺骸を認めて心は愈よチルソンの方に走れり。余が彼れの倉營に

向て面を蔽せ下るに際してや、見る所酒て寂寞にして耳に聞ゆる樂だもなく、漸く近づくに從つて唯小風の中に二人の將に死なんとして痛苦の號鳴を發するを聞くのみ。余は實に時徒れたりと思へり。余は靜に、如何なる狀況ならんかを恐れながら、天幕の側に近寄りしに、チルソンは獨り椅子に依て座せり。余は立つて彼れの手を握れり。彼れは顏を擡げて嘯唏し、言語もかすかに、衰顏の眸を言ひ見はせり。

チルソンは其容貌非常に變れり、痩せ衰ひて眼と口の周圍には深き幾多の線を生じ、日も常てられぬ有樣と爲れり。漸くに彼れは余に問つて、彼れは日を經るとも、日を經るとも扶助の來らざるを以て非常に心配し、遂に、何事か意外の事起りて余等は彼れを見棄つるに至りしものならんと思ひあきらめたりと言へり。彼れは重に、彼れの二人の使僕が毎日持ち來りし所の木實草根の上に露命を繋ぎしなり。足下が彼れと共に殘せし所の五十二人の中、僅に五人存在し、其中の二人は將に死なんとする境遇に立つなり。他は皆或は逃走し或は死去せしなり。

チルソンは自ら足下に對して最等の事を具狀すべし。余は足下か彼れに送りし所の食物を彼れに與へ、而して直に雞を料理して之れを食せしめたり、是れ彼れが久しきに渉つて始めて食したる滋養品なりしなり。余が救に來りしより二時間程を經て人々一同到着し、彼れの天幕に群れ入りて共に

彼れの無事を祝せり。

足下は余等がチルソンと別るゝに際して、彼れの足は甚しく傷れ居りしことを知るならん。彼れは其後、引き續きて同樣の有樣にて一歩も天幕の外に出づる能はざりしなり。一時は彼れの片足に於て十個の潰瘍を生ぜし程なりしが、併し今は大に快癒に赴き此分にては靜に余等に伴ふを得べしと言へり。三十日に於て余等は踵邊に上れり。余は荷物の大部分は、之をマンユエマ人幷にザンザーバル人に負はしめしが、尙ほ力及ばずして十三個の彈藥幷に其他の七個の荷物を擧げて之を地下に埋却せり。パーク氏は遠からずして之を持ち來たるを得べし。

チルソンは此日の夕刻に至ては強く衰へしかども、思ひしよりは能く旅行を爲すを得たり。歸路に於て余等は此前よりも河下の方を横切り、而して路を右岸に取つて、アクブの屯營より一日程許なる、先きに足下の通過せし路に出でたり。茲に余等は又幾多の骸骨に遭着せしが、或る場所に於ては二百ヤードの中に三個を見出せる程なりき。

五日目に、即ち十一月三日に余等はアクブの屯營に到着し、チルソン扶助の務は終れり。彼れは旅行の爲に困難を感ぜしにも拘はらず、速に回復の色を見はせしが、併し今以て夜に於て眠ると能はず、且つ少しく神經の發動強きを見る。余は此所に在つて暫らく療養を加ひなば再び全快に至るべ

きとを信ず。彼れが病劣の眸を以てして余等と共に食なきの荒野に彷徨するとは、到底爲し能はざるの事、左すれは彼れは今日迄彼の地に殘り居りしは、必竟彼れが爲に來なりしならん。

ヨー、ウエー、セントテー、ウエフソン

又大尉チルソン并に外科醫パークの報告書は左の如し。

イポトに於て、

千八百八十七年十一月六日

ウエフソン氏は一隊の從者と足下が余に送りたる糧食とを以て、十月二十九日に余の倉庫に到着せり。糧食に非常の缺乏を告げし折柄、實に足下の厚意の周到なるを感ぜり。余等が當時の狀態に關しては、ウエフソン氏之れを具狀する所あるべし。

余は過ぐる十月六日を以て足下に分れたり。九日の朝に於て、余は一艘の小舟を輸し。ウマリ并に十三の强壯者を對岸に送つて糧食を搜索せしめたり。他の人衆は何れも病羸くして働作に堪へざりし。八日に於て、第一隊附のアサニ余の所に來り、彼れは病の爲に前部より離れて來りしことを告げ、同日又ウレヂの兄弟なる某、倉庫に來り、余に向つて、彼れは余等が皆てマンニュマ人に遭ひし所の倉庫に近く、芭蕉の實を取るの間に道を失せしことを告げたり。十日に至り、余はスチーアス の隊附通譯の一人なるウニマは夜に於て私かに十人の人を率ひて一艘の舟を取り、河下に下り行きしことを知れり。十一日に余人衆の點檢を爲せしに、五十二人の中、僅かに十七人を殘し、餘は皆前方に逃みしか、或は河下に下るに至りしなり。十四日に一人死し、ウマリは二日程に宛つべき少許の芭蕉の實を携て歸りしが、余は喜んで之を食せり、余は此時迄瀉痢と關節との外は何物も食せざりし。十五日に他の一人死し、セーヂは此夜他の人と共に一艘の小舟を取つて間じく河下に下り去り、ウマリは又河を渡つて内地に入れり。十七日にウマリは更に二十一人を率いて糧食の搜索に出で、十九日に一人死し、二十二日に二人死し、二十三日に又一人、廿九日に又二人死し、三十日ウエフソンの到着せし時に一人死し、而して余等は此地に向つて出發せり。ウマリは未だ返らず、併し彼れにして生存する以上は必ず茲に來るべし、彼れの人數は詳かならざれども、思ふに彼れと共に來るべきものは五六人ならんか。ウマリより得たる少許の芭蕉の實の外は余は全く塊根、木實、蘚類に由て生活せり。余は余の左足に於て十個の潰瘍を生ぜしを以て、毫も自ら食物を得ること能はず、二人の使僕并にパルク。アヂクの供給に由て此日を送れり。ウエフソンの來りし時、余は非常に衰弱し居りしが、併し余は少しく快方に赴けり。余等は十一月三日に此地に到着せしに、即翌日イスメールは余に送るに粗末なる食物并に二匹の乾魚を以てせり。

昨日に至り、二日間に沙つて食物を供給せざりければ、余は人を派して種々の請求を爲せしの後、

漸くにしてイスメールは少許の食物を送れり。常今余は余の衣服を賣却し食物を求め、殆ど一物も彼の如個より得る所なし。今日余はドクター、パークと共に彼れに面會し、ハミス、パリを通辯人として食物に就て掛合を爲せしに、彼れは、足下と彼れとの間に此事に關する相談とてはなく、彼れは唯厚意を以て余等に供給するものなりと主張し、余等の使僕三人を彼ふとを拒めり。是れ恐く彼れの虚談なるべし、如何。

千八百八十七年十一月六日　　イボトに於て、

アール、ニーチ、サルソン

スタンレー君足下、大尉サルソン幷にシエフソン氏は、本月三日に於て、ザンザーバル人幷にマンユエマ人と共に荷物を以て歸り來れり。サルソンは非常に衰弱の色を見はせしが、到着以來余は彼れの健康を復せんとを希望して糧食等勉めて滋養多きものを用ゐ居れり。唯一の困難なるはアクアの如個等食物を供給せざるに在り。余等は貴物品を賣却して以て漸く糊口を爲すに過きず、斯くの如き有樣に於て生活ずるは實に不愉快の至なり。

併し余等はアクアに對して成るべく平和の策を講じ、以て足下が後顧の憂なく、速にエミン、パシャの力に達せんとを望む。是れ余等が大目的とする所のものなればなり。

アー、ニーチ、パーク

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

廿六日の夜に於て、如個イスメールは余の所に來り、而して彼れは余の人と爲りに就て頗る感ずる所ありければ、義兄弟の約を結ぶとを許されよと言へり。余は心の中に於ては斯かる奴隷の如個と兄弟の約を結ぶとは夢にも好ましからざりしが、今は彼れ幷に其間係に向つてサルソン。パーク幷に殆ど三十の病人を托せんと欲するものなるを以て、彼れの意をムゲに拒絶せば事遂に破るゝに至るべきを察し、面を被つて儀式を挙げたり。依て余は一枚の敷物、絹ハンケチ幷に其他の數品を彼れに贈り、又余等の同盟を爲さんが爲に前途十五日の行程の間、マンユエマ人を伴はしむべきとを約し、其他救に滯在すべき余の友員等を厚遇すると等を條件とし、外科醫パークの面前に於て、余はロンドンに於て四十九磅の價せし金の時計と鏡を彼れに贈れり。

翌日、外科醫パークをしてサルソン幷に二十九の病人を治療せしめんが爲に救に止まらしめ、余等は他の健全なるものを率ひ、速に目的の地に進まんが爲に、マンユエマの嚮導を得て以てイボトを出發せり。

第十一章　森林を通じてアザンガニの峯に向ふ

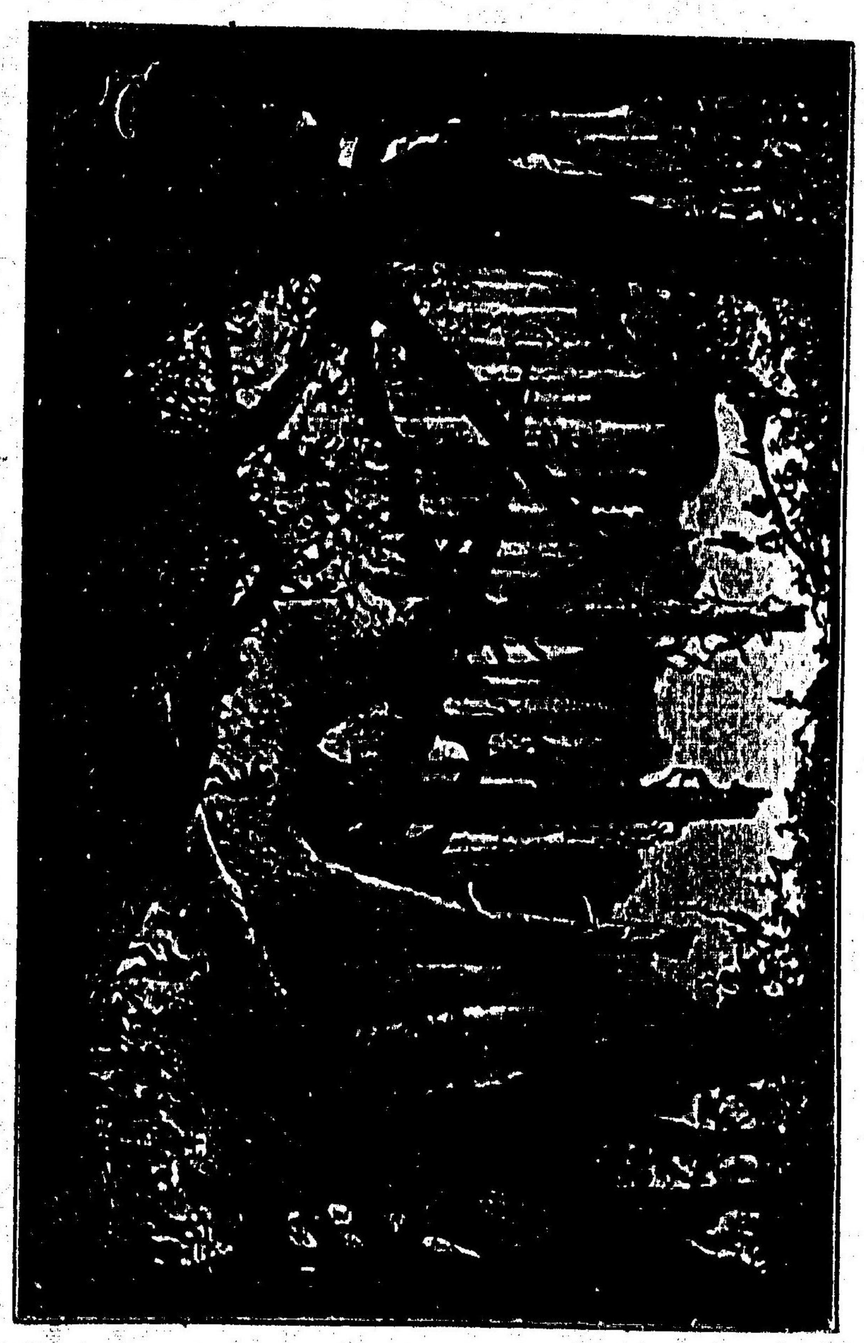
パレンケの國に於て○彼等の家井に其周圍○ブキリの土人○横人種の第一の村○行程遠なる為なり○マンナンの所より
の許○東洋インデカルに於て休息す○三時井にカミスセの小給接○一同イグウセリに着す○カミス非に一軍隊なるザンロ
ーバル人○イグウセリ位置○十分なる糧食○一行の有様非に彼等が經過せし所のもの○カミス二三者を使役なる叶味す○山
羊の一群を獲て歸る○カミス、ボルヨーを出發す併し之を許せり○ロコツソン氏ヨルソン大尉の狀動よりして歸る○カミス
非にマンユエマ人の出發○イボトのキロンガ、ロンガ會社に對する誤解の記錄○シンバ自殺す○同一邦に於けるナリの國都
○ステーブス中尉歸狀を來候す○イグウセリに於ける蒸會非に再開成○一行の遠歩せる狀況○ボルヨーの村○パレンケの風
俗○東部インデンドル○一同森林の外側に出す○終に日光を見る為得たり○美麗なる立野○美なる微塵の雲○インデン
ク非に其産物○ロムマの産物○邦びイチハリ河に出ず○一同廣原の上に在り○村々に於ける蒸汽○小屋建築の方法○パレン
ケの鹿爪○余等がムビリの作成○土人舍物を讃ふ○イチハリの流○アンダマの土人○イグウセリ人出でゝより余等の食
物○マザンボエの峯○東部イチハリ○彼等の結社○土人の狀態動○ウンビラカムの頂上に於ける余等の食事○大量なる蒸汽
れ○土人との和解○余等は彼等を追ひ散らすの止むを得ざるに至れり○和成る○マンデムスマの無論

余等は二時間にしてヤンプに達し、又翌日四時二十五分間の旅行を爲してブレンダに到れり。

余等は今ベンツの國に來れり、日々の述懷も大に異れり。家は木造の長屋にして二百尺乃至四百尺の長さに渉り、其形恰も一の金巾家を屋根の中央より切斷して之れを兩側に引き離したるものゝ如し。

其構造見事にして板、柱の類も恰も文明國述築師の器械を用ゐたるかの如く平滑にして且つ奇麗なり。故に他の種類の居住する小屋に比すれば、火災の危險も多かるべきも平素の居住には便利にして且つ愉快なるものなるに似たり。

パレンケの他の奇觀とも稱すべきものは村落の四周を繞る間地の有樣にして、時としては非常に廣大なるものあり。其直徑は殆ど一哩半許に渉り、全面は種々巨大の木石等を散布し容易に人をして通行するとを得ざらしむ。故に旅人の茲に來りて其村に入らんとする時は一々此上に上り、之れを越へて數時の後に非れば能はず。森林の際を離れて一歩を進むるや、人は先づ、伐り倒せし僅の百尺許の長にして數尺乃至數十尺の高さに横はれる木の幹に上らざるべからず。已にして之を經過し來り、地上に達すると數尺、又直徑殆ど三尺許ある大木の横はるを見る。他に道なきなり、之に上らざるを得ず。忽にして枝の縱横交錯する所に會せば、彼れは伏して其下をくゞり、時には林をかはし、時には御剣して以て枝より幹に、幹より枝に移らざるべからず。彼れは小枝の障害を右に遮け、左に流し、漸くにして上方に進めば、又更に巨木の此上に横はるを見るべし、上るべし、上るべし、須臾にして彼れは地上を去る二十尺許の高さに達すべし。是等の事に恐れて怯懦を催ふすが如きとめるべからず。程好き枝を撰みしの後、足を之に掛けて身を移し、又靜に樹の枝を下りて地を去ると六尺許の處に來れ



ば、彼れは宜しく他の樹の枝に飛び移り、又二十尺許の高さに上るべし。斯くの如きもの數回乃至數十回、燒くるが如きの太陽の下に流汗雨の如き身を支いて數時を沙らざるを得ざるとあり。余は此恐ろしき昧操を爲すの間に、三度危ふく死に瀕せり。一人は木より落ちて死し、之れが爲に負傷を爲せしものも少なからず。亦た人々は之を渡るに於て幾分か容易なれども、靴を穿つものは中々に危險なり。初に於て早く鞋来た乾かざるの時、或は雨後、或は先きに渡りしものが拂らかなる土を蹈み付けし跡を靴にて蹈む時は、忽ち地上に落つると妙なり。余は一時に六度失脚せしとありたりき。村落は則ち此中央に於て建つなり。余等は此間地に對しては實に一喜一憂を懷けり、何となれば余等は村落に入つて安全に食餐を爲すを得ると同時に、此險難なる昧操を爲さゞるを得ざるを以てなり。併し一隊數百人が共に其歩を運ねて之れを爲すの樣は極めて壮觀なり。小流あり、沼澤あり、堀あり、溝あり此上に横はるの丁木は恰も架橋の如くにして、其高さは時として二十尺より二十五尺に達す。二三の人は已に落ちたり、一二の人は今落つる所にして、他に又五六の人は將に落ちなんとす、斯くて揚々として上部を無事に通過するものあれば、足を傷め手を傷めて、驚きながらに下部を匍匐するものあり。多人數は縱横に進出せる樹の枝の間に彷徨し、二三十の人は恰も小島の如くに一枝の上を渡り、尚又十數の人は其何れの道を取るべきかに惑して躊躇し立ち竦りて狼卒の姿を夢ぶものあり。若

ば、彼れは宜しく他の樹の枝に飛び移り、又二十尺許の高さに上るべし。斯くの如きもの數回乃至數十回、燒くるが如きの太陽の下に流汗淋の如き身を支いて數時を沙らざるを得ざるとあり。余は此恐ろしき時操を爲すの間に、三度危ふく死に瀕せり。一人は木より落ちて死し、之れが爲に負傷を爲せしものも少なからず。亦是の人々は之を渡るに於て幾分か容易なれども、靴を穿つものは中々に危險なり。初に於て早く露來た乾かざるの時、或は雨後、或は先きに渡りしものが撒らかなる土を陷み付けし跡を靴にて蹈む時は、忽ち地上に落つると妙なり。余は一時に六度失脚せしとありたりき。村落は則ち此中央に於て逃つなり。余等は此開地に對しては實に一喜一憂を懷けり、何となれば余等は村落に入つて安全に余等を爲すを得ると同時に、此險難なる時操を爲さゝるを得ざるを以てなり。併し一隊數百人が共に其歩を速ねて之れを爲すの間は傾めて清觀なり。小流あり、沼澤あり、堀あり、溝あり此上に横はるの五木は恰も架橋の如くにして、其高さは時として二十尺より二十五尺に達す。二三の人は已に落ちたり、一二の人は今落つる所にして、他に又五六の人は時に落ちなんとす、斯くて揚々として上部を無事に通過するものあれば、足を傷め手を傷めて、驚きながらに下部を徊徊するものあり。多人數は縱横に進出せる樹の枝の間に彷徨し、二三十の人は恰も小島の如くに一枝の上を渡り、尚又十數の人は其何れの道を取るべきかに躊躇して暫はし立ち留りて狼卒の姿を夢ぶものあり。若

し此際に於て土人の襲撃し來るあり、四方八方より毒矢を注がるゝに至らば余等は共にハガを負ひし島の如くに、自由に彼等の捕獲する所と爲るに至るならん。余等は常に萬一の事を計りて、之を爲すには強め十分の觀察を遂げしを以て、斯くの如きに際會するとはなかりしが、併し之を爲し終るの時に於て何時も多少負傷を爲すものゝ無かりしとはあらざりし。

廿九日に於て、余等は六時間に九哩餘の旅行を爲してブキッに達せり。

此地の土人はマンユエマ人が波盧の酋に、止むを得ずして屈從せしものと見え、余等の其村に入るや、「ボド〳〵、ウレンダ〳〵」の聲を擧げて歡迎せり。酋長はムタニと稱するものにて、磨き立てたる鐵片の裝飾品を着け、北頸輪、腕輪の如きはカククウェ并にウハの風俗に似たり。彼等は豆、黍、の實、烟草、甘藷、瓜等を耕作し、山羊、雞類も少からず、併し時候の爲にや馴鹿は甚だ少なかりし。

翌日余等は滯在せり、マンユエマの酋長は余等の部下に對して時々糧食の所需を加へ、北土人と交易を爲すに當りても種々いらざる世話を爲し、珍奇の品物と見れば之れを買らざらしむるやうに爲せり。蓋し彼等は自ら之れを得んとを欲してなるべし。彼等は又時としては余等の命令を用ゐずして前に走り、或は部下に對して打擊を加へたるものありしが、余等は目的の爲に暫らく之れを寛假し供け

三十一日に於て、余等は始めて矮人の部落を横切り、又幾多彼等の廃跡を縦過せり。余等は五時二十五分間に九哩の行程を進み、林間に於ける矮人の部落に宿營せり。

部下に、引續きて蚊帳を爲すものあり。十六歳の兒童なるヒヲ、は余の鰻包袋を携つてイポトに逃げ歸り、又余の手掴を運び來りたる一人は七十五個のウルンチエスター鰻包を以て何れ〳〵か逃亡せり。」

翌日余等はマンブンジ、則ちヤバセの村に向つて、廣大なる開地に進み入れり。

マンエエマ酋長の頭領なるカレスは、三十一日にイポトを出て、七人の部下と共に茲に到着せり、則ち余の義兄弟なるイスメーリの命に由て來りしものなり。

此邊の行路は一体に從來の道に比して幾分か平易に、從つて余等が進行の割合も增加せり。河岸に沿ふて絶へず、林藪を伐り開くの時に當ては、七時間乃至十時間を費して僅かに三哩より七哩の間を通過するに過ぎざりし。余等は今多少の妨害―枝に由て、莖に由て、蔓の爲に、藪藪の爲に、或は河わり、谷ありて其歩を止むるものあるにも拘はらず、一時間に一哩半乃至二哩を進むことを得るに至れり。

日々夕刻に至れば猛起り、雨降りて、雷鳴之に加はり、非常の憐愍を量するに至るも、率に日中は太陽の輝燭たるを見ること多く、夜來の雨に非枝葉を潤ひたる巨木は新たに日光に映じて暮色を量し、日

光は生ひ茂りたる林間に、彼處處此の寸隙を求めて幾多の光線を投射するの樹最と面白し。幾多空中の住客も之れか爲に一層の氣力を敢行し、飛び走り飛び來りて、故らに余等に對して其自然の音樂を聽かしめんと欲するもの〳〵如く、又此林間の主人なる猿猴其他の小獸も、時々に其顔を見はして、平素にも似ず、今日は外人の通行に向つて敢て歓迎を爲さゝるに似たり。

マンブンジより東方への道は、例の開地に木材を横へたるもの甚だ多く、余等は實際、今に至て之を記述するの面白さに飽なり、之れか爲に非常の困難を喫せり。

十一月四日に於て、余等はマンブンジの部落を去ると十三哩四分の三の距離なるウンダンビンヤに在り、此間矮人種の廃跡なる五箇の村落を通過せり。此日余は彼のウレンダの語りしと共を思ひ出し、余等の境遇の迫々愉快の日を見るに至るべきことを喜べり。隊中の各人は一日分の糧食として、一個の唐黍十五個の芭蕉の實、一個の唐黍は、二個の唐黍或は草根木實の一掬に比して實に貴人の糧食なり。併し個は以て、未だ十分に彼等の心を喜悦せしむるには足らず、勿論彼等は何れも輕快の精神を有するものなりしも。

「見童等よ誠實なれ、安意なれ、闇黑の夜は將に明けなんとす、一週日を經ば、余等は恐らく又過度の

烟勢を望みざるに至るべし」と、余は彼等に食物を分ちながら告げたり。

彼等は之に對して取て答をなさず、唯一樹の葉は彼等の飢餓にやつれたる顏を通じて洩れり。余等の皮膚は何れも皆比較的に金殿玉樓の中に人となりしものなれども、其困難を通じて遂も朋輩の色を示さいりしは、彼のレーザーがアントサーを稱賛せしの言辭を以てして尙は足らず。彼等は草根木實、森の豆、澤の菌を食すると恰も盛宴に侍するに過ならず。尙は又彼等の一人は此くの如きの權利—亞弗利加林間、飢餓の仲間に入らんが爲に、自ら一千磅の義捐を爲せしなり。彼等は實に部下の黑人に對して無二の模範と爲りしものなり、黑人等は何れも皆、言ふべからざる困難の境に在つて、唯吏員等の顏を視、其壯快なる心思の激流をも感するの勢ありしが爲に、僅かに能く共に其窟を離ぐることを得しなり。

翌日余等は、イチユリ河とイヒユル河の間なる沼澤を渉り、左方則ちイヒユル河の方に流るゝ淺瀨の中を越へたり。此間岡陵は左右に突起せり。余等は九哩と四分の三を過みて、六百尺の高さなる一丘の下に位せる、インデクラの村に止れり。是れより過むと少許の所に一村あり、山の半腹に在つて東部インデクラと稱す、精製晴雨計に由て檢するに、此所は海面を拔くこと恰も四千零九十七尺なり。此村に於て余等は始めて周圍の形勢を瞰むることを得たり。余等は是れ迄、殆ど十數次の森林の下を徜徊

して、日光は僅かに枝葉を通じて之を仰ぐのみ、余等自ら此身の細小にして其地位の不安全を感ぜしが、今は漸く高きに上り之れを下瞰するの榮位を占め、一間爲に天地の廣きを覺えたり。見渡す所、鬱く曾森林のみ、茂には世界は恰も枝葉を以て蔽はるゝものゝ如くなり、迄も其間に間地あるを見ず。綠色は綠色に接して愈よ遠きに從つて愈よ極まらず、斯くの如きもの決して晩編の遠する所に於て止るにあらず。彼處此處に少しく其色を變へ、或は樺色を呈するあり、或は赤色を呈するあり、稍に淡白色を示すありて而して其間に又濃厚稍濃の別を爲す。蓋と爲り、靜かなる空中に此間を翱翔するを得ば、如何に樂しきとならん。嗚呼余等は實に鳥の羽を假りて此境遇を脫却せんとを欲す、マンユエマ人に對する紛擾は殆ど余等を腦殺せり。何れも皆此窓地擺しき牆壁者の手を離れ去らんとを欲めり。

七日に於て、余等一同滯在の事に決せしに、マンユエマ人は村落を專有して余等の部下を林藪の中に委せり。時にザルサーバル人、「第三時」と綽名するセート、ダトーとマンユエマの四個カミスとの間に一紛擾を起し、カミスは突然彼れの顏を打てり。兩人とも丈け高き男なるが、中にもセート、ダトーは他よりも二寸許高かりし。彼れは皆てマダガスカルの戰爭に武勇を振ひ、又外科醫としてソルダン、ベルガレの下に仕へたるものなるが、日々第三時に酒に醉ふの習慣ありし故、「第三時」と綽名さ

れ、遂に之れが爲に発熱を蒙るに至りしなり。彼れは愉快なる人物にて、賦意に、頑健に、又能く進順にして而も好個の瓦銃手なり。ヰートー、ダトーに、此際若し二十五磅の糧食を與ふるものあらば、彼れは笑ひながらに、カミスを捕へて容易に其骨を挽くに足るべかりしなり。余は側に在つてヰート、ダートの爲す所を守り居りしが、實際彼れは彼れの同僚と同じく、飢餓の爲に非常に衰弱し居れり。彼れは暫ばし、カミスの顔を視つめ居りしが、靜に指を擧げてカミスに告げて曰く「好し〳〵、此度は是れにて好し、併し我が腹の少しく満ちし時に、再び之れを爲さんとを望む。打てば打て、我は暫らく之を忍ぶべし」と。

此時余は靜に進み出でゝ、手をカミスの肩に置き、「カミスよ、再び斯くの如きを爲す勿れ、余は余の吏員に對しても打擊を爲すことを許さゞるなり」と告げたり。

自他の悪感情は增加せり、ザンザーバル人の心も爲に惱乱せり。斯くてマンユマ人の暴戾なる擧動は余等が一行の興奮剤と爲れり。余等は勉めて此間に調停を與ふる所あり、彼等に向つて忍耐の中に其氣力を養ふの道を敎へたり。

余等の爲には率にも、カミスは「西部インダクルは是れ頗イスメーリの領土の極端なると」を告げたり。併し余等はイブウィリに達する迄は彼れと分るゝと能はざりし。

十一月八日、一行は幾分か疎開なる森林を通じて十一哩を進み、而して遙かに内部の方をも見渡すことを得るに至れり。此間、道は平易にして余等は一時間に二哩の平均を以て進めり。

十一月九日に於て、九哩半を進みしの後、余等は矮人の會營に達せり。正午頃迄は霧雨て深かりし。午後に至て余等は幾個の小流を渉り、又幾個矮人の廢村を經過せり。カミス并に彼れの從者は六人のザンザーバル人と共に先きにイブウィリの村に赴きしが、余等は翌日を以て之に達せり。是れ則ち余等がヤンブヤを離れて以來第一の殷賑なる土地なり。直徑三哩に渉つて廣大なる間地あり、玆にはマンユマ人も未だ其の疎墾の手を及ぼさゞりしなり。殆ど皆凡ての西瓜の株は五十乃至一百四十の實を結び、其中の或るものは二尺二寸の長さありて、五分の直徑を有し周圍は八寸に滿つ、以て彼のヰート、ダトーに十分の食物を供給するに足るべきなり。余等此村に近づくに當り、已に十分生熟した る果實は其香を放つて余等の鼻を打ち、彼處此處に、枝も折れん程に生り下りたる果實は、部下のザンザーバル人をして絶へず「アレ、〳〵」の聲を擧げしめたり。

村に到着する前に、部下の頭領ムクボは余の耳に口して、イブウィリの境内に五箇の村落ありて、各戸何れも其小屋の四分の一許は穀物を以て滿たせりと告げたり。然るにカミス并にマンユマ人等は獄見の權利を名として、已に十分の糧食を已れ等の小屋に運べり。

村落に入るに際し、カミスは例の如く、ザンザーバル人の警護を爲せり。余は此の地の狀況を察してムラボの告げし所に過はざるを知り、私かに喜び居りしに、カミスは余に對して、此村を東西に分割し、西半は遠征隊の爲に供し、東半は彼れが十五の部下を以て占有すべきを申出でたり。勿論余は之れを拒めり、此村は已にマンユエマ廻個イスメーリの個土に非らざるを以て、彼れに占有を爲すの權利なき事を告げ、是れよりは一切余の許容を得るに非れば一物をも自由に爲すべからざることを論し、併せて彼れが是れ迄、部下のザンザーバル人に對して侮辱に侮辱を加へしことを責めしに、彼れは今敢て返す語もなく、默して此旨に從へり。

一同此村に到着するや、第一に人衆、荷物の配當を爲し、各人に向て五十個宛の唐黍を與へ、又土民に對して余等の逗留に關し交渉を開けり。

一時間を出でずして事調へり。イブウィリ間の西部一半は土人の爲に供するとを定めたり。カミス并にマンユエマ人等もこれに從ふことを諾す。余はバンッヨ一個の酋長なるボルヨーに向つて真鍮片の一把を贈りしに、彼れは報酬として五羽の鶏并に一頭の山羊を送れり。

余等は今樹蔭に在り。八月三十一日以降、遠征隊の一行は何れも十分の食物を喫せしことなかりしが、今は芭蕉の實、芋類、菜類、豆、甘藷、唐黍、瓜等到る所に充積して、假令彼等は衆の如きの大食を爲すとも、到底十日以内には喫ひ盡す能はざるの豫富を致せり。彼等は能く長日飢餓の苦を忍ぶべきなり。

余等はレエクンン并に部下六十のザンザーバル人—ナルンンの狀況に赴きしもの、水尖并にイボトよりの病氣全快者等の來着を豫期せしかば、成るべく速に彼等をして此有樂を見せしめんものと思へり。

余等は茲に於て十分の休養を爲すを得べし。當時彼等の容貌は實に擬れむに堪へたり。彼等は多く裸體なり、何となればウガルーツの屯營に在る時、又イボトに在る時、彼等は衣服を賣つて漸く其口を糊せしを以てなり。肉は彼等の身體を離れたり、彼等は過去七十三日間の飢餓并に十三日間の斷食を以て、全く骨のみと爲れり。彼等は之れが爲に殆ど其力を失へり、光澤ある銅色の肌膚も淡黑なる灰色と化せり。眼玉のみを有するが如き彼等の眼は病氣の徵候を示して朦朧たらしめ、全體に人間らしきの活氣は盡く去れり。幾多の重き荷を負ふて高地の遠征を爲すものといふよりは寧ろ燒場の骨を餓ひしに過ぎざりき。

嚮導者カミスは、酋長ボルヨーより過きし事なりとて、イブウィリより數日程の旅行を以て一大草原に達するとを得るを以て余等の爲に之れが發見を爲すべしと言へり。個は唯彼れの口實にして實は彼

れは、ボルヨーの部下と余が三十の銃手を以てして何か自己に利益ある事物を見出さんとを欲せしものならん。彼れは余の之を疑はんとを恐れて自らボルヨーを遣れ來り、余の面前に於て說明を爲さしめ、敵を去る少許なるマンダと稱する所より二日程則ち四十哩前後の所に於て開きたる草原を見、其土には幾多無數の獸畜ありてイチュリ河の水を飲み乾す程なりと言へり。余は此時に唯一筋に草野の邊に出でんとを願み、又酋長ボルヨーも爲に懇切を盡を供給すべしとの事なりければ、則ち此儲を終れ、部下より之に從ふべき護身隊を募りしに、彼等は非常に此地に滯在を欲するの理由あるにも拘はらず、忽ちにして一隊二十八人之に應ずるに至り、間もなくカミスは出發の途に上れり。

イブウィリ土人の所有物に對しては決して掠奪を行ふべからざるとを嚴重に傳へしにも拘はらず、部下の一隊は彼の地に赴きて十九羽の鶏を奪ひ來れり。此内二羽は已に彼等の食する所と爲り、此羽毛を如何にすべきやと相談する所を、視察員の聞知する所と爲り、殺り十七羽は取り押へたり。彼等に聞りて又二人のものは一匹の山羊を竊み來り、頭を除くの外は已に盡く之れを食し去れり。是等の事、以てザンガーバル人の胃の腑の量を知るに足るべし。

イブウィリの土人は至て順良なりし、余は彼等に對して無の海に思へり。酋長ボルヨー幷に其家族は余等と共に在つて、日に五六回も「ボヤ、〳〵、ウレンダ〳〵」の世辭を換はし、余等を遇するに懇切

を極めたり。併し同時に、余は部下の者共が是れ迄遭難し來りたるの抱遇を顧み、又敢て之を所罰するの勇氣を生ぜざりし。彼等が九月、十月、十一月の三月に渉り、困頓危急の際に、能く誠意に余等に奉仕し、彼等が取り得たる最良の果實を以て、余等に供せしとを考へ、彼等が今多少の報酬を得すを見て、余は土人に對し、斯くてはならぬと思ひしも、遂に眼を閉ぢて之れを寛假するに至れり。

十一月十三日、余は自ら倉儲内の狀態を視察せしに、彼等は絶へず食車を爲すに怠はしきもの〻如くなりし。何れも皆、或は唐黍を臼つくものあり、或は芭蕉の實を粉にするものあり、而して此間彼等は必ず一口を口にして以て之れを嚙むとを忘たらず。彼等は三箇月の飢餓を一時に復讐せんとを勉むるものなるに似たり。

カミスは草原を發見するの目的を遂すると倘はず、十四日に唯十四匹の山羊を得て歸れり。思ひし如く彼れは始めより草原を探るの目的を有せしには非らず、一隊を率ゐて掠奪を爲し、以て此イブウィリをして土人の襲擊する所と爲り己れが部下の剛强なるもの三人を失へり。斯くてカミスは村に歸りて三人の股肱を失ひしとを嘆ぜし折柄、忽ち酋長ボルヨーに出逢ひ、彼れは一首の辨解をも爲さず、直に酋長を捕にし、復讐の爲なりとて、余に面會するとをも爲さず、之を殺戮せんと企てたり。余は此事を聞

き、人を殺せて力を以て彼れの手より酋長を奪ひ返へし、以てカミスをして其目的を遂するを得ざらしめたり。

十六日に於て、サエアソン氏はサルソン扶助の任を全ふして歸り、部下の一隊と共に此所に到つて等しく愉快の天地を分つに至れり。

翌日カミス并に一隊のマンエマ人は俘虜をも爲さずして歸途に就けり。依て余は特に使を送りて、カミスの象牙并に彼に贈るべき一箱の綿物等を持せしめ、他に一通の書翰をイボトに於ける吏員に宛て以てインブカルに到り、其れより率便を掛てイボトに輸送せしめたり。余は實にマンエマ人に對しては心を苦しめたり。余は忍び難きの情を忍びて、彼等を懇切に取扱ひしにも拘はらず、彼等は意よ無體の行爲を爲し、以て余をして彼等の罪狀を數へたり。余は此夜彼等の贓物を輸送せざるを得ざるの勞を取らしめたり。

第一　彼等はレンダ河よりイブウイリに達する迄の村落を殘らず荒廢せしめて、余等の部下六十七人を餓死せしめたり。

第二　彼等はイボトに於ける二十七人の人をして殆ど回復する能はざるの疾病を讀さしめたり。

第三　彼等はザンゾーバル人マフカ、マゼンガを槍にて刺殺せり。

第四　同じく一人を打擲して死に至らしめたり。

第五　ザンゾーバル人アミに二百の粮穀を加へり。

第六　大尉サルソン并にドクター、パークを飢餓に迫らしめたり。

第七　彼等二箱を奪はんとを敢行したり。

第八　劫みたるリミントン流儀銃三十挺を引受けたり。

第九　種々の方法を以てザンゾーバル人を虐待せり。

第十　サルボコを脅して彼等の奴隷と爲し終れり。

第十一　サルソン并にパークに對して種々の侮辱を與へたり。

第十二　四萬四千立方哩の土地を全く荒廢に屬せしめたり。

第十三　土人數千人を虐殺し去れり。

第十四　數百の婦女并に兒童を奴隷に爲し終れり。

第十五　一千八百八十七年五月より八月の間に、二百個の象牙を奪めり。

十七日の午後に至り、余等は再びマンエマ人の所爲より惹き起したる災難に遭遇せり。余イブウイリ并に近物の土民等は皆立つて余等に抗せり。部下の一人レンバなるもの水を汲まんが爲に河に望り

しに、忽ち其胸に向つて矢を受けたり。彼れは漸く逃れ來つて余等に其携標を問ひ、而して其到底回復の見込なきを知るに及んでや、小屋に歸りて己れの施條銃を取り、以て自殺し終れり。

此朝に於て早く、スケーアス中尉は三十六の銃手を率ゐ、餘長ボルヨーを嚮導として前途の地形を視察せんが爲に出發せり。

十九日に、アドゲエンス號の船頭ウンダは彼れの水夫を率ゐて到着し、途上十五の病氣全快者に遭へりと言へり。彼等は此夜曾倉營に到着せり。

二十一日に至り、スケーアス中尉はボルヨーと共に彼れが視察の旅より歸り、眞原を發見するの目的を遂する能はざりしかども、是れより東方への道は至て平易にして、通行に格別の困難を感ぜざるべきことを傳へたり。是れ余等の大に勝かんと欲する所のものなりしなり。

二十三日、余等は將に明日を以て此地を出發せんとを期し、人員の點檢并に遠征隊の再組織を爲せり。

第一隊	サエアメン	部下八十人
第二隊	スケーアス	部下七十六人
ソーダン人		五人
料理人		三人
使僕		六人
白人		四人
マンユエマ人		一人
合計		一百七十五人

此他に、イボトに滯在するものは大尉チルソン并にドクター、パークを加へて都合二十八人、又余等が休憩の爲にウガロークの屯營に止めしものは五十六人、チルソンの倉營よりしてウマリの率ゐたるもの恐らく十人は歸り來るなるべし。故に前隊がヤンブヤを出發せし時、三百八十九人ありしもの今は二百六十八人を存し、一百三十九日の旅行間に一百十一人を失ひし都合なり。併し後に至て聽く所に由れば、ウガロージの屯營に留めしものは多くは死去し、イボトに於ける病人の狀態も危殆なりとの事なれば、實際は尚ほ是れよりも減少し居りしなり。

余等のイブウィリに到着せしより以來、部下の多數は殆ど一日に一砂兒の割合を以て物故を加へたり。或る者は以前に比して肥大の體と爲れり。彼等の眼は光澤を生じ、彼等の皮膚は油氣を生せり。而して過去三日間は彼等は或は歌を歌ふものあり、或は穀物を精製しながら之れが調子を取るものあり、

又晩餐の終るに至れば一同野外に出で、月に對して吟咏するものあるに至れり。彼等の氣力は遽に回復せり、且に其腕力を試みんとを欲して或は拳闘を爲すものあり、或は相撲を取るものあり、余輩は次第に活潑の計略を加へて愉快の笑聲を交ゆるに及べり。殆ど已に滅却を告げたる彼等の希望も再び旭日東天の勢を以て其の心を照らすを得たり。

休憩は十分なり、彼等は何れも進行を望めり。尤も此中二十人許の人は尚は一二週の滯在を要するものありしも、是等も已に著しく回復の効を見はせしを以て、荷物だに運ばざれば旅行に堪支なかるべしと思へり。

十一月二十四日、好天氣なり。ソーダン人の喇叭隊は勢よく喇叭を吹き、人々は奮勇めり、取て返開の命令を待たずして荷を分ち荷を負ひ、各自の顔は希望を以て活々たり。余等は困難を喫せし後の最喜悦を以て此村を進み出でたり、彼等は實に九死の外に一生を得しもの、マンユエマ人の係累は脱却せり、前途は遠からずして廣大なる草原に出づるを得べくして、其先きには一大湖あり、湖邊にはエミン、パシャが感恩の涙を揮つて余等を歓迎すべきなり。

二十六日に至り、余等は西部インゲンドルの村に達せり、此村は數日前スターアス中尉が斥候を爲せし時、到着して一泊を爲せし所なるが、彼れの歸るを待つて土人等は直に全村を燒却し去れり。彼等

が狡猾なる心は旅人一泊の跡を見て其神聖を穢されしものと爲し之を歓迎する能はざることと見えたり。

廿八日余等は東部インゲンドルに止り、三隊の視察隊を派して正當の路を發見せしめんとを欲せり。サエフソンの隊は南方、南東方に向ひ、遂に又南方に至りしが、正午に於て歸り來り、此路は採用すべからざることを告げたり。クンリッドの隊は東方、北東方に向ひ、二個の村を通じて又北方に出で、土人の倉營に向つて小接戦を爲せり、土人は逃れたり、彼れは茲に九箇の山羊を得しが、内五頭を以て倉營に歸り來り、此路も又用ゆべからざることを告げたり。

率にも第三の視察隊は直に東方に向ふの一路を發見し來りければ余等は一同之れに從ふべきことに決せり。

廿九日に於て、余等はインゲンドルを出で、正午にインゲベスに達し、午後には北方の道を横切りてバブルの部落に達し、斯くて五時間に十哩の道を通過するを得たり。

翌朝一時半程を進行の後、余等は二百四十ヱークルスの廣さある間地の邊に出で、一婦人の懸塚を得て例の幾多耳木の横はる上を通過し、數個の村落を渡つて次第に坂路の上に向へり。須臾にして先塚の一人馳せ來りて余に向ひ、日出の力を指さして之を示すにぞ、余高きに上りて之を眺むに、果して

〳〵余等の希望に希望を重ねたる草原、満目の下に見はれ、山も岡も岸も谷も、唯爲に迷ふばかりの緑草を以て蔽へり。顧みて後を眺めば限りなきの森林は北東の方に向つて馳せたり。是れ則ち余等は明闇両界の境に逸せしなり。故に余等は今余等が立ち居る所を距る二哩許の此森林と平原との間に突出せる山を呼んで「マオント、ビスガ」と名付たり。蓋し余等一百五十六日間、幽暗なる森林を通じ来りしの後、始めてイクエトリアの平原を認むるに至りしの故を以てなり。

一行は何れも皆急ぎ坂路を辿り上りて、息もつき敢へず、互に問答を爲して曰く「ドン〳〵眞實か〳〵。又虚言じやないか。確かに森はもうこれ限りかね」と而して各〻其顔面の風色を目にするに當りてや、彼等は暫ばし非荷物を地に委して以て喜悦の涙を拭へり。

「ハい〳〵眞實だ、確だ、神の恵は弗かなり、我々は遠からずして牢獄を出づるを得べし」と。彼等は各其の手を遠し延べて遥かに草原の方を指し、又時期なる天空を眺んで感謝の伏拜を爲し、須臾にして又忘然自失する所あるが如くなりし。南東より南方に當て、湖面を抜くこと六千尺乃至七千尺の高さある山脈を遶ねたり。土人の婦人は余等が大なる湖水に達するの道は南方の方なりと言ひしが、余等は實際湖畔のカパリと平均線なる南緯一度二十二分に在るを以て、直に東方に向はんとを欲せり。イナウイリの酋長ボルローは彼の手を以て半圓形を畫き、イチュリ河の路は南東より北西に沙れりと

告げ、又此河は一大高嶺の下なる平原より流れ出づるものなりと言へり。併しビスガ山の南東に當ては唯一帶の森林あるのみにして平原あるに非らず、余等若し此方面に向へば森より出でゝ又森に入らざるを得ず。故に余等今茲に多少の迂廻を爲すとも寧ろ平原の方に出でざるべからず、是れ余が敢て彼等の説に從はざる所以なり。

十二月一日、余等は坂路を下りて、直に東方の路に向へり。暫らくにして余等は又一の坂路を上り、又復た下りて漸くに平地に出でたり。午前十一時十五分に至て一同はイニシの村に到着せしに、土人は已に何れへか逃げ去れり。彼等が新來の人を探知するの速かなるは實に驚くに堪へたるものあり。

十二月二日、余等余餘を出づるや忽ちに道を失して再び森林の間に徘徊せり。部下のもの一人自ら草原の在る所を探知せりと稱し、余等の嚮導を爲せしが、如何にしけん一同を道なきの邊に引き入れて、彼れ自らも又道を失ひ、殆ど三時間の困難を經て後漸に一村落の在る所に出でたり。屋根は富士形にして何れも草を以て之れを葺けり。是れ好個の發見なり一同は歩を來げて憩せり、一人は跳つて屋根に上ぼり、暫ばし夢中に草に向つて接吻を爲せり。已に富士形の屋根を葺くに草を以てするを見れば、草地の近きに在るや必せり。余等は暫假の爲に茲に止りしに、此間一隊の壯夫擬身して探險を爲し、須臾にして一掬の生草を携へ來る。一同は又喝采せり、恰もノアの洪水に、鳩が橄欖の枝を持ち來り

しが如きの音を爲せり。併し彼等の到りし所には招揮ありと聞きければ、余等は之を避けんが爲に南方、南東方に進み、一時間半を經て、同じく富士形草屋の併例せるインヂアンユクの村に至て、始に會營せり。

屋根を修復するの必要ありしかば一人をして屋上に上らしめしに、彼れは頂に立つて眺し四方を見廻し、忽ちにして叫んで曰く「ヤ、煙が見える〳〵、直ぐ近所だ〳〵」其聲は全村に響き渡れり。

一人は之れを聽いて嘲笑して曰く「そうか〳〵、湖水も見えるだらふ、蒸汽船も、而してエミル、パンシヤも」。

其中に他の三人は恰も山猫の獲物に飛び付くが如きの勢を以て屋上に馳せ上り、煙を等ふして叫んで曰く「眞實よ確に、平原は投矢の距離に在り、我等は漸く闇夜の中より脱却するとを得たり」と。

部下の一人水を掛んが爲に流れに赴きしに、小蹄に一老婦見はれ出てければ、忽ち弾りて之を捕へ、以て會營に連れ來れり。余は彼の女に種々笑顔を盡し、長き烟管に烟草をつめて與へ杯としながら、「此土地の名はインヂアンユクにして住民をペワンヤレユクと呼び、村人はイチユッと言へば、數日以前迄は廣大なる河なりしも、今は唯ぐものなると」を聽けり。イチユッ、イチユッと言へば、數日以前迄は廣大なる河なりしも、今は唯一條の細流と爲れり。彼の女は又、是より數日程の北部に當てパンヂンヂと名くる部落あり、其東に

は又ブカンヂと稱する住民ありて何れも共に戰爭を好み、且つ許多の家畜を所有し居ることを告げたり。

此以前に生擒したる一婦人は頗る異樣の風俗を好み、其上唇の中央に銅子の類を穿せ以て裝飾と爲し居りしが、此頃人衆に對して意地惡るく衝突を爲すに至れり。然るに彼の女は一人のヂンヂーバル人に見惚れしものと見え、頻りに彼れを追ひ回はせしが、彼れは爲に氣味惡ろしとて彼の女の側にたも來ることを爲さゞりし。

此インヂアンユクの村は凡て森林と平原との間に小屋を連ねたる所なるが、地は至て悲慘にして其產物又種々あり。戶毎に何れも皆二十磅乃至五十磅の重量ある最良なる烟草を供へければ、部下の人々等は久し振にて浮世の贅澤品を用ゆるとを得、五に五磅乃至十磅を所有せり。インヂィッにては烟草を呼んで「クード」と爲し、此地に於ては「ダイ」と言へり。其乾かし方の方法を得ざるより大に香氣を減殺し居れども、而も尙ほ擬眞の烟草たるとを失はず、又多量を喫するとも神經に影響を及ぼす等の非なかりし。此邊一帶は多く此烟草を繁殖せしむ、蓋し之を平原の蠻人等に向つて肉類と交易せんが爲なり。

此他に、此地に產する「カスター」油は殊に優等なるものにて余等は之を求めて旅傳銃等に加へしが、

人衆は之を見て大に喜び、何れも此油を身体四支に塗抹せり。彼等は曰く「此油だにあれば一層の好男子と爲るとを得べし」と。

四人の斥候者未だ歸り來らざるとを知りしかば、余はクレッドを彼等を見出し來りしが、彼の四人はウニャ、ウルリを始めとして爲さしめたり。翌朝に至てクレッドは彼等を見出し來りしが、彼の四人はウニャ、ウルリを始めとして隊伍を爲せしものと見え、二十五の肥大なる山羊を獲て歸れり。ウニャは屢々余等の許可を受けずして斯くの如きのことを爲すを以て、余は之を懲罰せんとを欲せしが、彼れが只管に平身低頭して其罪を謝するを見るに及び、且つ彼等が肉類を得んとには生命をも惜まざるの情を察し、余は唯深く將來を戒めて止みたり。

余等は此日に於て不注意なる出發を爲せり。余等は村を出でゝ僅かに數百ヤードを進むや、例のイチュッ河に會して進むと雖ども、河幅は四十ヤードに過ぎざれども水勢は強くして一時間に二哩半程の速力を以て流る。イボトとイブウィリの間に於ては此河幅は四百ヤード程なりしが、僅かの距離に於て斯く狹まりしは實に意外の事なり。止むを得ず余等は再びインゲンユクに歸つて尚は一日滯在の事に決し、スターケス中尉并にウェクソン氏をして一隊の斥候を率ひ、彼の道に沿ふて以てイチュッ河の渉るべき場所を視察せしめたり。

午後四時に至て兩人共歸り來り、是れより一哩半許の上流に於て渉るべき淺瀬あるとを報告し、又彼等は足自ら草原を踏みたりとて、非常の一掬を持ち來たしたり。同時にウレヂ并に其一隊は尚は一層インゲンユクに近き所に於て、腰丈けの深さにて渉るべき所あるとを報じたり。

此夜インゲンユクの會營に於ける彼等の喜悅は決して世の王公貴人等の喫する能はざる所のものなりし。明朝を以て彼等は此森林に告別を爲さんとするなり。彼等が數月の間滿明の界を通じて身体の疲勞を啻げ、久しく飢餓に迫つて幾度か死に瀕せしの時、彼等の希望を驚ぎしものは唯此草原なりしなり。而して今や此草原は確かに投石の距離に於て見はれたり。彼等の鍋釜は制限なき許多の肉類を以て滿たせり。或は燒き或は煮たる雜肉あり、羊肉あり、穀物、芭蕉實唯是れ彼等の擇ぶ所のまゝ、十人乃至二十人の疾病者を除くの外は何れも皆悉極つて又爲に涙を落さんばかり、萬金の希望を懷いてザンザーバルを出發せし時にも增して、非に活潑勇壯の氣力を發揚せり。

十二月四日に於て、余等は一同インゲンユクの村を出立し、以て規定め置きたる渡渉の所に來りしに、水は腰に達するに過ぎずして其幅は五十ヤード許なり。風雨針に山て之を檢するに、此所は海面より三千零五十尺の高さに在つて、ヤンゲヤの上際所よりも一千八百五十尺高く、又スタンレー、プールに於けるコンゴーよりも二千尺の高所に當れり。

余等一同此河を渉りしの後、ロエフメン氏を先導として廣き桑の路を進むと凡そ六百ヤード許見よ、忽にして廣濶なる平原に出でたり。絲草は一面に此上を蔽ふて其能は英國の庭園にも劣らず、日光は高く輝きて恰も夜の明けたるが如く、新鮮の空氣は余等をして思はず此呼吸を大且つ長からしめたり。余の感情を以て他の感情を推すに、余等は遂に十年二十年の歳月を若返へりしが如く、此柔かき若草の上に余等の足を容るゝや、喜極つて身為に慄へり。余等は著しく常に異りたるの足並を以て前方に進み出て、果ては何れも其感情を制する能はずして全隊聲を擧げて叫れり。各人の心は少年喜悦の情を以て滿たせり。頭を擧げて空天を望むに、余等は未だ此時よりも、廣く、高く、純粹にして風趣ある天地の間に立ちしことを見ず。余等は太陽に對して立てり、手を振つて其光輝を掬せり。枯草の燒却せしより一箇月程の間に崩へ山でたる若草は其芽を清風に弄して靡らけく、時に其頭を伏して余等が無事の來着を歓迎するに似たり。久しきに沙つて余等と相遇ひしの鳥類は、其が自由の羽を飛ばして靜かなる空中に舞ひ、幾多の鹿、麋は遥かの小高き草原に併列して、群衆の人物の出現を怪み、須臾にして個は危ふしとや悟りけん、其が鼻の鼻を鳴らして飛び出し、水牛は靜閑を破ぶるの聲に驚きて、遽かに其頭を擡げ、其如何横亘き角を振り立つて銃丸の遠せざる遠に向ふ。今や一百立方哩に沙る、見るも目出度廣原は余等の前に開けり—恰も一物なきが如し、余等の目は未だ其仔細と探る

金尊一同此河を渉りしの後、サエフメン氏を先驅として廣き氣の路を進むと凡そ六百ヤード許見よ、忽にして廣濶なる平原に出でたり。枯草は一面に此上を蔽ふて其艶は英國の庭園にも劣らず、日光は高く輝きて恰も夜の明けたるが如く、新鮮の空氣は金尊をして思はず此呼吸を大且つ長からしめたり。金の感情を以て他の感情を推すに、金尊は殘に十年二十年の歳月を若返へりしが如く、此氣かき若草の上に金尊の足を容るゝや、喜極つて身爲に慄へり。金尊は深しく常に渴りたるの足並を以て前方に進み出て、果ては何れも其感情を制する能はずして全隊を擧げて疾れり。各人の心は少年喜悦の情を以て滿たせり。頭を擧げて空天を望むに、金尊は未だ此時よりも、廣く、高く、純粹にして風趣ある天地の間に立ちしことを見ず。金尊は太陽に對して立てり、手を振つて其光輝を掬せり。枯草の燒却せしより一箇月程の間に崩へ出でたる若草は其芽を清風に弄して清らけく、時に其頭を伏して金尊が無事の來着を歡迎するに似たり。久しきに渉つて金尊と相遊ひしの鳥類は、其が自由の羽を飛ばして靜かなる空中に舞ひ、幾多の鹿、獐は遙かの小高き草原に併列して、超樣の人物の出現を怪み、須臾にして僞は危ふしとや悟りけん、其が態きの鼻を鳴らして飛び出し、水牛は靜閑を破ぶるの聲に驚きて、遽かに其頭を擡げ、北如何樣重き角を振り立つて鉄丸の進せざる邊に向ふ。今や一百立方哩に渉る、見るも目出度廣原は金尊の前に開けり—恰も一物なきが如し、金尊の目は未だ其仔細を探る

に眼わらず。滿目曾槙を延べて微風の青瀾を沙るが如く、彼處此處の數列の樹木は間地を埋めて風致を添へ、數十の小高き岡は一面に其麓を列ねて地形を裝ひ、是れより遠か離れて一山脈の起伏するあり、此先には則ち疑もなく彼のアルバルト、ナイアンザ湖の横るものわるなり。余等は走れり、走れり、息の殆ど絶ゆる迄奔れり—恐怖の鞭撻を蒙りしに非らず、喜悦の馬に跨りしなり。

時に余等は一丘の下に至り、茲に止りて再び滿面の風色を掬せり。蓋し全世界又斯くの如きの光景は是れなかるべし、余等をして數月の間其想望を尖る能はざらしめしものは則ち是れなり。余等は天國を期して天國に遠せしが如く、樂園を期して樂園に遠せり。之れが爲に幾多苦よりからざるの困難を凌ぎしを思はゝ、如何に此風景の貴きやを知るを得べし。各人の顔は四圍の境遇と共に一變せり、心の秘密なる喜を見はせり。人は皆此望の遠せしを以て世界の確實なるを知れり。疑惑痴愚の心は全く彼等の精神を去れり。余等は恰も久しきの歳月に沙つて暗黑牢獄の中に在りしものが、茲に其罪を解きて晴天白日の身と爲り、自由に、愉快に、天地の間に立つに至りしが如し。余等の眼は草の爲に、小川の爲に、小路の爲に、幾度か同一の丘陵を望み、幾度か同一の樹木に對して何は幾も飽く所を知らず、而して此の時、彼の時、顧みて何は余等が通過し來りたる地獄の森林に對すれば、余等は實に人情の限りなき興趣—苦の底より樂の頂に出でしものなるを知るべし。心は能く非常の速力

を以て、眼に觸れし所のものを了解し去れり、數年に沙り、又數年に沙つて忘るべきに非らず、十年、二十年、余等にして此世に生存するの限りは、天願くは余等をして又此時の喜悦と、此時、心に印したる風致とをして、又余等の記憶より脱却せしむるよ勿れ、嗚呼此愉快の胸、愉快の度数に能く筆紙の盡す所ならんや。

余は暫らく目を止めて、此地の形勢を觀察せしに、見渡す所河或は沼澤の道を廻るものなかりしかば、遠征隊を北方、北東方に導き、是れより四哩許の距離なる四丘の邊に出で、而して轉じて、南方に出て東方に沙れる小山脈の邊に出でんとを思へり。然る時に、余は高原を通じて、格川の障害に出遭ふとなく、東方目的の地に達するを得べしと想像せり。

余等は平原を抜くと三百尺許の高さある岩丘の邊に進し、茲にかすかなる隘徑あるを見出しければ、之れに沿ふて進みしに、須臾にして北東に走れる土人の街路に出でたり。余等は是れよりして格川の困難をも感ずるとなく、軟壌を陷んで高原に上り、殆ど其頂上に達せり。然るに正午頃に至り、一回又少しく丈け高き枯草を以て蔽ふの邊に出で、斧を打ち振つて之を開くに非れば進むと能はず、一回又少しく困難を爲せしの後、小流の岸に臨んで休息の爲に止れり。

午後に至り、余等は再び同一の草原を通じ、一時間半の急行を爲して後、南東より流れ來る二流の間

に於て余營せり。隊中の強健なるものは荷物を余營に投ずるや否や、直に近隣の村落に向つて集糧に出掛けたり。土人等は毫も斯くの如きを氣附かざるの間に、遽に彼等の入來るに會せしかば、取るものも取り敢へずに逃げ散じ、彼等をして自由に許多の糧食—雞類、甘薯、芭蕉實等を得せしめたり。彼等は又此地にて土人の用ゆる武器の類を持ち來りしが、中に長き弓あり、矢あり、長方形の盾等あり。此盾は強堅なる木の枝を縱横に組みて作り、其上にはゴム樣の濃液を塗りたるものにて、矢を以てするも、又槍を以てするも貫通すると能はず。此盾の外に、土人は水牛の皮を衣服に裁したるものを用ゐ、非強固なるピストルを以てして通過すると能はず。

余等が横切せし所のイヴュリ河の路は東方、南東方に向へり。余の考ふる所に據れば、此河の源は、北方より北西方に當り、凡そ二十五直哩の邊に在るべきを思ふ。

翌日余等は、高原の坂路を高きに向て進み、頂上に至て茲に全隊を規律的に構成せり。茲し余等は始めて此土地に來り、未だ平原人種の性質を詳にする能はず、又如何なる所に於て如何なる多數に對すべきやも知るべからざるを以てなり。

更に前方に進んで、余等は東を南に出りしが、忽ちにして道を失へり。併し余等は身、高丘の上に立ちしを以て、四方數十哩の間は明に余等の眼底に映じ、何れの道をも撰ぶを得るの便あり、固より森

間に於て道を失せしが如きの比に非らず。斯くて余等の所より北東に當て一村落あるを認めければ之に向つて歩を進めしに、途上丈け高き草、一丈五尺許もある蘆草の道を通るあり、時には蹟づきて此間に轉ずるものあり、稍々林藪の中を進むの思を爲せり。地上獅子丼に豹等の足跡を印し、諸所に蔦藪の繁茂せるものさへありて、中々に速に進むと能はず。漸くにして余等はムビッの凝獻に出でたり。須臾にして土人等は余等の侵入し來りしとを知りて一同村内より逃げさりしが、遠方の方よりして時に彼等の長矢を注ぐを見たり。我が斥候隊は急卒突進を爲して凡ての障害を撤去し、一人の年若き婦人丼に十二歳許の童子を捕へ、以て余等が質問の用に供せり。余等の中には此邊の言語に精するものなれなかりしかば、固より種々の長談を爲すに適せず、唯手似を爲しながら一二の名詞を交へ、漸くにして「此地をムビッと呼び、東方に進く所の街路はバブセッシの國に通ずるものにて、其先きには アブンクマの村あり」と言へり。バブセッシ。アブンクマ、余等は未だ曾て聽きしとなきの地、其心に感覺を惹起さゞるとは、恰も彼等土人に向つて、シェークスピヤ。ミルトン。英女王の名を告ぐるに異ならず、無學なるものには意味は生ぜざるなり。

「汝等はムムゾはルタ、ウンケェッの邪に就いて聽きしとありや」。

默して唯頭を振れり。

「ウンコロは如何」。

「ウンコロ、ウンコロは遙かに〈〈に遠方なり」とて東方を指せり。

「ウンコロの近傍に大なる水あるを聽きしや」。

「イチュリ河の邪かね、イチュリ河は—」。

「否北河でなく、北河よりも遙に大きく廣く—此平原の如き水を見しと又は聽きしとは非るか」。

余等が是等の質問を爲すに當り、彼等は單に名詞若しくは動詞を述へたらんには或は其意味を了解するを得しならんが、婦人も又兒童も種々の事を余等に告げんとを欲して種々分らざるとを述へしを以て、余等忍耐謹聽の後、遂に其意を了解すると能はざりし。併し彼等は少くとも余等の爲にバブセッシへの路を指導するに足るべきなり。

小屋驛道の法は余等が東方丼に中央亞弗利加に於て見しものと容ぼ同一なり。是れ野蠻人種の間に尤も多き建築法なり。富士形の草屋根は家の高さの三分の二を占め、既の高さは僅かに三分の一に過きず。此種の小屋多くは道蕪林の中に在つて彼是の間五六十ヤードを距てたり。一より二に通ずる路あり、然し其屈曲、異樣なるを以て不知案内の者は、案内者あるに非らざれは迷ひ易し。凡ての村落に添ふて更に物價小屋あり、穀物小屋あり、又集會所もありて其床は惡虫丼に濕氣を防ぐ爲に、地を尖

る一尺許の上に横へたり。

一行は茲に於て、芭蕉實の許多を得たり、土人は之れを以て「マルワ」と稱する酒類を製す。余等は此他に數個の山羊并に一ダースの雞を得、必要なきものは敢て土人を苦しむるの事に出てず。

路は平易なり、商人并に旅人は之を踏み堅め、之を平滑にせり。此路は南東を東に向つて導くものにて其間丘陵、溪谷等を渉る。正午に近く、余等はイチュッの池の側なる森の陰に出て休息を爲せり。イチュッの池に對しては余等は不可思議の思を爲せり。余等は前日を以て彼の所を渉りしなり、然るに今は其水、懸崖、絶壁の間に懸りて轟々たる悪河の勢を呈す、余等は其異なるを信ずる能はざる程なりし。何れに致せ、余等は此池を避けんとを欲し、故らに谷を回りて其歩を移すに至れり。

午後に至り、一時間半程の進行を爲し、來た河を尖ると雖ども遠からざるを感ぜしが、余等は已にバブッセの繁榮なる境域に達せり。芭蕉の林は廣大にして其樣はウガンダに似、而して此深き林の陰に幾多彼等住民の小屋を連ねたり。衆、初麻、甘藷等の畝又廣く其周圍に散在して、一見直に此地方に人衆多く、共に耕作を勉むるの狀を知るに足る。

芭蕉の林に入るに先つて、余等は隊伍の整頓を爲し、一層堅固の列を作つて進まんとを期せり。隊中屈指の壯夫を率げ、五十のウヰンチェスター銃を擔ふて前鋒を構成せしめ、又同數の人數を以てリヽ

ソトン銃を以て、後部に近くスナーアス中尉の下に屬せしめたり。斯くて余等は嚴め十分の警戒を加へしにも拘はらず、先鋒か此地を通じて安全に前方に進むを見るや、中堅は其堅をくづして途上の小屋に陷み入り、雞、山羊、芭蕉實、甘藷其他の諸物を掠めんとを始めしに、最前より此林の中に隱れ居りたる土民の群あり、遽に立つて彼等を襲へり。土人は敢て先鋒に敵せず、其列正くして掠奪を爲さいりしを以てなり。今は矢は四方より飛べり、一人は之れが爲に腕を横腹に對して縛はれ、他の一人は同じく肋骨を射貫かれたり。旅僧銃よりの丸は、彼等の胸を奪ふて須臾にして四方に解散せしむるに至れり。

極東の村落に至て余等は舍營せり。此には唯二個の大なる富士形の小屋あるのみにて、一行を舍營せしむるに足らざりければ、此周圍に急きて小屋を作り、以て一夜の間、雨露を凌ぐの用に供せり。

夕刻に至り、余は又一人の囚徒に向つて殆ど半時間の問答を爲し、何れの方位、幾許の距離にアルバルト湖の横はるやを知らんとを欲せり。部下の四個一人土書を以て余の通辯を爲し、ウンヨロに於けるものとウガンダに於けるものは何れが大なるナイアンザなりやとの問に對して、土人の兒童は始めて其意を了解せしが如き風情にて、ナイアンザか、ナイアンザは此方の方なりとて手を延べて東方を指さし、又其廣さを示さんが爲に、非乎を北東の方に廻はせり。彼れは又、幾度眠に就くとに出て

彼處に達すべきやとの問に對し、三本の指を擧げて三度なるとを示せり。

日は已に落れたり、忽ちにして銃傷の爲に叫喚するものあり、何事なりと周圍の樣子を察する內、西蕉蔭の方よりして矢は飛んで余等の頭上に向へり。

「火を消せ、〳〵、靜にせい。酋卒はどうしたのだ、何ぜ警をしないのと、余は言へり。

土人等は今私かに倉營に侵入し來りしなり。余等は恰も晩餐を食せし時にて、酋卒等も皆一夜の酋卒を爲すの前に於て一休息を爲し居りしなり。勿論斯くの如きとを知りたらんには酋卒をして食事の間たりとも其地位を去るが如きとを爲さしめざりしならんも、如何にせん此地方に始めての事とて十分の注意も屆かざりしなり。余等は須臾にしてサレヽなる一人股の邊、四寸許の深さに向つて矢を受け、又一本の矢は寵の前なる羊の燒肉を貫き、他に數本の矢は密蕉の樣を刺し徹せるを知れり。サレヽは少しく脚骸の爲に氣を奪はれしが、忽ちにして勢を込め、自ら彼の矢を拔き出して、已に口許の所に逸しければ、余は釘拔の類を取つて之を助けて引き出し、傷跡にはイユーカリプチンを加へ、之をして臥床せしめたり。

平時間許を經て酋卒は皆其地位に立てり。土人等は倉營の他の部分を襲ひしかども、銃砲の聲は彼等を脅却して紛擾の叫を擧げしめたり。余等は又遠方の距離に於て二發の銃聲を聽けり、是れ隊中の事

掠者、圖らず土人に出會ひしものなるべし。

余等の一行は凡ての點に於て未だ眞正の戰伍を爲すに適せず、其氣力も又十分ならざりし、是れ大に余等をして苦心せしめたり。之を除ずも益なく、之を奬ずも効なし、彼等は皆嚴階なる腰側の下に修練を加ふべきのみ。併し余等の肥腿は未だ熱林中の困頓を忘却せず、彼の如く互に情を分ちしの後、未だ幾許もなくして嚴重なる修練を加ふるとは實に爲すに忍びざる所、さりとて余等にして少しく寛容の味を嘗ふ時は彼等は愈よ放肆に沙り、掠奪の餌と爲りて土人の爲に其身を危ふするに至る、斯くて余の心配は又他の側に於て起り來れり。

夜を通じて强雨降り、翌朝八時頃迄余等は倉營を出づる能はず。余は此間を以て一二前途の事情を知らんとを欲し、彼の土人の婦人に向て問ふ所ありしが、如何にも言語の通ぜざるに苦せり。彼の女は種々余に之を了解せしめんとを勉めしの後、遂に地上に圖を畫きてイチュリ河の行路を指し示せり。

圖は亞弗利加の地理上に於て尤も奇妙の說明を與へたるものなり。彼の女は、此河は其源泉は高原の上に在りて、アルバルト湖と平均線を占め、其水は湖に入つて又湖より流れ出づるものなりと言へり。余は彼の女の言ふ所を奇とし、進行の間も側に伴ふて以て平野に出で、其れより又一丘の上に上りしに、彼の女は東方半哩許の下なる水流を指してイチュリ河なりと言へり。見る所、其水路は東より南

に向て流るゝなり。

余等は今疑惑の中に立てり。一行は二日前に、北緯一度二十四分の所に於て、イチユッ河を右岸より左岸に渉りしものなるに、今又恰も一度二十八分の所に立てり。然るにも拘はらずイチユッ河は東を南に由り、又南を東南に由て流れり、故に余等カバッに向はんとせば東南の方に進まざるべからざるに似たり。

余は最早や、余等が已にコンゴーより六百哩を上り來りたる河が、ナイアンザより流れ出づるとの婦人の既に開して考慮を費すことを止めたり。強いて之れが見解を下さんとすれば、イチユッ河に二横あり、一はコンゴーに流れ、一はナイルに入るものにして彼の女は或は此一を他と相誤りしものには非るか、さるにても彼の女は始めよりイチユッ河は唯一なりと言ひ居れり。

旅行を續けて、余等は一路をたどり渓谷の邊に下り行けり。余等は忽にして一流の側に出でしが、茲に至て漸く問題を解釋するとを得たり、是れ則ちイチユッ河の本流にして南西方に流るゝもの、余等は必竟見解を誤りしに非らず。

河に一艘の破れかゝりたる小舟あり、ヒート、タトーは頗る舟行に熟練なるものなりければ、彼れに二十弗の賞金を與へて一行を對岸に渡航せしめたり。河は一百二十五ヤードの廣さありて、二ノット

の速力を以て平均七尺の深さあり。余等がウビリの近物に於て聞きたる湍の言は則ち此河よりするものなりしなり。

河の左側に於けるアブンクマの土民は一哩許を距てたる丘上に集つて、恰も「好し〳〵、何れも此岸に來るべし、併し其上は逃げ所を失ふと勿れと」言ふが如きの樣子を以て、余等の渡航を爲すを護り居れり。アブンクマは自ら此平原の勇卒を以て誇り、遥かの丘上より槍を振つて余等を威嚇せんとし、又バブッヒ人は河の右方に於ける小高き山々の上に集り、幾度か自他の接觸を較せんとするの機を示したれども、彼等は唯遠方に居るのみ、余等が余等の近所は數寸の草を以て蔽ふに過ぎざりければ、彼等も潛伏の道なく其接觸を施すの所なきに苦めり。

足をイブウィッに容れしより以來余等は、豆弗利加に在るものとしては最上の生計を導けり。日々喰ふに肉あり、飲むに乳あり、雞類の少なからず、豆類、甘薯、甘藷「トメートス」、瓜、蓮蒸實其他の野菜類は勿論の事なり。人衆に對しては効驗著るし、彼等は精神に於て、又身体に於て尊てアラブ人の眼虐の下に屈伏し、氣息奄奄に絶えなんとして僅に一個の唐黍に、悔みを請ひしの時とは大に異り、今は他く獅子にも、象にも、當らんずるの氣力を發成したり。余等白人に對しても其神益する所は少なからず、唯併し、此上には一杯の酒を得たきものなりと思ひぬ。

堅初余等は又一時間程の間坂路を上りて高丘の上に達し、茲に又四方の形勢を自由に下瞰するを得たり。余等の取るべき方向は南東の方に在り、併し此方位に當つてマザンボニの嶺と稱する一山あるを見しを以て、余等は又丘を下り、清潔なる渓流の邊に出でたり。是に近く一村落あり、甘蔗、甘藷等の耕作地を有す。住民は何れも已に逃げ去つて小高き丘の上に在つて余等の一行を下瞰す。余等は取て掠奪を行ふとなく、遂に默斯塩の側を過ぎし時、彼等は叫んで曰く「それでこそ好し、〳〵」と。余等は又他の一流に沿ふて渓谷に入る。余等の左側に於ては奇岩怪石幾丈の高きに達し、其突出したる崖上には一ダース餘の人をして自由に居座せしむるに足る。斯くの如きもの數百ヤードの長きに沙り、或る場所に於ては余等は其頂上よりして投石の距離に沿ふて進行せり。勿論此頂上には土人等の相集るものあるなり、依て余等は數々示威的の運動を爲せしが、幸にして土人等は取て其弓矢を弄するに至らざりし。余等は引き續き其歩を進めしに、忽ちにして第三の「イチュリ」を横切りたる懸橋の邊に出でたり。稱して東部イチュリの懸橋と爲すべし。此河は三十ヤードの廣さありて其水の深きと、早きと、恰も飛瀑の如きものあり。蔓藤の類を以て粗く長く橋を架したるものなるを以て、一回に唯一人を渡すを得るに過ぎず、而して之を通過するには九十歩、一百二十秒を費し、全隊を渡し終りしの時は已に午後六時を經過したり。此渡行の場所は尤も危險の地位なりしを以て土人の襲撃あらんと

を圖り、豫め銃手をして之に供へしめたり。

此日午後に於て、一匹の肥大なる黑き牝牛、一匹の小牛を伴ふて岩角より見はれ出でけるに、「牛肉、牛肉君、久し振りで、十年振りで」との聲、彼處此處に起れり。アブンジャ人は彼等の家畜を丘陵の中に隱し置きたりしに、是等の牛は如何にかして其顏を余等の前に見はすに至りしものならんか。

東部イチュリの、蔕の如きの谷を離れ、入口に、余等は比較的平易なる坂路を上りて一丘の上に出で、茲よりして東部イチュリの屈曲せる水路を瞰み、其果して東方、南東方の方より流れ來ることを知れり。須臾にして余等は又一廣原の中に出でしが、此廣原は南方二十哩許の所に沙り、北方は丘陵渓谷等を以て境を爲せり。マザンボニの山脈は東方に對立し、其が北端の峰は則ち余等が今指して以て進まんとする所の目標なり。

午前九時三十分に到り、余等は彼の山脈に對して已に數哩の歩を進めたりしが、今此坂を下りて谷合の小川に到るに際し、是れより山脈の方に沙れる十數哩の地は、廣原には非らずして、盛く皆耕作地なることを知れり。依て思ふに此周圍の村落には非常の人口を有するものと見えたり。「一大戰爭は避くべからざるべし」と余は思へり。アブンジャの人民は此至大なる部屬と連合して以て余等に當らんが爲

に、彼等の村落を去りしものなるべし。余等はコンゴーに於けるパンカラを出發せし以來は未だ曾て斯くの如き大部落に遭着せしとあるなし。疑ふらくは起れ、イクエトリアの州介エミン、パシヤを此方位に於て繼ぐ所の強大なる部屬にはあらざるか、何すれぞ、部落の廣大にして且つ人衆の多きや。

余等は成るべく土人の抵抗を避けんとを欲して、隊中密りに掠奪を爲すとなからんとを戒め、南東の道を取りて少しく其行を迂回せり。余等は又彼等が隱伏するの場所を避けんが爲に、耕作地の中央を經過し、十一時三十分に至り、余等は此地の極東に進せしを以て、ナイアンザより流れ來る清冷なる水邊、一巨木の蔭に憩して一回茶飯の爲に休めり。

午後一時に再び出立して、余等は、廣大なる芭蕉林の中に進み入りしが、其耕作の整頓せる、其培養の適當なる文明人をして尙ほ一驚を喫せしむるに足る。此間諸所に富士形の大なる小屋あり、余等通過の際其内部を一見するに、多く煙を積みて製したる厚風の烟あるを見たり。各村落は何れも其道を清淨に掃き掃除して新來の客を迎へんが爲に供へしものかと疑はる。芭蕉の林は芭蕉の實を以て積み上ぐるばかり、馬鈴薯の畝は廣く、粟の畑は數百エークルスに沙つて彼方に馳せ、而して近來の新築に係る幾多の穀倉は今秋の收穫に向つて供ふるものなるべきとを知れり。

余等は遂に此穀物の畝を通過するとを得たり、途上敢て妨害を爲すものとてはなかりし。思ふに土人

等は余等を以て大軍を率み來りたるものと誤認し、斯くは曾其身を潛め去りしものには非るか、然らざれば余等が十分警戒の下に其隊伍を整へて進みしを以て、彼等が敢て乘ずるの機なかりしに由るものか。何れにせよ彼等が毫も抵抗を爲さゞりしは不思議の事共なり。余等は彼等が多く小高き丘上に在つて其勢を張るとを目擊せり。

山脈の方に對する、廣くして且つ能く踏み堅めたる道は、余等の一隊を導いて又遂に三哩許の直徑ある平原の中に向ひたり、平原は一面に綠草を以て蔽ひ、野花の芳を破りしものも少なからず、美觀なり。東部イチュリは余等の左側を去ること甚だ遠からずして、右方に當ては又遙かに一の繁盛なる部落あるとを知れり。

午後三時に至り、余等は彼の商船の旋に於て到着せり、其山上の商所に於ては幾多土民の小屋を立て連ねたるものあるを見る。土人の一群は彼處に在つて余等に對し、余等の近づくに從つて何れも等しく挑戰の聲を擧げたり。余等の觀察する所に據れば、丘陵の高さは平均八百尺許にて、坂路も亟て險峻なるを以て、余等と彼等との距離は略ぼ八百ヤード乃至一千ヤードならんと思へり。

余等は今山下に在り、此山を上りて敵人に當るとかと思ひしに、幸なる哉、路は山の腰を繞つて東方に馳せり、余等は今北緯一度二十五分三十秒の所に在り。余等が山を繞つて其麓を進むるに從ひ、殆

と二哩許の廣さある平野に出で、一面麻線を繁殖して實は將に熟せり。余等の右の方は直に高くマザンボニ山脈の北面に對し、余等の左方には鬱鬱なる穀野、東部イチユリの支流に達りて、其先きには廣き路線形の岡あり、上に幾多の小屋を散布するを見る。而して此邊一體には粟、唐黍、芭蕉實等の耕作場ありて、何れも持主をして其豐富に誇らしむるに足る。

余等が此豐饒なる谷間に其歩を進むるや、挑戰の聲は四方の高所より湧き出でて、余等をして絶えず四顧の勞を取らしめたり。彼等土民の數も次第に增加し來り今は三百を以て數ふべし、手に〳〵鉈、棚、弓等を持して余等に對し、或は之を振り或は之を投ぐる擬似し、且つ種々了解する能はざるの言語を吐露して余等を怒罵するに似たり。彼等は其情を側し兼ねしものと見え、山を下つて余等に當らんと欲せる如くなりしが、又思ひ返へせし所やありけん、頂上に上り、而して余等の進む方向に向つて進めり—余等は鋭に添ひ、彼等は頂上に添ふて叫びながら、嘲りながら、又威喝しながら、余等と共に競走を爲せり。

第一列の穀物畝を通過し去るや、余等は又此渓谷に在る土人の怒號を耳にせり、而して彼等は將に山を上りて要害なる場所を占めんとを頭みしにや、山上の土人等は彼等に相圍を爲し、之れが防禦を爲せり。今や午後四時に近し、余等は是等莫大なる人數の怒號の中に在つて、一夜の休を得んが爲に是非とも合營を爲さゞるを得ず。幸にも手近き所にウンセラ、カムの高丘あり、其平坦なる頂上は地を扱くと殆ど一百尺の高さに在り。其形は恰も渓谷間の孤島の如く、河を去ると五百ヤードにして、マザンボニの山脈より二百ヤードの距離を占む。此ウンセラ、カムの頂上よりして、余等は一目東西兩面を瞰むとを得、北面には高山あり、而して中間にイチユリの支流を距て、彼の路線形の岡に對せり。地位は實に堅固なり、五十の銃手を以て其注意を欠くとなくんば、他く一千の兵に對するとを得べし。余等は此方位に向つて急ぎ歩を進めしに、土人等は余等をして紛擾を來さしめんとの爲にや、相率ゐて下部に突き下れり。駐くべきの暇を與へて余等を驚かしめ、而して河畔より進み來る所の一隊に遮合せり。先鋒に於ける斥候隊は數發の發砲を爲して其地を開き、余等は之に續いて以て一間頂上に進せり。荷物は人衆の肩を離れたり、數十の兵尖は又丘を下りて、彼部の上り來るものを保護し、此間一隊は合營の建設に從事し、又一隊三十人は水を得んが爲に河の方に赴けり。是れより三十分許を經て全隊は皆丘上に在り、合營は略ぼ落成せり、渇者の爲に水は供はれり、余等は暫ばし休憩の呼吸を爲して以て四面を瞰むに、其狀況は實に容易ならざるものあり。殆ど五十の村落は彼處此處に横はれり、村は村に接し、亂は亂に接し、視線の達する所盡く皆人烟を認めざるはなし。山間には如何なるものを住居せしむるや、余等知るとを能はず。坂上に於ける鎮靜の怒號は漸く其數を加へて八百の歩

きに進し、空間も爲に震動するが如きの勢を示せり。

蓋し彼等は此時に於て余等を襲撃せんとを欲せしもの丶如し。余等は終日十三哩の行程を通じて、焼くるが如きの日光の下に重きを荷ひ、疲勞の爲に大に其氣力を減損せり。併し此儘にして止みたらんには彼等は終夜余等をして眠に就くとを得ざらしむべきを以て、是非とも一戰の下に其膽を拉かざるべからず。故に於てか隊中の强壯なるものを撰拔して一隊を作り、以て彼等に當らしむるとに決せり。余等は丘上に立つて暫らく敵の狀勢を觀察せり。時に四人の斥候は遙かに前方に進めり。土人中强勇を以て任ずるもの又四人、等しく進み出で丶彼等に對せり。彼等は心に、我四人のものを以て恐るべきの敵に非らずと信ぜしなり。依て彼等は愈よ進み來りて凡そ一百ヤードの所に達し、弓矢を以て大膽に銃砲に對せり。我が隊、之に向つて銃砲を放つと五六發、而して其歩を退きしに、彼等は勢に乘じ、矢を弓に加へて以て進み來れり。卑怯にも我が四人は逃げたり、余等よりして一百の虚は等しく其行爲を誉めしが、今之を如何ともする能はず。此事は余等の側に對して大に不利益を與へたり、土人等は前徴好しと爲し、共に勝利の叫を擧げたり。此勢を制止せんが爲に、余等は銃手を派して進上に伏し、以て彼等を狙撃せしめたり。或はウンセラ、カムの丘の端に出でて、對面の坂路に於ける土人等を四百ヤードの距離に於て襲撃し、或は溪谷を河の方に出でて不意に土人の群を驚かし、或は再

びウンセラ、カムの麓を繞つて以て彼等を撃破せり。余等の彈丸なるヽート、ガトーは敵の村よりして一匹の牝牛を捕へ來り、余等は十一箇月目にして始めて能く牛肉を味ふとを得たり。日没に及び、余等も土人等も共に、明朝の再戰に雌雄を決すべきとを期して、以て各其部落と舍營とに入れり。夜に入り殿に就くに先つて、余は常の如く聖書の閲讀を始めたり。余は此旅行を始めしより以來殆ど毎日之を讀むとを怠たらず、已に一度之を通讀し終りて今は再讀を始め、已にモセスの法書の第二則に達し、彼のモセスがヤロシュアを警戒するの章に來れり「勇敢なれ、强剛なれ、恐るヽ勿れ、慄く勿れ、何となれば汝の神は汝と共に在り、彼れは汝を失はず又汝を棄てざるなり」と。

余は尙ほ之を讀むとを續けて、此章の終に至り書を閉ぢたり。余の心はモセスの言よりしてマザンボニの方に移れり。果して是れ余が非常の疲勞よりして心の迷を生ぜしものか、或は彼の四人が卑怯なる退却を爲せしを怨むの情よりせしものか、危難の際に當つて人衆の願むに足るべきもの少なきを嘆ぜしものか、余の心は暫ばし有無の間に彷徨へり。余等は疑もなく今は森林の部屬とは弱なるの土人に對せり。從來に於て余等の人衆が今日の如くに卑怯の行爲を爲せしとは非らず、余等の自ら觀察する所を以てするも彼等土人は決して侮るべきに非らず。何れにせよ余は少しく危殆の念を懷けり、部下のザンゼーバル人は唯運搬の用に供すべきものにて固より武術の修練あるに非らず、是を以て此廣

大なる草原の勇士等に對し、果して他く必勝を期するとを得べきか。余等は尚は此地位を明にせざるべからず、然らざれば是れ迄の辛酸を舐げて水泡に歸せざるを得ざるに至るべし。余の心は此廣原多數の土民に對して爲すべき所を決せしに由るものか、將た土民等が終日怒號の叫を擧げて余が耳を掩ひしに由て然るものか、余之れを詳にせずと雖ども、余は恰も耳に蜂を聽くが如くなりし。「勇敢なれ、強剛なれ、恐るゝ勿れ、驚く勿れ」と。余は正に此聲を聽きたるかの如くに思へり。余は之れに就て又考慮を選らせり。「汝は何故に此際に於て躊躇するとを爲すか。汝は假令斃らんと欲するも得べからず、奔りたりとするも奔るに所なし。遲くとは進むよりも尚は一層危險なり、故に汝は此時に於て、勇剛の精神を發揮せざるべからず。宜しく自信の念を以て神藥を一貫すべし、進めよ進め、成功は必ず汝の肩に屬すべきなり」。嗚呼上帝は眞に余等を棄てざるべきなり。

余は此決心を胸に收めて、將に眠に就かんとするに當り、更に思ふやう、必覺するに余等は彼等と戰を爲すの理由なきなり、余等は敢て彼等に寇するものに非らず、地の名、村の名だに知るものに非らず、彼等の余等に對する、又余等の何たるを知るものに非らず、故に余は敢て彼等を恐れずと雖ども、成るべく此間に戰を避くるの道を取らざるべからず。斯くて余は明朝の運動に就て策策を爲し、指令に向て其務を怠たる勿らんとを戒め、此マザンボニ、敵敵の中央に身を横へて以て悠々平和の夢を結べり。

九月七日は翌在せり。早朝余等は余營の周圍に柵欄の柵を繞き、鎗包を分與し、施條銃を咏吟せり。九時に至り朝來の寒氣は漸く退却して、大陽は霧を排して勃よく其光を發出せり。頃刻にして土人等は非常の大勢を以て四方の丘上に見はれ出でたり。角笛は余が曾てウンガ丹にウガンダに於て聽きしものと同一の聲を放つて北聲一層高く、二十餘の帥太鼓は四方の丘上よりして等しく其音を發出せり。彼等は呼べり、叫べり、一同聲を限りに怒號せり、聲は山より山に渉り、谷より谷に反響し、余等は全く彼等の圍む所と爲りて耳爲に聾するばかりなりし。午前十一時頃に至り、一隊の土人は近く此方に進み來り、言語を交ゆるに足るの距離に進しければ、ウンコロの產なるフェラーは我が隊中より身を抜して彼等に對し、激烈なる語勢を以て吾職を始め五に鐵砲黑番を遣ふして止まず。余は今始めて部下に能く此地の言語に熟するものあるを知りければ、彼れに命じて徒らに黑番を爲すとを止め、更に平和の條約に向つて談判を開かしめ、自他の言語も一變して稍々柔和なる發言を爲すに至れり。

フェラー曰く「鼓に立つ所の余等は唯防禦の爲に戰爭を爲すものなり。君等は何故に、余等が平靜に此地を通過するに對して襲擊を爲さんと欲するにや。五に先づ其心情を吐露し、理由を明にして而して後戰爭を爲すこそ至當なるものに非らずや」。

土人中の一人答へて曰く「君の言ふ所大に理わり、君等は何物なるか、何處より來り、何處に行かんと欲するものなるか」。

「余等は海に出てザンゼーバルより來りしものにして、余等の主側は白人なり。余等は是れより將にウゾロのナイアンザに向つて出發せんとを欲するものなり」。

「若し君等の間に白人あらば、請ふ之れを我等に示せ、而して後、余等は君の言を信ずるを得べし」。

此時スチーアス中尉は倉猶の中より進み出で、フェラーに由て彼等に紹介せらる。

フェラー曰く「君等は又何人ぞや、此地は如何なる土地にして、君等の酋長は誰なるや、是れよりナイアンザ迄は幾許の距離かりや」。

「此地はウンデニスマにて酋長はマザンボニなり。我等はマザンボニなり。ルウエル(ナイアンザ湖)は二日の旅行に由て達すべし、併し君等は五日を費すべし。是れより東方に當り、通路は唯一あるのみ、何人も迷ふとはなかるべし」。

斯くて自他の間に親密なる交際の端緒を開きければ、敵人としての感情は漸く薄らげり。時に余等は又「ウンデニスマに二人の酋長あり、其中の一人は余等に對して平和の交際を爲さんとを欲し、若し余等にして拒むとなくんば互に贈物を交換して以て両情の厚を敦むべしと言ひし」とを聞けり。余等は喜んで之を諾し、而して數時に渉つて挑戦の聲も止み、銃砲の音をも聞かざりし。但し河の近物に於ては土人等組として平和を爲すの意なかりしを以て少しく戦を交ゆるに至れり。

午後に至り、マザンボニよりの使者來り、余等が贈るべき物品を見んとを求めたり。依て余等は赤色なる軍服羅紗二ヤード并に一ダース許の真鍮片を以て彼等に贈り、又明朝を以て酋長自ら余等の倉營に來り以て余に義兄弟の約束を結ばんとを約せり。

無事なる一夜を經過して、翌朝余等の心は大に愉快を感じ、數時を經ずして親密なる土人等の來會するに至るべきとを豫期し、以て之れが準備等を調へたり。余等は又マザンボニよりして返禮の贈物を持ち來る迄は、出發すべからざるとを告げられしを以て、余等は尚ほ一日茲に滞在するとを爲せり。

朝來の空氣は新鮮に過ぎて寒冷なり、余等は今海面を抜くと四千二百三十五尺の高所に在り、鶴は尚ほ一面に高嶺の頂を蓋へり、余等は之れが爲に彼等は敢て時を怠がざるなるべしと思ひしが、須臾にして鶴は全く晴れ渡り、四山の紫色晴空に對して趣を添ゆるに至れり。スチーアス中尉、ウェッソン氏并は余は丘上の西端に在り、滿目の風光に對して地形の佳麗なるを賞し、何れの時か果して能く文明人種の家屋、此地を蔽ふに至るべきかを思ひ、彼れ是れ乃に一時の閑を遣るの話を爲せり。中にもスチーアス氏は此所を以てニューヤニークランドに比し、一の別莊を建てたきものなりと言へり。此の

地か彼の所か、余は其山に依つて余の家を辿て之れを呼んで「レーパンリ」と稱すべし。而して此所に余の家畜を畜ひ、半の類は彼の山腹に放つて自由に—。

此青赤だ終らざるに、土人等は續々對面の山を上りて、中央の小高き所に集れり。其地位は余等の立つ所を去ること直徑凡そ一千ヤード、一人わり恰も暴動敢喫的の觀を呈して以て彼等を激動せしむるものゝ如し。已にして彼れは一隊の人を引き連れて山を下ること凡そ三百尺、余等に對して十分許の演說を爲せしかば、フェアーをして之れを飜譯せしめしに、彼れは此地の酋長の名に由て平和を申出しものなりと言へり。然るに不思議にも土人等は彼の演說を爲し終るを待つて、一同又叫喊の聲を發し、狂奔にして四山に屯集せるの土人等皆之れに應じ、以て弓を取り、槍を振るに至れり。

此の如きの挙動は是れ平和を欲するものゝ爲すべき所に非らず。併し余等は尚は事實を確にすると能はざりしかば、フェアーをして谷を下り、近く彼の演說者の在る所に至て之を問はしめしに、疑もなく彼等は戰爭を布告せしものなり。土人の間に「カルタナ」は平和を意味し「カルタナ」は戰爭を意味するなり。故に平和を布告すると、戰爭を布告するとは至て間違易きものにて、爲にフェアーの誤解を來せしものなるべし。

彼等は言へり「我々は汝等との交通を欲するものに非らず、是れより我等は直に我等の牧牧を以て汝等を驅く其余營の外に打ち拂ふべきなり」と。時に一人の土人は横合なる林藪の中より突出して余等の通辯人を狙撃せしが、幸にして當らず。フェアーは途上、數本の矢を拾ひ來り、以て余等に告ぐるに此次第を以てしたり。

事體已に斯くの如し、余等は速に決する所なかるべからず、依て余等は此趣を告げて人衆を驅鞭し、非常の速力と勇氣とを以て彼等の上に一擊を加ふることに決せり。

一隊は點檢を終れり、五十の銃手はスチーアス中尉に由て率ゐられ、イチュッ支流の他の側に向つて剛愎なる土人に對し、又一隊三十の銃手は、シェフソン氏の下に屬して左方の坂路に常り、又ウレグに托するに二十の銃兵を以てし右翼の方に打ち出でしめ、而して、別にクレッドをして十人を率ゐてウンセラ、カムの山上に屯し、以て土人等が不時の襲擊に供へたり。シェフソン并にウレグは一丘の麓に沿ふて其歩を進むるを得るを以て、其二百ヤードの距離に達するの間は敵人の注意を惹かざらんことを期し、而して此間スチーアス中尉は遙か前方の溪谷に下りて專ら敵の攻擊を引受くることを爲せり。

數分を出でずしてスチーアスの隊は、敵に對して激戰を始めたり。土人は暫くの間は敢て黙く色なく馳りに其矢を我隊に向つて注ぎしが、スチーアス中尉は尽くも、土人が我が銃砲に對して敢て黙く沒

色なきは中間に在る一流を頼むが爲なりと思惟しければ、命を一隊に傳へて、進んで河を渡つて以て敵に對せしめたり。我が隊は命に從つて瞬間に他岸に進し、意よ砲撃を激にして彼等に迫りしに、今や彼等も殆ど如何ともする能はず、砲撃に勝を破り、銃丸に幾多仲間の斃るゝを見て何れも驚駭の叫を放つて逃れ去れり。忽にして我隊は進んで彼等の村落を奪ひ又自由に莨蓙の林を掠めたり。土人等は其逃走を續けて遂に北方に其身を隠くせり。茲にスターアス中尉は其人衆を集め、村落を焼却し、又他の部落に轉戰し、其砲撃の次第に激烈を告ぐるに至れり。

此間に於てウレヂの一隊は、一路を狩見して山上五百尺の高所に上り、其右方に於て一隊の土人等が山下の軍務を指揮して我が隊に當らしむるものあるを認めければ、忽ち之に向つて砲撃を加へ、尤も能く其功を奏せり。同時にウエアンの兵は左方の林藪中より突出し、力を併せて以て攻撃を加へたり、土兵は散々に敗北して走るに際し、ウレヂの隊は勢に乗じて之を追逐せり。

ウエアンは彼等の已に逃走せるを見て更に東方に向ひ、破竹の勢を以て二哩許の間を席卷せり。午後一時に至り、余等の人衆は今營に歸りしが、其中唯一人の輕小なる負傷者を出せしに過ぎず。各人皆驚くべき程の勇氣を振つて奮戰せり、昨日の開戰に敵に後を見せて、人衆の笑ふ所と爲りたる四人のもの共も、今日は此恥辱を回復せんとの意氣込を以て敵に對し、實地に能く、其汚名を濯げり。

午後二時頃に至り、土人等は再び隊を爲して歸り來りしが、余等も又各隊を派遣して之に應ぜしめたり。スターアス中尉は直に部下を以てイチュリの支流を渡り、土人を遠く北方に驅り去り、更に其歩を轉じてウエアンの兵に合し、而して東方一體を搜索せり。又ウレヂの斥候兵は一山の頂上に進して捜索を爲せしが、此間幾多の村落あるを見て、茲に其歩を止めたり。

夕刻に至る迄戰爭は絶えざりし。土人等は彼處に集り又此處に來り、追ひつ、追はれつ、進みつ、退きつ紛爭を爲せしが、日暮に至ては一人も見えずなり、余等が會營の近邊は凡て靜寂を告げたり。土人等は山上に止るものもあらん、併し大半は東方若しくは北方遠かの距離に退却せり。余等の開墾なる溪間に於ては、夜間土人を容るべき一個の小屋だも存せず。併し此日の戰爭は未だ全く土人の心を奪ふに足らず、彼等は余等が形勝の地に據りしの故を以て能く勝を制するを得たりと爲すものもあらん、譬人に對するの道は飽く迄之れを屈服するに在るのみ、若し全く其心を奪ふに至らずして之を止むる時は彼等は兎角復讐の矢を放たんとを欲するものなり。故に余等は彼等をして將來に惹も煩擾を爲さゝらしめんとせば、尚は一層强剛なる手段を取つて彼等をして心の底より屈服せしむるの法に出でざるべからず。

山下の一村に於て一頭の牝牛を見出しければ、部下のもの之れを捕り來り、以て余等に向つて牛肉第

二回の狙撃を爲せり。

十一日朝來降雨頻りなり、余等は午前十時に至る迄倉營の中に休憩せり。土人等又隊を組みて山の頂上に見はれければ、余はスチーアス。ウエフメン并にウレヂをして各其兵を率ゐて三方より山坂を上がらしめ、以て彼等の堅固なる地所を一掃したり。師逸部下のもの、山羊の一群を掛て之を人衆に分てり、斯くて土人等も余等と戰爭を爲すは損失のみにして一物の利する所なきを知りしなるべし。已にして彼は一度和睦を以て終らんとするの傾向を示せり。一人の土人は余等の倉營に對して一方の丘上に立ち、マザンボニの命を受けて來りしものなりと稱し、告げて曰く「酋長マザンボニは喜んで余等の贈物を受け、自ら來りて余等に謁せんとを欲したれども部下の青年等之れを聽かず、爲に戰を交ゆるに至りしなり。併し今は是等は概ね殺戮する所と爲るに至りしかば、彼れは來つて余等に贈物を爲し、以て將來の交誼を約すべし」と。

余等は之れに答へて「余等は尤も平和と親睦とを好む、併し彼等は已に余等に對して紛擾を釀し、余等を目して卑怯と爲し、婦人と爲し、以て一方ならざる煩勞を與へしを以て、今若し平和を求めんと欲せば、家畜或は山羊を供せざるべからず。而して若し彼等にして草を手にして來るあらば余等は敢て危害を加ふることなかるべし」と告げたり。

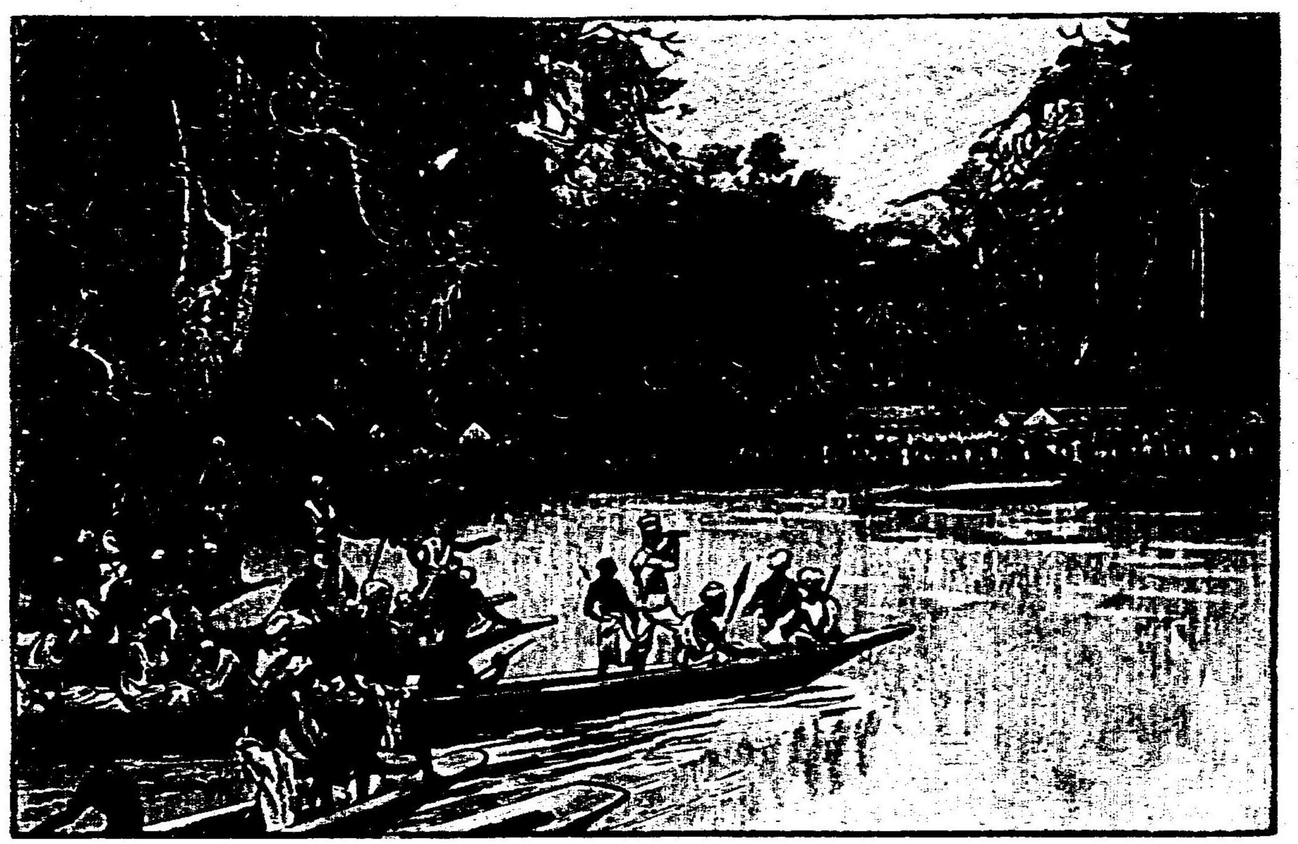
彼等が戰を爲すに當て一の弱風とも稱すべきものは、一勇士が山を下つて戰場に臨まんとするに當れば、其周圍に必ず十數の從卒を從ふ。是等は何れも其の勇士に比しては痩せ形のものなれど其擧止は至て活潑なるものあるに似たり。

ツザンボニの武器は、五尺五寸許の長さある弓、二尺八寸許の矢、并に槍等なり。彼等の槍は細長方形にして中にはウガンダ風のものも少なからず。矢の尖は幾重にも纏綿して一度物に當りし以上は容易に脱却する能はず。槍はカラグウェ。ウハ。ウクンダ并にイハンサロ等に於て用ゆる所のものと殆ど同一なり。

闘黒亞弗利加第二編終

ベナルヤに於て後隊に會合す

闘墨亞弗利加第二編



ヤ合會に隊後て於にナルナバ

闇黒亞弗利加第三編　目次

第十二章　アルバルトの湖に到着し而して一回インツヒリに歸る

余等既に主人の邸に許めらる○彼等の村々巡歩す○ガヒラの村○我が隊主人を問ひ○ウンヨロ酋長の歓色○主人の宴席に置ふ○カレトザの村○主人との談論○パンヤの村物々交換○余等が鎖位の供給○地位の坐所○スケーアス中尉カセンヤ島の人民と對話す○唯一路の向ふべきあるのみ○再び主人に強ひる○湖畔の風景○一回出に上る○數物の大群見○タンガニスマの沿岸○一回インツヒリに歸る○ボドー酋長の歓迎

第十三章　ボドー酋長の生活

余等の余等○ボドー酋長の水牛○スケーアス中尉への命令○キリンガ、ロンガの領土に向て彼れの出發○風雨に故の躊躇○夜分に於ける○ボドー酋長の大軍○給帯既則知に於ける婚○境界闘の國旗を顧へす○外科醫バーク井にアルソン大尉、イボトより來着す○彼等がマレムマ人と共に捕虜中の報告○スケーアス中尉鋼鐵舟を收めて來る○余等は直に湖水に進まんとを決ぜり○バークウット少佐に書輸を送ばんが爲めの歓送隊○余等井にアルソン大尉の歓迎○ウンヤ、婦人種の女王を歓迎す○余等が數物の歓○ボドー酋長の出發○余等及びアルバルト、ナイアンザ湖に出發す

第十四章　アルバルト、ナイアンザに再度の旅行

鋼鐵舟を送るの因縁○英佛利加林間の講和○過多婦人の出嫁非に就ての記臆○余輩イチュリ河を横切す○森林を開るに際してドクター、パークの奇怪○マッサに於て余輩す○ザンゼーバル人の狩猟○カムの岡に座る○土人との交際○「マレエ」間も「群のあるもの」是れエミンに関する最後の噂なり○酋長マザンガエ非にムワガ○エンゼーの種族○酋長ガセラの来訪○ムヒニマの酋長エフソン、マザンガエと紙幅の約束結ぶ○隣邦ムスロ非にムワガ○エンゼーの種族○酋長ガセラの来訪○ムヒニマの酋長○バセク非にソロムラの種族○種々なる佛利加人の狩猟○ムヒンガとの戦闘○ガセラと鎖○余輩カバリに達す○酋長「マレエ」の書翰を示す○エミンの書翰○ロエフソン非びにパーク鋼鐵舟を明水に置く○余よりロエフソンを通じてエミンに関へたる書翰の写○土人より不和の来聞。

第十五章　エミン、バシャとの會合

バンアに於ける余輩の余輩○カバリの酋長ムセアレ○バレガの殺害○カトンザ非にムセとの問答○情の林を来す○バンアの酋○ロエフソンよりの書○エミン。カサテ非にロエフソン、吉カバリに於ける余輩の余輩に来る○エミン、バシャ、非に関長カサテの記臆○バシャのターボン人○余輩のザンゼーバル人○来船ケイディア鎖○ベーカー非にブルー山○エミンに関するドクター、ロヤンカー非にフエルキンの記臆○カバ、レガの殺害○エミンに関するドクター、ロヤンカーの報告○余エミンと非に時来の力向を談す○酋長カサテの来訪○ウンサベに於る余輩の余輩非に横盗○酋長カサテ非にエハムト、ビリに対するカバ、レガの待遇○マルキ水小の角に関る○エミン、バシャ非に彼の兵卒○余○エミンに対する酋長非に彼れの容貌○エミンの地位○マホメタト、アチメタト○コンゴー州○外務省よりの公電。

第十六章　バシャと共に（前章に續く）

領土内に於ける鉄鎖ある電柱○ウンサベの暴風雨○鯨魚の子の窟○イブラヒム朗○ザンゼーバル人バレガ村に掠奪す○ドクター、パーク二人の失踪者を捜索す○邪びザンゼーバル人に就て○弘芳なる種族○余輩に対するバシャの贈り物○エミンの家具に紹介せらる○エミンが家族の国籍○ケイディア鎖ムスロ地方に向て出発す○マルキ非に彼れの給料○バシャ非に六分儀の用法○地方綿貿易の出立○来船ケイディア鎖非にナイアンザ鎖平本を載せて来る○使節の復命に向て帰るべき方法を調す○平本に対する余の使命○余輩がバゴロの道○ザンゼーバル人が道別の無謀○人夫キーナの失踪○ルウムンゾリの防禦○アルバルト湖水の以前の遠航者○英国イチュリ河に近き二個の高峰○カバ、レガに対し、エミンに向ての種種○エミン、バシャよりの二通の書翰○カドンザ非にムシリの国貿易余輩を歓待せんとの計策すとの報に接す○敵人夫キーナ○余輩カドンザの余輩を訪ふ○マザンガエ非にガセラの助を得て余輩ムシリの余輩を訪ふ、彼等は已に逝去せり○マザンガエ兵士の方陣○英佛利加大陸の書翰○ウンセラ、カムの岡に於て余輩す○酋長ムシリの贈物○ムシリの酋長和を請ふ。

第十七章　エミン、バシャの人と爲り

エミン、バシャの年齢非に其幼時○ゴルドン非にエミン、バシャ、バシャの給料○一千八百七十七年に於るゴルドン、バシャとの最後の書見○邪蹟非に操行に就てエミンが最後の供給○五年間の孤立○ウガンダに於るマケイの宮廷前○彼れの地位に対するエミンの才能非に対側○彼れの歴史非に其他の智識○エミンの勝利○彼れの立派なる日記○エミンがキリスタンに送れたる書に関してシャダリ、アイヤの語○エミン此時を論じ○エミンが余に与げたる博物学上の考察○バシャ非にデンカ種族○獅子の語○エミン非に鳥類の研究。

第十八章　後隊の扶助に向て出發す

諸酋長の懇請を得てムカンザに向ふ○ウガバ村の食物○ボドー酋長に到着○ウガリーヲに依托したる余等の疾病者○ボドー酋長に疾病者の引取らんが爲に赴きたるスチーアス中尉の報告○危險なる旅人の夜來○地勢の變化○余等も扶助隊を呼ぶに決す○アルソン大尉の不幸○余の無傷○ウンデー島酋長の記事○ザンゾーバル人○ヤンブヤに抵抗日數の推算○減船スタンレー號に關してスチーアス中尉の意見○パーシウアト少將非に後隊に關してスチーアス中尉との對話○スチーアス中尉に與へたる命令書。

闇黑亞弗利加第三編目次終

闇黑亞弗利加第三編

ヘンリー、エム、スタンレー著
五洲矢部新作譯

第十二章　アルバルト湖に到着し而して一同イブウヒリに歸る

余等遂に土人の坊に宿めらる○彼等の村か稱する○ガリウの村○我か眼土人か聞む○ウンヨロ高原の狀色○土人の宴會に關ふ○カトレザの村○土人との談論○バレヤの行例を詳にせず○余等か食物の供給○地位を移轉す○スチーアス中尉カセレヤ島の人民と對話す○唯一路の向ふべきあるのみ○再び土人に關する○湖畔の風景○一同山に上る○絶壁の大觀見○ウンゲ山スマの沃野○一同イブウヒリに歸る○ボドー酋長を驚かす

十二月十二日に於て余等は朝曉、天靜に、氣冷かなるの間に食餐を出發し、而して九時頃に迄る迄は敢て敵人の後影だも認めず。道は東を南へ山り、或は林藪中に入り、或は狹小の澤を沙り、或は淋其他の雜草を以て蔽へる沼澤を越へて以て進めり。村落は彼處此處に一周圍に明瞭なる沃野を繞らして、散在すると認めしが、余等は落も寥寥等の手段を用ゐず、彼等をして余等は、彼等の幼稚を爲すもの

酋長の嫉妬を惹てムカンザに向ふ○ウタバ村の食糧○ボドー酋長に邪術者が用ひんが爲に殺されたるスチーアス中尉の報告○疲弊なる婦人の復讐○也爲の絶望○余自ら其助勢を申ゆるに決す○アルソン大尉の不幸○余の無恥○ランゲー酋長の記憶○ザンゾーバル人○ヤンゾヤに抵抗し敗の顛末○緩和スチンレー殺に關してスチーアス中尉の意見○パーシウット少佐非に接線に關してスチーアス中尉との對話○スチーアス中尉に與へたる命令書

闇黑亞弗利加第三編目次終

闇黑亞弗利加第三編

ヘンリー、エム、スタンレー著
五洲矢部新作譯

第十二章　アルバルト湖に到着し而して一回イブウヒリに歸る

余等近に土人の塚に宿めらる○我等の村が襲撃す○ガリの村○我が隊士人が聞く○ウンヨロ高原の紫色○土人の夜襲に遭ふ○カトンザの村○土人との談論○バンヤの行樹を辭にせず○余等が銃砲の供給○地位を失墜す○スチーアス中尉カヤンヤ島の人民と對話す○唯一路の向ふべきあるのみ○再び土人に邂逅る○湖畔の風景○一回山に上る○動物の大群見○ウンゲムスマの沃野○一回イブウヒリに歸る○ボドー酋長を懲罰す

十二月十二日に於て余等は拂曉、天靜に、氣冷かなるの間に食糧を出發し、而して九時頃に至る迄は敢て敵人の後影だも認めず。道は東を南へ山より、或は林藪中に入り、或は狹小の溪を沙り、或は淺非他の細道を以て嚴へる沼澤を越へて以て進めり。村落は彼處此處に一周圍に豐饒なる沃野を繞らして、散在するを認めしが、余等は蔑も寮掠等の手段を用ゐず、彼等をして余等は、彼等の妨害を爲すやの

に非らず、唯一隊平和の旅人たるとを知らしめんが爲なり。然るに九時過に至り、朝來の寒氣は歩つて漸く暖氣を呼び起すや、彼等は突然挑戰の叫びに接し、而して是等の土人はウンドロスマ山脈の前面、小岡陵の上に散布する、一大村落のものなるとを知れり。彼等は敢て之を意に止めず、以て益す其歩を進めしに、彼等は好都合なりとや思ひけん、早や近くに來つて大膽にも我が右翼並に後部に迫れり。

午前十一時に至り、彼等土人は其隊二隅に分れて以て彼等の後に續き來れり。一は東方より來りしもの、他は彼等が已に無事に經過し來りたる、溪間の村民より構成せるものなり。

正午に及んで彼等の數は益々加り、高きに振り、勢に乘じて何れも叫んで曰く「日の米た沒せざるの内に、我等は我等の技倆を汝等に示すべし、汝等は一人も生きて明日の日光を見るを得ざるべし」。

此間彼等は休憩の爲に氣力を得て、再び荒原を通じて進行を爲せり。見渡す所兩側に於て一の村落あるなし、併し暴徒等は尚は其歩を續けて彼等を追躡し、時々威嚇の叫を発げて彼等の耳朶を打てり。

此時一人の狙撃を能くするもの我隊を離れ、四百ヤードの距離に於て彼等の二人に負傷せしめしに、彼等も一時は一歩を吸したるものゝ如くなりし。「如何にして此遠方の距離に於て一此丸が一我々を傷くるにや」と、彼等の中の勇士を以て任ずるものも之れが解釋に苦みたり。斯くて暫らくの間は彼等は

再び威嚇の聲を発げざりしが、今新に許多の加勢を得るに及んで、彼等は其意氣を回復し、以前に比して一層強暴の風を装ふ。依て我が後部は彼等に對して發砲を爲せしに、其効驗や著るしかりけん、彼等も遂に其歩を止むるに至れり。

三時三十分に至り、彼等はバビクの村に達す、其酋長を呼んでガビクと言ひ、村は「東部イチュリ河」の附岸に沿ふて、開ける平原の所に位す。彼等は東岸に於て暫ばし休憩を爲し、將に河を渡らんとするに際し、土人等は此時なりと押し寄せ來つて、彼等の渡航を遮斷せんとを企てたり。彼等は荷物を地に委して接戰の用意を爲し、已に河を渡りたる前部は引き返へして後部に力を併せ、敵に激しく土人等に對して發砲を爲せしかば、彼等は之を支ふる能はず、果ては四方に散亂するに至れり。斯くて彼等は彼等の行爲を併せんが爲め、河岸に於ける村落に火を放ち、又一丘二百尺の山上に於て彼等の屯在するを認めければ、勢を激して之に駆せ上り、彼等を撃破せんとせしに、彼等も早や其敵し難きを悟りけん、四方に逃げ去りて無事に其村落を彼等の陣營に供せり。茲に於て彼等は先づ四方に隙柵を結き、以て彼等の夜襲に備ふ。

彼等が彼等の村落に向つて火を放つ迄は、彼等は諸所に在つて叫喚を爲せしが、火の手の上るに及んで彼等は唖に靜寂を加へたり。思ふに彼等が感情的の心は此有樣を見て遂に落膽するに至りしものな

らんか。

余等が余等を爲せし所のカヒワの村は海面を拔くこと凡そ四千六百五十七尺の高さに在り。此日終日南東の風絶へず冷氣を送り來りしかば余等は疲天酣睡の中を通じて旅行するに際し、大に其疲勞を減却するを得たり。日沒後は遽かに寒冷を加へ、半夜に於ては寒暑針六十度を示す。余等の旅せし所は僅に九哩に過ぎざりしが、進行の間絲始土人等の威嚇を蒙りしが爲め、人々非常に疲勞を感ずるに至れり。

十三日、夜の明くるやはく余等は東方に向つて進發し、漸くて朝來の憂鬱に、土人等の注意を避け得んことを望りり。行程に敷き列れたる雜草は許多の露を含んで恰も沼澤を渉るの思あり。後部の人々は、土人をして之を道るの法を知らざらしめんが爲に、夜來の障柵を撤去し、後、時許にして前部に追着せしかば、余等は茲に命令を傳へて全隊を整頓し、以て再び今日の冒險に供へり。朝來三時間の間は一回平靜の中に旅行を爲し、東部イチュリ河の北方に横はれる廣大なる平原を眺み、又北方の空天を遶る所の高峻なる山脈に對し、而して南方には幾多の小山脈恰も互鎖の狀を爲して、其が溪間よりは又幾多の小流を噴出して風光を添ゆるあるを視、又是れより五哩許の前方に當つて、ウンドムメヤの東部よりパンガの關に沙り間隙の相接するものあるを認む、其が灣形の所には許多の村落を含みて、

水は以て軍を養ひ、家畜を飼ふに足れり。思ふに余等は此方向に進むことに由て、數時を出でず、彼の北方丼に南部山脈の間なる馬鞍形の頂に達するを得べし。則ち余等は此頂に散布せる二三の村落を目指して步を進めぬ。

然るに九時に至り、土人等は例の如く余等の周圍に見はれ出づ、此時彌は全く晴れ渡りて又一物の眼界を遮ぎるものあるなし。余等が長蛇形の一行は忽ち彼等の目指す所と爲り、挑戰の聲は數哩の間に反響して何れも野蠻的の眼光を放つて余等の進路を遮る。彼等は實に道理の規例なき人民なり、去日來余等は毫も彼等の所有財産を掠むることなく、至て平和の間に旅行し來り、今又彼等の面前に於て一も妨害を加ふることなきにも拘はらず、彼等は頻りに余等を戰鬪せんことを欲するなり。思ふに彼等は余等を以て怯弱なるものと爲すならんか。五十の土人は余等を去る三百ヤードの所に來り、聲を擧げて四方の土人を招集せり。其次第に許多の人數を增加するに至るや、彼等は勢に乘じて近く押し寄せ、以て我が後部を襲ひしが、施條銃よりの彈丸は久しからずして彼等に其爲すべき所を教へたり。

殆ど半時間の行程毎に小流あり、其兩側には人身を蔽ふに足るべき灌類の繁茂するあるを以て、余等は土人の此間に潛伏するものあちんを慮り、爲に一方ならざるの煩勞を受へたり。

余等は次第に馬鞍形の頂上に於ける村落の方に近附けり。已に此所に達せばアルバルト、ナイアンザ

も又甚だ遠きに非るべし。左るにても エミン、パシャは今將た如何なる境遇に立ち居るにや、恐くはゴルドンがカートームに於けるど一般、已に重圍の中に在つて、而して之を圍むもの〻一部は是れ則ち此邊に散在する土人の部屬には非るか。何ぞ彼等の數の多くして而して其行爲の甚だ强慢なるものあるや。

午前十一時に於て、余等が彼の馬鞍形の岡を隔てたる一小丘の所に來るや、土人の一隊道に據ふて進み來るを見る。須臾にして彼等は此丘より流れ出る所の一流を隔て〻余等の道を遮るに至るべきか、さすれば彼等と會戰の所は此源泉の上なる一丘の邊なるべし。我が前部は已に之を去ること一百ヤードの所に進せり、依て余は命令を傳へて彼の丘を直截に右方に廻り、諸荷物を頂上に委して以て戰の始まるを待たしむ。

斯くて余等が丘陵の上に進するや、土民軍の先鋒は恰も他の側の線に在り、時時の猶豫なく、双方共殆ど同時に戰端を開けり。併し山上よりして銃砲を雨ち下すに、彼等は山下に在つて、弓矢の能く敵し得べきに非らず、忽ちにして彼の恐るべき怒罵の聲を止め、共に顏色の色を見はせし折、我が前部は勢に乘じて彼等を追擊せしかば、何かは以て堪へ得べき、一同潮の如きの足並を以て逃け去れり。余等の部下は之れを追擊して殆ど喧酔の所に達せしが、「引き揚げい」の命令を傳へしに、一人も漏れなく、恰も觀兵式に於ける兵卒の擧動を以て召集に應ぜり。余は之を見て大に喜べり、其敗軍を追擊せしの勇氣よりは寧ろ此事を賞せり。蓋し斯くの如きの地に於て戰の危難は、敵の狀勢と戰爭の習慣とを知らずして、妄に追擊を爲すに於て存す。土人等は退却の途に於て陷穽潛しくは他の詭計を設くるなきを保せず、此事ウガンダに於ては甚だ少なからざるなり。此日の戰の如きは僅か四十の人を以て五百の土人を追ひ、而して其左右の丘上に殆ど三千の士兵之を護り居りしなり。

余等は再び隊を整ひ、列を正して前方に進み、十二時三十分に至り、一同休息の爲に止る。四方土人等の怒號を爲すものあるなく、人々皆少間を熟むを得たり。此間土人等は更に計畫する所ありしもの〻如し、彼等は午前の失敗にも懲りず、パンガ。パビク并にクビアル等諸部落の兵を併せて、以て再び余等に當らんとを決せり。

一時間休憩の後、余等は再び進行の途に上れり。路は至て平易にして且つ堅固なり、是れ此頃來彼等土人の往復頻繁なるに由て然るものか。十五分を經て余等は彼の馬鞍形の高丘に上りしに、遙か前方に一二十五哩許を隔て〻、闇黑色に青色を帶びたる高峯あるを認む、其高さは他の山嶺を超加して深く雲間に突起せり。部下のもの共は之を見て大に失望せり、何となれば彼等は尙は、此邊に横はると聽きにし湖水を見る能はざりしを以てなり。余は彼の山のウンヨロなるべきとを知り、而して此山と

余等との間は一大渓谷にして、北麓には則ちアルバルト湖の横はるものあるを信ぜり。然るに余等は此方位に在つて来た北水面を見る能はざりければ、ザンザーバル人等は頻りに喧噪を敢し「アッシャク、湖水は行けば行く程遠くなるものと見える」。余等は之を聞いて彼等を勵まし「眼を開いて待て、眼を開いて待て、汝等は遠からずして湖水を目撃するを得べし」。併し彼等の多数は敢て余が言に信を置かざるもの丶如くなりし。

路は次第に下れり。余等は次第にナイアンザの方に近寄れり。余等の下るに従つてウンゴロの峯は次第に高く、両側の岡陵も又甚高きを増すに至り、余等は遂に彷徨の間に一物を認め得るに至れり、蜃か霧か將た烟か。是れなん則ち余等が長途困難の目的たりしアルバルト、ナイアンザ湖にして水面は靜にして眠るが如く、其長さは北東の方に渺つて満目恰も大洋に對するに異ならず。彼等は此有様を見て暫ばし默然たりしが、心に確と其水面なるとを悟るに及んでや、一同無限の喜を爲し、其喝采の聲は山岳に反響するばかりなりし。

彼等が、或は叫び、或は飛び舞ふて余の周囲に集り、以て余が言の虛ならざるを利數するの間に、余は少しく茲に困難の事情あることを發見せり、則ち如何にして此湖水を航行し得べきかの疑問是れなり。余は盥盤鋭を取つて遙に湖水の岸を見渡せしが、一艘の獨木舟だも見出す能はず、又其岸に沿ふて大木の以て獨木舟を造るに足るものあるかを探り視るに、又一の之に適すべきものあるなし。余等は斯くの如く幾多危難の旅行を爲し来りしも、茲に舟を得ると能はざれは遂に百餘の功を一歩に欠くの憾なき能はず、如何にすべき。

併し無邪氣なる部下の人々は何れも是等の事に氣附かずして、頻りに天に對して感謝の意を表せり。余等は真鍮の器具幷に赤色の織物を以て他く土民等の舟を買ふことを得べきか。何れにせよ今茲に至つて躊躇するも益なし。

一面の風色は大に余等が豫期せし所のものに異る。余は曾てゾルクトリア、ナイアンザ幷にカンガニカ湖を周航し、又商原よりしてムタ、ウンザグの湖を歩みしとありしが、何れも小舟を得るに困難を感ずるが如きとわらず、又ゾルクトリア、ナイアンザ幷にカンガニカに於ては其周圍に於て獨木舟を造るの大木を得るとも難からず。然るに茲には、凡そ二十哩許に渉れる湖畔を通じて、眼に觸るゝものは、彼處此處の岩石の間に、唯少許の細草と叢林とを見るのみ。

晴雨計に由て檢するに、余等は今海面を去る五千尺の高所に在り。而して坂位は北緯一度二十三分の所に位せり。

余は大佐メメンの製作に係る、アルバルト、ナイアンザの地圖幷にサミュエル、ベーカーの記事等に

照して、湖上の形勢を視察し、後二十分間を經て再び山坂を馳せ下れり。スファーアス中尉の率ゐたる後部が彼の地を離るゝに際し、土人等は殆ど余等と同數の人數を以て追尾し來りしが、余等の前部が五百尺を下りしの頃、彼等は我が後部に衝突せしものと見え、頻りに發砲の聲を聞けり。

彼等は諸所に屯集して其矢を發射するに際し、叫んで曰く、「今夜は何處に眠らんと欲するか、汝等は已に圍まれたり、袋の鼠、籠の魚、汝等は遂に我々の計中に陷れり」と。

余等の部下は之れに答へて曰く「何處に眠るとも汝等の關する所に非らず、汝等卑怯のものよ、汝等果して能く余等を捷たりと思はゝ何ぞ速に來つて其技倆を試みざる」。

兎角亞弗利加人等が戰爭の布告は面白きものなり。

發砲の聲は頻繁なりしも命中せしものは少なし。形勢は余等に對して都合好からず、併し余等の側に在つても、暫らくの交戰を通じて負傷せしものは唯一人のみなりし。

斯くて余等は各十五分間毎に土人等を退ひ退けながら、凡そ三時間の間坂路を下りしが、土兵の中四十人許は尚ほ大勝にも余等に尾して溪底の平野に來れり。

余等は此夕山流を去ると半哩許の所に一流を渉り、一方には五十尺許の高さある絶壁の下に於て露營を爲せり。余等は余等に追尾し來りたる土兵は、必ず夜襲を爲すの見込なるべきとを察し、斯く一方は絶壁を負ひ、一方の林藪中には近所の村落より持ち來たりたる材料を以て障柵を築き、而して其前方には半圓形に番兵を配置して以て之に供ふ。果せる假日沒後凡そ一時間にして彼等は三方より突き來り、以て余等の露營を襲はんとせしが、忽ち十分の準備ある番兵の砲撃に遇ひ、驚き周章て、立ち去りたり。

是れにて全く土兵の足跡を絶ち、此夜余等は一同平和の夢を結ぶを得たり。

晴雨計を檢して、余等は先きに山頂に在りしの時よりも、已に二千二百五十尺の下方に在るとを知れり。

十四日に、余等は是れより湖畔に對して、五哩許に渉れる平原を横切つて進ひ。旅行の間余は注意して兩側の林木を吟味し、以て獨木舟を造るに足るものあるや否やを檢せしが、何れも「アカシヤ」「微其他の雜木に過ぎずして一も目に止まるべきものとてはなし。此地面と甚だ饒ならざるに非らざるべけれども、「ナイター」「アルカリ」幷に食塩の過多を含むが爲に斯くは雜木を生育するに過ぎざるものなるべし。併し余等は如何にかして土人より舟を借るの便あるべきを思ひ、又ェミン、パシャは余が先きに送りたる書翰に對して已に滊船を彼の邊に廻はし置きたるやも知れず、萬止むを得ざる場合には探拔を爲しても此目的に俟せんとを決し、以て一同此歩を急げり。

湖水を去る殆ど一哩半の所に於て、側らの林叢中に薪水を伐るの音しければ、余等は一同歩を止め通辨人を派して相話す所あらしめんとせしに、相手は婦人にて智ばし答ふる所もなかりしが、已にして突然彼の婦人は通辨人に對して鐵砲黒藥を始めたり。依て余等は斯かるものと相話すも益なきを知り、事は其儘に止みたり。

余等は先つ通辨人をして五六の人と共に湖畔の一部落—酋長カトンザの支配する所に至り、高止むを得ざるの外は敢て銃砲を弄するとなく、幾重にも道を求めて土人と平和の約束を結ばしめんとを指揮せり。此間余等は靜に歩を進め、部落を去る少許の所に於て之れが返答を待てり。

土人等は全く余等の近所に在るとを知らざりしなり。彼等が余等の部下を見るや大に驚きて直に逃去の用意を爲せしが、部下は急も之れを追ふとを爲さゝりければ、彼等も一同投矢の距離に於ける一小丘の上に止り、奇異の風を装ふて通辨人等に對せり。通辨人等の擧止至て穏かにして凡て危害の様子なかりしかば、彼等は余等の一行の近寄るとを許し、而して中に白人の居るあるを見て、彼等は漸く近くに進み來れり。其中四十の土人は勇氣を鼓して言語を交へ得るの距離に來りしかば、余等は彼等に對して、親交を求むると、之れが爲に珍奇の物品を贈るべきとを告げしが、彼等は猶疑して容易に之れに應ぜず。蓋し彼等は余等を以てワク、スクの徒に非らざるかを疑ひしものなり。ワク、スクは皆て余等と同じく銃砲を以て其身を装ひ、此地の土人等を掠奪せしものなりと云ふ。

斯くて余等は種々の談判を續けしかども、彼等は終に聽かず。彼等は余等と交歓を結ぶとを欲せず、又贈物を受くるとだにもなさず。但し彼等は余等に飲むべきの水を與へ、又湖水に向ふの道を案内すべしと言へり。

彼等は曰く「君等は一の白人を需むるものなるよし。我等はカパ、レガに一人之れあるとを聽けり。(カサクの事ならん)久しき以前に一人の白人(メソン、ベー)烟船に乘つて北方より來りしことありしが、併し其は我等が小供の時の事なり。其後は絶へて偖樣なる船を水上に見しとなし。余等又ウスッに於て奇妙の人あるとを聽きしが、其地は尚ほ遠より遠か遠方の所に在るなり。君等の道は湖水に沿ふて北方に赴くを宜しとす。凡ての惡人は皆彼處より來る、我等は未だ曾て惡人がイチュリ河の方より來りしとを聽かず。ワク、スクの如きも時としては其道より來るなり」。

斯くて彼等は余等を導ひて湖畔に至り、遙かに離れたる平原の中に立つて、余等に眼を告げ、之れが報酬にとて少許の物品を與へしも固く辭して受けず。余等は彼等が温樣の行爲に驚きしが、固より之に對して爭ふべき點もなかりしを以て其儘に、尤も不快の感情を懷いて余等の道を進めり。

余等は是に至つて次に別せり。恐らく聖弗利加に於ける凡ての探檢者も斯くの如き味氣なき地位に立

ちしとは是れなかるべし。千八百八十七年一月二十一日余等が英國を立ち出でしより、此十二月十四日に至る迄、今日の如く不愉快の感覺を懷きしとは是れなし。余等は始めより此處に於てエミン、パシャの動靜を聞知し得べきとを期せしなり。州令パシャは二艘の蒸氣船、端艇、獨木舟幷に數千の部下を以てして、僅に二日間の航行を以て一端より他の端に達し得べき湖畔に在つては、何れの地に於ても彼れの話を容易に聞き得べしと思ひしなり。彼れはタグーンを出でざりしが、所々山づる能はざりしか、余等の來るべきとは未だ聞知せざりしか。余等は疲勞の爲に止むを得ずして銅鍍舟をイボトに遣せり、常時に在つては余等は、エミン、パシャは余等を湖畔に迎ふるの準備を爲せしなるべく、或は然らざるも容易に小舟を買收するとを得べしと信ぜしなり。然るに今や實際に於てパシャは一回も湖水の南端を見舞ひしとなく、湖上一艘の舟を得るに所なく、又近隣の林間に於て一木の以て舟を造るに足るべきものわるなし。余等豈に心に不快を感せざるを得んや。

余等は草原に入りしより以來已に五箱の鍍包を裂せり。イボトに於て火尉ナルソン幷にドクター、パークの手に屬するものゝ外、僅に四十七箱の殘るものゝのみ。タグーンは水に依れば四日にして達し得べきも、陸に由れば二十五日間の旅行を爲さゝるを得ず。而して若し余等にして陸に由り、北方に旅行するものとすれば、土人との交戰の爲め一部部屬の比例を以て減ずに、二十五箱を裂さゝるを得ず。さすればエミン、パシャに會するに及んで余等の所有する所は僅に二十二箱に過きず。余等は勿論盡く之を彼れに渡すとを得ず、今假令此中十二箱を彼れに渡すとするも、余等は僅に十箱を以て、先きに三十箱を裂せし所の行程を歸り來らざるを得ず。パシャも十二箱のみにては格別の用を爲す能はざるべく、余等も十箱のみにては殆ど如何ともすべからず。余は此事を考へながら、湖畔を北方に進みしが、カシンヤ島の近所には一二の獨木舟あるべきとを思ひ、一兩日の間之を尋ねて、愈よ得る能はざる場合には、又他の方針を取るべきとに決せり。

此日正午の休憩に際し、余は人衆に對して意見を開陳し、止むを得ずんば退却の道を取らんとを告げたり。彼等は、直圓を始めとして何れも黙けり。

余更に語を續いで曰く「諸氏よ、願くば斯か嘆ずるとを止めよ。願くは余が心の苦痛の上に更に苦痛を加ふるとを爲す勿れ。何れにせよ、余等は境遇に從つて進退を決せざるべからず。若しカシンヤの島に於て小舟を見出す能はざれば余等は退却を爲すより他に道わるなし。余等は今明日を以て之れが捜索に從事すべし、併し是れより長きに沙つて止ると能はず、何となれば、斯くの如き荒原に在つては遠からず余等再び飢餓に迫らざるを得ざるを以てなり。彼の高原の邊に至るに非らざれば、此湖畔には一も耕作場あるなし。余等の目的とする所はエミン、パシャなり。余は彼れは彼れの蒸船を以て

此湖南に來り、土人に告ぐるに余等の來るべきことを以てせしならんと思ひしに、如何なる故にや、彼れは未だ茲に來らず。カトンヂの村人の告ぐる所に據れば、メンン、ベーの來りしより以來、他に漂船若しくは白人の此邊に來りしことなしと言へり。彼等はカサクのウンヨロに在ることを聽けりと稱す、併し船に由らされば、余等は彼れを見出すに於て殆ど一箇月の行程を費さゝるを得ず。

余は此間退却を以て最上の策と信ず、併し今若し退却を好まずとせば、他に一の道あり、湖畔の一村落を占據して茲に强固なる堡壘を築て、以て徐に時を待つなり—余等の話がウンヨロ。タブーン或はカパ、レガに達するの時を待つなり。さればカサク。エミン若しくはウンヨロの王等は使を派して余等の何物なるを探らんと欲するに至るべし。斯くすると定めた所で、茲に糧食の問題あり、此地の村人は耕作を爲さず。彼等は魚類を捕へ、食塩を造り、以て高原の住民に對して穀物と交易するなり。余等は日々遠方の距離に、彼の恐るべき山路を上下して以て糧食を爲さゝるを得ず。二三週の間は余等は依て以て此生を繋ぐを得べし、併し其後は土人は追々に糧食等を取り集めて遠隔の地に逃散し去り、遂に何物も得る能はざるに至るべし。斯くの如きは固より是れ策の得たるものに非らず。

余等の船にして茲に在らんか、或は一二艘の獨木舟を見出すことを得んか、余等の爲すべき所は斯くあるべし—余等は二十の人を以て之に乘り組ましめ、十日若しくは十二日間の糧食を積み、一人の吏員をして之を率ひて山嶽せしむ。此間余等は再び彼の高原に上り、粗能き場所を見出して堡壘を造り、集糧隊を南北西の三方に派して穀物、家畜等を集めしめ、以て徐ろに湖上に砲聲若しくは氣烟の立つを聽るべし。斯くて彼等の歸航するに至らば、余は一百の銃手をして湖畔に至らしめ、エミン、パレヤの境遇如何を問ひ合すべし。彼れは或は已にウヤヂ並にウワガの道に由つてザンヂーバルの方に出立せしやも知るべからず。余が境及外務省より聽きたる話に由れば、彼れは此道を取らんとを考慮しつゝあるものゝ如くなりし。併し今果して舟を見出す能はずとせば、余等は徒らに湖畔に逡巡して時日を費さんよりは寧ろ退いて林間に入り、イブウィリの如き野蠻なる村落に據て相當の方法を見出すに如かず、斯くせば此間に、余等はウガローワ並にイボトに留め置きたる人々をも集むることを得又多少の彈藥と銅鐵舟をも持ち來すに難からず。今此境遇に在つてエミンの所在を詳にする能はざるに際し、寧ろに奔走するは策の上なるものに非らず」。

午後に再び旅行を續けて余等はカヘンヤの島を去ると半哩許の所に於て倉營せり。

十二月十五日朝に於て、余はスチーアス中尉をして四十人を率ひ、岸より殆ど八百ヤードを離れたる、カヘンヤ島の人民に談判せんが爲に山嶽せしめたり。スチーアス中尉は途上一艘の獨木舟中に二人の漁人あるを認めければ、聲を上げて之を招きしも、此邊一帯は水至て淺くして小舟を以てするも數百

ヤードの中に近寄るとを得ず。泥濘深くして其幾尺なるを知らず、何人も之れに進み入る能はず。水側に沿ふて一條の草垣繁茂せるものあり、其形恰も漁尖の造りにし水柵の如く、潮水の南端に迄達れり。源人は遥か彼方なる上陸所を指して彼處に廻はれと言ふ如き有様を示せり。午後に至り、余はヱフンン并に四十の土人をして彼の土人の指示したる上陸所に至り、以て問はんと欲する所を問はしめしに、彼等は左の如く答へたり—

「然り、我等は畑船が久しき以前に茲に來りしとを記憶す。中に一人の白人あり、亞て鄭寧親切の人なりし。彼れは河馬を射て其肉を我等に與へしが、汝は恰も今君等が立つ所に於て横はれり。此潮水—此近邊には一の大なる舟とてはなく何れも皆二三の人を容るゝに過ぎず。我等は魚類と食物とを携へて以て、對岸に於けるウンロロの住民より小舟を買ひ求むるなり」。

「君等は余等の書簡をウンロロに届くるとを得べきか」。

「否其事は我等の爲し得べき所に非らず、酋長と勇士とに非れば此事を爲すを得ず、我等は貧民なり、奴隷の如きものなり」。

「君等は其舟を賣るの意なきや」。

「個樣なる小舟は君等を何處へも運ぶと能はず、唯潮湖に於て小魚を漁するに適するのみ。何れの道より君等は來りしや。イチュリから。ア、然らば君等は惡人の仲間に相違なし。我等は誰れも惡人が彼處より來りしと言ふとを聽かず。若し君等にして惡人ならずとせば、君等は彼の白人(メンン、ベー)の如くに畑船に乘り、而して彼れの如く河馬を射與ふべき筈なり。向ふへ行け、向ふへ行け、併し君等は途上君等と同じやうなる惡人に出逢ふて戰を爲さるべからず。此潮水の近邊并に平原の中には食物とてはあるなし。四方を見よ、何處に穀物を作るの處ありや。君等は山の方に赴くを可とす、彼處には十分の食物を見出すを得べし。我等の戰士は旗を造り、魚を捕へ、之を山上の住民に持ち行きて穀物豆類と交易するなり。此島は則ちカセンヤにしてカバロに屬し、此次の地はナイアムサレと呼ぶなり。行け〳〵、もう少し離き所に行け。先きに來りたる白人は一夜彼れの船に於て此地に止り、而して翌朝歸り去りしが、我等は其後他の白人を見しとなし」。

余等は實に今は進むも益なきの場合に立ち至れり。余等今強いて此道をたどらんと欲せば、絶へず戰はざるを得ず、殺し、殺され、打ちくづし、打ちくづされざるを得ず。ウンロロに向はんとするにも、余等カバ、レガに與ふべき金なく、又物品なし。クダーンに進むとは徒に彈丸を費すと多くして、漸くにしてユミン、バルヤの野に達し、彼れを救ふの目的を以て却て彼れに救はるゝに至るやも知るべからず。余等は今暫退くの一途あるのみ、同時に余等の糧食は盡きたり。

夜來の評議に於て余等は遂に退却の事に一決せり。則ち是れより十八日間の旅を以てイブウィリに歸り、先づ彼處に堅固なる柵を設けて、然る後餘全なる一隊をイボトに送り、鋼鐵舟、荷物、火藥丼に病氣回復者等を迎へ來り、而して又一隊をウガロータの酋に送つて同樣の事を處置し、其後更に少佐バーナクット丼に後隊の安否を確め、凡て全勢を揃へて十分の用意を爲し、再び敵に來つてエミン、パシャに逢するの目的を全ふせんとに決せり。

翌十二月十六日、激しき暴風雨の爲に、余等は九時迄余營に止れり。平原の地質至て堅くして水を吸收するに懶うく、斯くて余等は最初一時間程は留水、膝を沒するの邊を渉り、其れより靜に高まりたる平原を過みしが、此邊の草は僅に三寸許の高さにして數十ヤード毎に一二の低き木あり、恰もロンドン市内に見る所の公園の風致に異ならず。須臾にして湖水を去る一哩半許の所に來りしに、野獸の一群を認めければ、余等之を獲て糧食に宛てんと欲し、種々の奔走を爲せしの後漸くに一匹の「クド」を得て其肉を分てり。此間ヘート、ガトーは又一匹の牝鹿を獲て來る。カセンヤの上陸所を去ると二哩許の所に於て余等は一回其歩を止めぬ。

余等が茲に止りし所以はカトンザの土人に向て余等の所在を示さゞらんとを欲せしに由る。夜に入りて余等は其旅を續け、岡陵の麓に達する道に出つて、曉の頃はひに峻坂を上り、以て頂上に達せんと

東部イトゥリ河に於ける懸橋

ウナヤ村の景